

## 第1章 津島岡大遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

津島岡大遺跡は、岡山大学津島地区構内に分布する遺跡群の総称である。岡山大学は岡山平野の北辺に位置しており、周辺には著名な津島遺跡<sup>(3)</sup>をはじめとして多くの遺跡が立地している。1997年までの調査によって構内で確認された遺跡群の広がり、構内西側の一部をのぞく、ほぼ全域に及んでいる。したがって津島岡大遺跡は近接する周辺の遺跡と連続する可能性があるが、南側、東側の一部以外、大学敷地外への広がりを確認するには至っていない。

岡山平野は、中国山地から南流して瀬戸内海にいたる吉井川、旭川、高梁川の三大河川とその支流、小河川の沖積作用により形成されてきた。この岡山市津島一帯は、岡山平野を南流する旭川の西岸に広がる沖積平野の北半を占め、すぐ北側には東西に、半田山、ダイミ山、烏山といった、標高150m前後の小山塊が連なる。この平野は本来、旭川の旧河道やその支流、それらにより形成された自然堤防などの微高地とが入り組んだ複雑な地形をなしている。

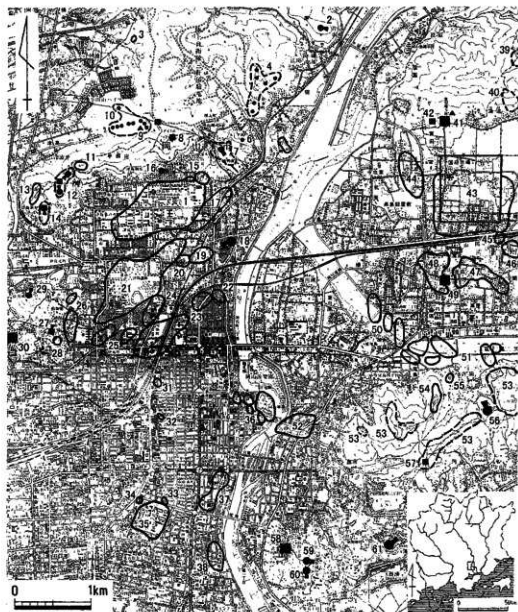
縄文時代以降、津島地区周辺でも、本遺跡に隣接して形成された朝寝鼻貝塚<sup>(2)</sup>が知られ、津島岡大遺跡のこれまでの調査においても、縄文後期・晩期の、貯蔵穴・炉跡などをはじめとした遺構群、土器や石器群等の遺物がまとめて検出されている。他にも、旭川東岸地域の百間川遺跡群<sup>(3)</sup>では後・晩期の遺構、中期末から晩期の土器群の検出などが知られている。

北部九州で稲作農耕が導入された弥生時代早期には、それまでの狩猟採集経済から農耕社会へと社会構造が転換する。瀬戸内地域においても、津島岡大遺跡に隣接する津島江道遺跡<sup>(4)</sup>で弥生時代早期段階とされる水田が調査されている。

稲作農耕の開始は、また同時に沖積平野の本格的な土地開発の開始でもある。津島一帯においても、本遺跡の南に隣接する津島遺跡での弥生時代前期の水田耕作遺構の検出事例をはじめとして、同じく東に隣接する津島江道遺跡、また津島岡大遺跡においても本調査地点のほか、第3次、5～7次、11～17次の各地点で弥生時代前期の水田畦畔が検出されている。津島周辺では、微高地縁辺部にかなり広範に小区画水田が帯状に広がっていた状況が復原される。また旭川の対岸に位置している百間川遺跡群<sup>(5)</sup>でも前期の水田遺構が検出されている。

中期以降、河道の埋没が進み、水田域の拡大や、灌漑機能の向上などによって、生産力が増大したと思われる。そうした生産力の増大を背景に分村化が進み、岡山平野の旭川西岸地域でも津島<sup>(6)</sup>、南方<sup>(7)</sup>、上伊福<sup>(8)</sup>、天瀬<sup>(8)</sup>、鹿田<sup>(9)</sup>、津島岡大遺跡などの沖積平野の集落が増加する。

弥生時代後期から古墳時代中期にかけては、津島周辺には有力な首長系群によって弥生墳丘



1. 津島岡大遺跡(縄文中期末～)
2. 片山古墳(前期)
3. 白髪奥遺跡(古代製鉄)
4. 宿古墳群
5. 妙見山城跡(戦国)
6. 不動堂古墳
7. 一本松古墳(中期)
8. ダイミ山古墳(中期?)
9. 津高住宅田内遺跡群(製鉄遺跡含む)
10. 佐良池古墳群(後期?)
11. 半田山城跡(戦国)
12. 都月坂墳墓・古墳群(弥生後～古墳前)
13. 鳥山城跡(戦国?)
14. 七つ坑古墳群(前期)
15. 朝寝真貝塚(縄文前～後期)
16. お塚(塚)古墳(中期)
17. 津島江道遺跡(縄文後期～)
18. 神宮寺山古墳(前期)
19. 北方地藏遺跡(弥生～)
20. 中溝遺跡(弥生～)
21. 津島遺跡(弥生早期～)
22. 広瀬遺跡(弥生)
23. 南方遺跡(弥生)
24. 絵図遺跡(弥生～)
25. 上伊福九坪遺跡
26. 上伊福西遺跡(弥生)
27. 津倉古墳(前期)
28. 妙林寺遺跡(弥生)
29. 青除古墳(前期)
30. 石井屋寺(奈良～中世) 31～34. 散布地(弥生)
35. 鹿田遺跡(弥生中期末～)
36. 岡山城(戦国～江戸)
37. 天願遺跡(弥生)
38. 二日市遺跡(弥生～近世)
39. 龍ノ口山頂古墳群(後期)
40. 湯迫古墳群(後期)
41. 黄田院寺・薬跡(白鳳～奈良)
42. 唐人塚古墳(後期)
43. 備前国府推定地
44. 備前国庁跡(古代～中世)
45. 雄町遺跡(縄文晩期～平安)
46. 乙多見遺跡(弥生)
47. 赤田東遺跡(弥生)
48. 赤田西遺跡(弥生～古墳)
49. 輪多院寺(弥生～中世)
50. 宮岡川原尾遺跡(縄文中期末～)
51. 百間川沢田遺跡(縄文中期末～)
52. 古京遺跡(弥生中期)
53. 輪山古墳群(後期)
54. 妙禰寺城跡(戦国)
55. 輪山219号遺跡(旧石器)
56. 金蔵山古墳(前期)
57. 狹間台古墳(中期)
58. 網原院寺(奈良～平安)
59. 網原茶白山古墳(前期)
60. 輪山109号墳(前期)
61. 漢茶白山古墳(前期)

図1 周辺遺跡分布図

墓、および前方後円(方)墳が連続して造営される。本遺跡の北に連なる半田山山塊には、西から七つ坑古墳群<sup>(2)</sup>、都月坂墳丘墓・古墳群、ダイミ山古墳、一本松古墳群が、山麓にはお塚(塚)古墳群<sup>(3)</sup>があり、やや東に離れた平野部には神宮寺山古墳が築かれる。津島周辺には、これらの造墓に関わった集団の存在が想定できるが、これまでの津島岡大遺跡の各地点の調査においても弥生時代後期から古墳時代前半期の遺構が多く検出されており、このような造墓活動に関わった集団の存在が考えられる。続く古墳時代後期になると、中期までの造墓活動が途絶え、周辺に墳墓が認められなくなるが、本遺跡の第6次、7次調査地点に加え、本調査地点では該期の水田畦畔が確認されている。これらの水田はいずれも畦畔の方向を正方位にあわせたものであるが、本遺跡の南に位置する中溝遺跡<sup>(4)</sup>でも古墳時代後半期に畦畔の方向を正方位にあわせた水田が営まれており、本調査地点の水田畦畔を考えるうえで重要である。さらに、第10次調査地点では、2棟の堅穴式住居跡が検出されている。該期の集落の状況をうかがい知る貴重な成果といえよう。

古代には岡山平野に本格的な条里制が施行される。津島遺跡では条里制の施行に関連する可能性の高い整地土層や畦・溝などが検出され、津島岡大遺跡では本調査地点のほか、第1、6、12次調査地点において坪境として機能したと考えられる東西方向の大溝を検出していることから、津島周辺では条里制の施行はかなり早い段階から行われていたものと思われる。また、本遺跡の東に隣接する津島江道遺跡<sup>(5)</sup>では古代の官衙遺構と考えられる建物群が検出されており、津島一帯は古代の御野郡の中心的な位置にあったと考えられる。

古代の条里制の実施を経て中世に至ると、岡山平野北半では、それ以前の複雑な微地形が完全に解消されるようになる。津島岡大遺跡の各調査地点での状況も、中世以降は一面に平坦な水田が広がった様子を示している。近世にいたって、津島地区を含む御野郡一帯は岡山藩有数の穀倉地帯となるが、1907～8年に、当時の御野郡御野村・伊島村に陸軍屯営用地が造成され、また近年の急速な市街化もあって、かつての田園風景は全く一変することになる。岡山大学津島地区の現在の校地は、戦後、この陸軍屯営地を引き継いだものである。

## 註

- 1 津島遺跡調査団 『昭和44年度岡山県津島遺跡調査概報』 1969  
岡山県教育委員会 『岡山県津島遺跡調査概報』 1970
- 2 鎌木義昌・亀田修一 『朝寝鼻只塚』 『岡山県史 第十八巻 考古資料』 1986  
これまで縄文時代中期に形成されたとされてきたが、1997年に岡山理科大学が行った発掘調査では縄文時代前期に遡ることが確認された。岡山理科大学教授小林博昭氏教示。
- 3 岡山県教育委員会 『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査』 1～6、岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39・46・51・52・56・59、1980～1985
- 4 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 『津島江道遺跡』 『日本における稲作農耕の起源と展開』

—資料集— 1988

この水田遺構については未報告であるため、不明点が多い。今後正式な発掘調査報告書の刊行を待って検討する必要がある。

- 5 岡山県教育委員会 『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 1985
- 6 岡山市遺跡調査団 『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』1981  
岡山県教育委員会 『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財報告40 1981
- 7 岡山県教育委員会 『上伊福遺跡』岡山県埋蔵文化財報告14 1984
- 8 出宮裕尚 『大瀬遺跡』『岡山県史 第十八巻 考古資料』1986
- 9 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 『高田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第3冊 1998
- 11 近藤義郎 『都月坂二号弥生墳丘墓』『岡山県史 第十八巻 考古資料』1986  
近藤義郎 『都月坂一号墳』『岡山県史 第十八巻 考古資料』1986
- 10 『岡山市七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団 1987
- 13 近藤義郎 『岡山県津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概略報告』『古代古物』10集 1988
- 14 鎌木義昌 『神宮寺山古墳』『岡山県史 第十八巻 考古資料』1986
- 15 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 『中瀬遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』1988
- 16 河本清 『郡衙』『岡山県史 第二巻 原始・古代1』1992

津島岡大遺跡関連文献

（岡山大学埋蔵文化財調査室）『岡山大学津島北地区小橋法日黒遺跡（AW14区）の発掘調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 1985、『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ』（農学部構内B H13区他）岡山大学構内遺跡発掘調査報告第2冊 1986、『岡山大学構内遺跡調査研究年報4』1987。

（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 1992、『岡山大学構内遺跡調査研究年報10』1993、『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 1994、『津島岡大遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊 1995、『津島岡大遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊 1995、『津島岡大遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊 1995、『岡山大学構内遺跡調査研究年報12』1995、『岡山大学構内遺跡調査研究年報13』1996、『津島岡大遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊 1997、『岡山大学構内遺跡調査研究年報14』1997。



## 第2章 調査の経過

### 1. 調査に至る経過

岡山大学津島地区構内における本格的な発掘調査は、1982年度に行われた津島岡大遺跡第1次調査に始まり、1992年度までに8次にわたる発掘調査が実施され、各地点で良好に遺構・遺物が包含される状況が確認されていた。

こうした状況下で、工学部生体機能応用工学科が新設されることとなり、校舎の建設が計画された。建設予定地は1988年度に工学部の建物建設計画に際して行われた6ヶ所の試掘調査<sup>(12)</sup>の範囲内にあたるうえ、その試掘結果をもとに1988～1989年度に実施した生物応用工学科棟建設<sup>(13)</sup>にともなう発掘調査<sup>(14)</sup>（津島岡大遺跡第6次調査）地点の東隣りに接する。上記の試掘・発掘調査

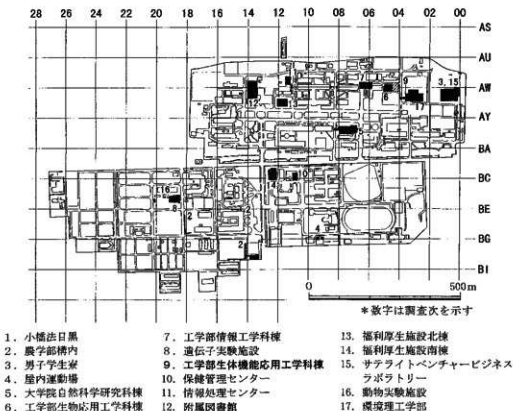


図2 津島地区構内座標と各調査地点

## 調査の経過

査の成果からは予定地に縄文時代から近世・近代におよぶ遺跡が広がることは明白であり、発掘調査を実施することとなった。特に第6次調査で注目された縄文時代後期の貯蔵穴群と古代の大溝に関しては、より詳細なデータの確認が期待された。

上記の経過をうけて、1992年7月1日から調査面積630㎡、調査員2名で本調査を開始した。

## 2. 調査組織

### 調査体制

#### 管理委員会

学 長	高橋 克明	教養部長	脇本 和昌
文学部長	好並 隆司	自然科学研究科長	富永 久雄
教育学部長	伊澤 秀而	資源生物科学研究所長	兼久 勝夫
法学部長	江口 三角	附属図書館長	萬成 勲
経済学部長	神立 春樹	医学部附属病院長	松尾 信彦
理学部長	山口 恒夫	歯学部附属病院長	松村 智宏
医学部長	木村 郁郎	地球内部研究センター長	松井 義人
歯学部長	中後 忠夫	医療技術短期大学部長	喜多嶋康一
薬学部長	田坂 賢二	学生部長	長堀 金造
工学部長	河野伊一郎	事務局長	大谷 利治
農学部長	河津 一儀	埋蔵文化財調査研究センター長	稲田 孝司

#### 幹事

庶務部長	田中 武雄	経理部長	山口 健太郎
施設部長	北原 實		

#### 運営委員会

文学部教授	稲田 孝司（センター長）	農学部教授	千葉 喬三（調査研究専門委員）
文学部教授	狩野 久	教養部教授	定兼 純明
教育学部教授	高重 進	文学部助教授	新納 泉（調査研究室長）
工学部教授	本田 和男	施設部長	北原 實

調査主体 高橋 克明（岡山大学学長）

調査総括 稲田 孝司（埋蔵文化財調査研究センター長）

調査主任 土井 基司（埋蔵文化財調査研究センター調査研究員）

調査員 松木 武彦（埋蔵文化財調査研究センター調査研究員）

阿部 芳郎（ " " ）1993.1

宮樫 孝志（ " " ） "

山本 悦世（ " " ） "

### 3. 調査の経過

調査は1992年7月1日から造成土掘削を開始した。機械による造成土取りも10日程度で終了し、7月10日からは本格的な発掘調査に入った。以後は、津島岡大遺跡第6次調査の成果や試掘のデータを踏まえ、明治層・近世層・中世層・古代層と、それぞれの面で耕作関連遺構（溝・畦畔・畝・野臺など）の調査が続いた。いずれの面も砂を被る保存状況の良好なもので、平面的な広がりからも、6次調査以上に耕作遺構の有機関係を捉えることができたといえる。

古代層の調査では、10月初旬に、調査区北半にあたる微高地部（耕作域）と同南半部を東西に走る大溝の最上層溝の調査を終了した。この段階で調査方法の再検討を行い、その後は調査区を大きく微高地部分と古代大溝部分とに二分し、それぞれの調査を分離して進めることとした。その理由は、次のような点にある。大溝は本調査の中でも特に重要視される遺構であり、少なくとも4条の溝が複雑に重複するなど良好な遺存状態を考えると、十分な調査にはある程度の時間が必要である。それに比べ、微高地部は土量も遺構も格段に少ない。こうした両者の調査を併行して進めると時間的効率を著しく低下させるという判断からである。微高地部は10～11月に古墳時代後期・前期層（10・11層）の調査を実施した。大溝部の調査は10月を中心に進み、溝の掘り換えと掘削面との関係や複雑に掘り変えられた状況を明確にすることができた。11月に入ると大溝の調査も終了し、同溝の周縁部を含めて11月中旬に古墳時代後期・前期の調査を終え、微高地部の調査に追いつく状況に至る。

ここで、本来の調査方法に戻すことも可能であった。しかし、下層確認の結果、調査区南半部は縄文時代の遺構が非常に深いレベルに存在し、調査土量が北半部に比べ格段に多い状況が確認されたため、調査区南半部の縄文対応層への掘り下げの必要性が急務と判断された。幸い、大溝部分は古墳～弥生時代層がほとんど消失し遺構への影響も少ないことから、周囲に先行して同層まで掘り下げる方針を立てた。11月中旬に一部で縄文層の掘り下げにかかり、12月には貯蔵穴の存在などを確認した。大溝以外の範囲では12月に弥生時代層（12・13層）の調査をほぼ終了した。その中で大溝以南の狭い範囲では、引き続き縄文時代対応層への掘り下げを進めた。

1月には北半部では、弥生時代前期～早期対応の「黒色土」の調査を終え、南半部では下層の確認を行いながら、縄文層の掘り下げを継続していた。その間、弥生前期に対応する溝や比較的初期に検出していた縄文時代貯蔵穴の調査も併行して行っている。このように、古代大溝の影響が消失した段階で、調査区は縄文時代の叡高地部（調査区北半）と谷部（調査区南半）とに二分される形となったが、土層面の統一は困難で、各地点で順次掘り下げを進めるといふ、モザイク的調査を継続した。

全体が縄文時代の面に揃い、谷部で数基の貯蔵穴が調査された状態で、1月23日に現地説明会を実施した。その後、調査の進行を鑑み、1月末以降は調査員を2名から4名に増員して調査体制の強化を図った。

その後、叡高地部では23層上面での縄文時代遺構の本格的な調査を開始し、基盤層の23a層で焼土土坑・溝などの調査を行った。一方、谷部では掘り下げの途中、弥生対応層（18層）で一部溝を検出したが、東半部は大半が消失しており、中央土手・調査区壁などで全体像を復元することとなった。2月には、貯蔵穴を中心とした縄文時代の遺構の調査が進む中、南端部の基盤層と考えた22層上面の土器群を調査しつつ、最終確認を行ったところ、より下層（23b層）で土器が出土し、基盤層が23c層であることが判明する。土器群周辺は土坑なども含めて、便宜的に設定したグリッドに沿って記録・取り上げを行った後、さらに掘り下げを進め、23層で貯蔵穴などの調査を実施した。貯蔵穴は合計10基となり、中にはアンベラ（樹皮製繊維で編まれたカゴ）の残存も認められた。アンベラの取り上げを行い、2月19日に全体写真撮影とともに発掘調査を終了した。

## 註

- 1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学橋内遺跡調査研究年報』6 1989
- 2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『津島岡大遺跡』6 1995

## 第3章 調査の成果

### 1. 調査区の位置と区割り

#### a. 位置

津島岡大遺跡は、岡山大学の津島キャンパス内の遺跡群の総称であり、岡山市の旧市街地の北半に位置する(図1)。本調査地点は其中でも津島北地区の東半部に含まれ、大学敷地をめぐる北側から約80m南の距離にある。北側は工学部仮講義棟、西側は生物応用工学科棟、東側は馬場、南側はテニスコートに囲まれた範囲である(図2)。

周辺部では、これまで数回にわたる調査が行われている。津島地区では最も多くの知見が得られている地区にあたる。周辺の主要な発掘調査として第3次調査、第5次調査、第6次調査、第7次調査がある。また、第9次調査以後、現在までに第15次調査、第17次調査を行っている。第3次調査、第15次調査は本調査地点から東に約200m、第5次調査は南西に約180m、第7次調査は西に約70m、第17次調査は東南に約30mの位置にある。また、第6次調査は本調査区の西辺に隣接している。これらの調査区では縄文時代の貯蔵穴や溝などの遺構や多くの遺物、弥生時代前期の水田、古代の坪境として機能したと考えられる大溝などが検出されている。

#### b. 構内座標の設定

岡山大学津島地区構内では、真北方向に軸をあわせた構内座標を設定している。これは、本地区での全体的な地割りの方向が、ほぼ南北、東西の方位に合致するとともに、市街地中央で正方位の条里地割りが認められるという現況に則ったものである。また、キャンパス北に位置する半田山山塊の一部が大学の敷地に含まれており、構内座標の原点は構内全体を覆うためにキャンパスの北約900mに置いている。その起点となるのは、国土地理院第5座標系の南北軸座標値( $X = -144,500\text{m}$ )と東西軸座標値( $Y = -37,000\text{m}$ )の交点である。

そして、原点から一辺50mの間隔で、東西方向と南北方向に方形の区割りをを行い、上述の座標原点から、東西線については北から南へAA~BGライン、南北線については東から西へ00~48ラインとしている。こうして区割りした各々の50m四方のグリッドに対しては、二方向の軸線の名称を組み合わせた北東隅のグリッドラインの交点の名称を付し、AA00のように呼称

## 調査の成果

している。

### c. 調査区の区割り

本調査区には東西方向にAWラインが通り、調査区東辺約5m東に04ラインが通る。したがって地区としてはAV04、AW04の2グリッドにまたがることとなる。しかし、50mグリッドのみでは調査や報告の便宜上不都合が生じるため、これをさらに細分して一辺5m単位の小グリッドを設け、大グリッドの中を100分割している。ただし、この小グリッドの名称についてはこれまで統一した基準がなく、各々の調査で個別に任意に名称を付していた。今回は第6次調査地点に隣接し、その成果を併せて検討しなければならない。第6次調査についても独自に小グリッドの名称を付しているが、その名称はその後の調査を念頭に置いて付したものでなかったため、今回の報告でそのまま使用して報告することができない。そのため、本報告では新たに細分基準を決め、今後津島地区の発掘調査についてはこの細分基準を用いて報告することとした(図3)。

細分基準は先に設定した構内座標の50m間隔のラインを基準としてその間を10等分し、アルファベット表記の東西線を北から0～9、アラビア数字表記の南北線を東から00～90で示す。この細分区画ラインで囲まれた1区画は大区画の呼称を冠したうえで東北角で交わる二方向の細分区画ラインの数字を合計し、AW04-00、AW04-31、…と呼称する。すなわち50m四方

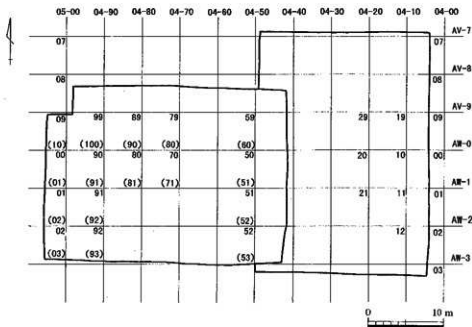


図3 調査地点の区割り

の大区画の北東隅の5m四方の小区画は00区、南西隅の小区画は99区となるのである。また、図3でカッコ中に示した数字は第6次調査時に使用した区割りの名称である。

## 2. 層序と地形

### a. 層序

土層の堆積状況については、隣接する第6次調査地点の土層堆積状況を参考とし、また、調査区中央で南北方向に設定した土手によって確認した(図4、図版9)。また、必要に応じて周囲の壁面や、任意に設定した土層観察用の土手で確認している。

〈1層〉 本地区が1907～1908年(明治40～41年)に陸軍屯営用地として造成された際の造成土である。上面(地表面)は標高4.6～4.8m(以下標高は略す)である。

〈2層〉 青灰色粘質土で均一な層である。上面高は3.8～4.0m前後で、ほぼ平坦である。造成直前の畑開運の溝・畝等の遺構が検出されたほか、近世・近代の遺物が出土している。

〈3層〉 粗・細砂を多く含む橙黄褐色砂質土であり、鉄分が多くみられる。上面の高さは3.6～3.7m前後ではほぼ平坦な面である。南北方向に走る畦畔と、東西方向の溝、土坑が検出され、近世の遺物が少量出土している。

〈4層〉 淡灰黄色細砂質土で、マンガンが少なく、しまりが無い。上面の高さは3.6m前後である。

〈5層〉 灰黄色砂質土で鉄分が帯状に入る。マンガンがわずかに認められる。上面の高さは3.5～3.6mを測る。平坦な地形である。上面では東西方向の溝が検出された。層中には中世後半～近世の遺物を含んでおり、近世に属すると考える。

〈6層〉 淡灰黄色砂質土で鉄分を含み、マンガンは少ない。3.5m前後に、約5cmの堆積が認められる。5層より砂質が強い。

〈7層〉 黄灰色～灰褐色～灰色粘質土で、鉄分を含み、上面にマンガンの沈着が際だつ。上面の高さは3.3～3.4m前後で地形的に大きな変化は認められないが、やや北側が高く、南側に向かって下がる傾向がある。

〈8層〉 土質により、2層に細分し、上層を8a層、下層を8b層とする。調査区南側では8層は確認されなかった。古代に帰属する火溝を検出している。

〈8a層〉 8a層は灰褐色砂～灰黄色粘質土で、鉄分が多く、マンガンは少ない。上面高は3.3m前後である。層厚も薄く、堆積の状況から洪水砂と考えられる。

〈8b層〉 8b層は淡灰黄色～灰褐色砂質土で、砂質が強い。上面に鉄分が多く沈着

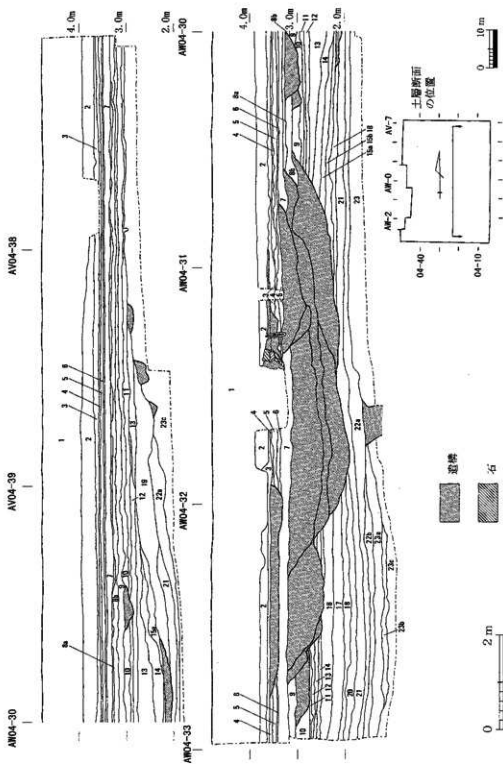


図4 調査区土層断面図 (中央南北セクション)



表1 基本土層註記

層名	色調・土質	備考	層名	色調・土質	備考
<1層>	灰褐色バイラン土	造成土	<14層>	灰褐色～暗黄灰色～黒褐色砂質土	(Fe, Mn)
<2層>	青灰色粘質土		<15a層>	淡黒灰色粘質土	(Fe)
<3層>	橙黄褐色砂質土	(Fe多)	<15b層>	暗黒灰色粗粒砂	(炭・焼土少量)
<4層>	淡黄褐色粗砂質土		<16層>	暗黄褐色粘質土	(Fe)
<5層>	灰黄色砂質土	(Fe帯状)	<17層>	暗黄褐色砂質土～青灰色シルト質土	(Fe)
<6層>	淡黄褐色粘質土	(Fe)	<18層>	青灰色粘土	
<7層>	黄灰色～灰褐色～灰色粘質土	(Fe, Mn)	<19層>	暗褐～黒褐色砂質土	(Fe, Mn多)
<8a層>	灰褐色砂～灰黄色粘質土	(Fe多)	<20層>	黒色粘土	(Fe)
<8b層>	淡黄灰色～灰褐色砂質土	(砂質強い, Fe多)	<21層>	淡黒灰褐色～黒灰色質土～黒色粘土	(Fe, 木炭多)
<9層>	淡黄褐色砂質土		<22a層>	暗茶灰色粘土～黒灰色粘質土	(Fe, 青灰色粘土ブロック多)
<10層>	淡黄灰色～黄灰色～暗黄褐色粘質土	(Fe多)	<22b層>	暗黄褐色砂質土	
<11層>	明黄灰色～灰褐色～青灰色粘質土	(Fe多)	<23a層>	暗灰褐色粘質土	(木質・木炭粒)
<12層>	青灰色～暗灰褐色砂質土	(Fe)	<23b層>	暗灰色砂質～粘質土	(木質・木炭粒多)
<13層>	淡灰色～にぶい暗褐色砂質土	(Fe多, やや粘)	<23c層>	灰褐色～暗褐色砂質土～青灰色粘質土	(Fe, 灰褐色砂質ブロック, 大粒の木炭多)

する。上面高は3.25～3.3mである。

<9層> かなり砂質を帯びた淡黄褐色砂質土である。鉄分とマンガンがわずかに沈着している。水田畦畔と東西方向の大溝を検出した。上面の高さは3.1～3.2mである。南北方向の傾斜がわずかに残る。

<10層> 淡黄灰色～黄灰色～暗黄褐色粘質土で構成され、一部はグライ化して青灰色を呈している。鉄分が顕著である。マンガンは少ない。しまりがよく、粘質が強い。調査区南半では古代の大溝によりその多くを削られ、ほとんど残存しない。上面の高さは2.9～3.2mで、北から南に傾斜する。

<11層> 明黄灰色～灰褐色～青灰色粘質土である。鉄分が多く、マンガンが少ない。細砂～粗砂を含む。上面の高さは2.75～3.1mで北から南に傾斜する。

<12層> 青灰色～暗灰褐色砂質土である。細～粗砂を含む。鉄分を含み、マンガンは少ない。上面高は2.7～3.0mで北から南に傾斜する。調査区北側中央寄りから堆積が始まる。

<13層> 淡灰色～にぶい暗褐色砂質土である。鉄分を多く含み、マンガンは少ない。やや粘質がある。調査区北側(AV-9ライン)付近から堆積が始まる。調査区中央付近では旧地形のたわみ状の窪みを埋めるように厚く堆積する。上面の高さは2.65～3.0mである。

<14層> 黄褐色～暗黄灰色～淡黒褐色砂質土である。鉄分とマンガンを含み、灰白色粘質土ブロックを含む。上面の高さは2.4～2.7mである。調査区中央北寄りから堆積が始まる。旧地形の影響を受けて調査区中央付近でもっとも低くなる。

<15層> 土質により、上下2層に細分する。

<15a層> 淡黒灰色粘質土である。鉄分、マンガンは少量、粗砂を多く含む。調査区

## 調査の成果

中央北寄りから堆積が始まる。上面の高さは2.2～2.7mである。旧地形の影響を受けて調査区中央付近でもっとも低くなる。

〈15b層〉 暗黒灰色粗細砂である。炭・焼土をわずかに含む。黒灰色粘質土小ブロックをわずかに含む。調査区中央部付近にのみ堆積する。上面の高さは2.2～2.4mである。

〈16層〉 暗灰黄色粘質土である。鉄分を含む。細～粗砂を含む。調査区の南半のみに認められる。上面の高さは2.5mである。旧地形の影響を受け南から北に緩く傾斜する。

〈17層〉 暗黄灰色砂質土～青灰色シルト質土である。鉄分を含み、黒色粘土ブロックが入る。上面の高さは2.3～2.4mである。調査区の南半のみに認められる。旧地形の影響を受け、南から北に緩く傾斜する。

〈18層〉 青灰色粘土である。黒灰色粘土がブロック状に混じる。上面の高さは2.0～2.3mである。調査区の南半のみに認められる。旧地形の影響を受け、上面のレベルは一定しない。

〈19層〉 暗褐色～黒褐色砂質土であり、津島岡大遺跡では「黒色上」と呼称している層層である。調査区中央北寄りにのみ確認されている。鉄分を含み、マンガン沈着が著しい。細～粗砂を多く含む。北から南に緩く傾斜し、AW-0ライン付近で傾斜変換点をもって急激に下がる。上面の高さは2.3～2.9mである。

〈20層〉 黒色粘土であり、調査区南半にのみ確認された。19層と対応する「黒色土」と考えられる。鉄分を含み、灰白色砂質土ブロックを含む。上面の高さは1.9～2.0mである。

〈21層〉 淡黒灰褐色～黒灰色粘質土～黒色粘土で粘質強い。鉄分を含み、木炭を多く含む。灰白色細砂質土・黄褐色粘質土ブロックを含む。調査区中央北寄りから堆積し始める。北側の微高地からいったん落ちたあと平坦に堆積するが、南側ではまた旧地形のためにあわせて堆積する。上面の高さは1.8～2.4mである。

〈22層〉 土質から上下2層に細分する。

〈22a層〉 暗茶灰色粘土～黒灰色粘質土である。鉄分を含み、青灰色粘土ブロックを多く含む。AW-0ライン以南に堆積する。上面の高さは1.6～2.6mである。

〈22b層〉 暗青灰色砂質土である。砂質が強く、粘性に乏しい。調査区南半にのみ堆積する。上面の高さは1.5～1.6mである。

〈23層〉 土質から3層に細分する。

〈23a層〉 暗灰褐色粘質土で粒子は細かい。木質・木炭粒を含む。調査区南半にのみ堆積する。上面の高さは1.4～1.6mである。

〈23b層〉 暗灰色砂質～粘質土で、粘性は強い。木質・木炭粒を多く含む。調査区南半にのみ堆積する。上面の高さは1.2mである。

〈23c層〉 黄褐色～暗褐色砂質土～青灰色粘質土で、微～粗砂を多く含む。鉄分を含

み、灰褐色砂質土ブロックと大粒の木炭を多く含む。AV-9、AW-2ライン付近で傾斜変換線をもち、北から南に大きく下がる。上面の高さは1.1~3.05mである。

#### b. 地形

前項で概説した層序のあり方を基礎に、本調査区における地形の変遷を概略する。

**縄文時代後期以前** 縄文時代後期以前は、調査区北半に微高地が広がり、調査区南半には河道が走っていた(23c層)。この調査区南側の河道によって微高地は浸食され、小段丘状の地形を呈している。

**縄文時代後期～晩期** 縄文時代後期になると、調査区南半の河道は堆積作用により徐々に埋没していく。この河道埋没段階になって津島一帯に人間活動の痕跡が残され始める。

**弥生時代早期～弥生時代前期(20～14層)** 弥生時代早期には南半では縄文時代の河道はほぼ埋没し、浅い窪み状の地形を呈する。北半の微高地部分では黒色土が堆積していない。弥生時代早期には溝が、前期には地形の傾斜にあわせた水田が作られるようになる。前期には南半の河道は埋没するが、調査区中央では窪み状の地形を残している。

**弥生時代中期～古墳時代前半期(13～11層)** この段階には北から南に緩やかな傾斜は残り、地形にあわせた水田畦畔を作っているが、旧地形の凹凸はほぼ解消されている。

**古墳時代後半期～古代(10～8層)** 古墳時代後半期には正方位の畦畔が作られ、耕地の再編成がなされるようになるが、北から南に緩やかな傾斜を残す。古代には地形の傾斜を克服し、ほぼ水平な面を形成している。この段階には条里の坪境にあたると思われる大溝が掘削され、この大溝の走行にあわせて水田畦畔がつくられる。

**中世以降(7～1層)** 中世以降、連続して耕地として利用される。古代の大溝を踏襲して東西方向の溝が掘削され続けており、近代に至るまで古代の土地区画の影響を受けている。近代に入って陸軍の駐屯地营造のため0.8～1m近く造成される。この造成によってそれまでの景観は一変する。

### 3. 縄文時代の遺構・遺物

#### a. 23層検出の遺構と遺物

23層では縄文時代後期の遺構を多数検出した。検出した遺構の内訳は、溝1条・貯蔵穴10基・焼土土坑2基・土坑3基・ピット3基である。

縄文後期における地形は、南側において23c層を基盤層としている。調査区内を東西に河道

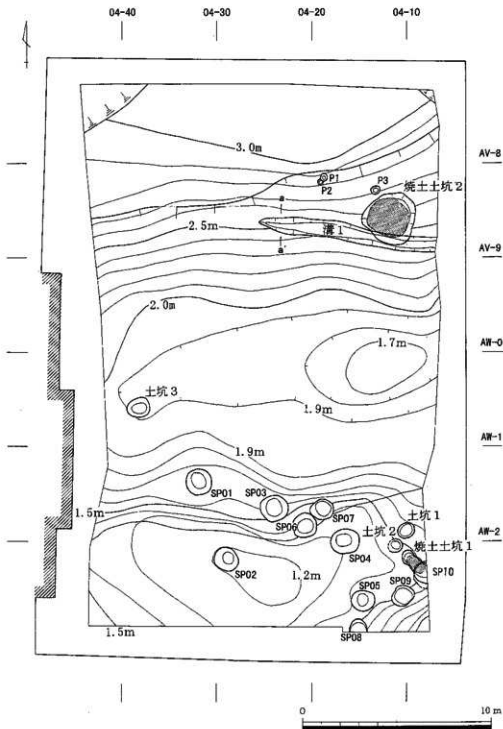


図5 縄文時代遺構平面図

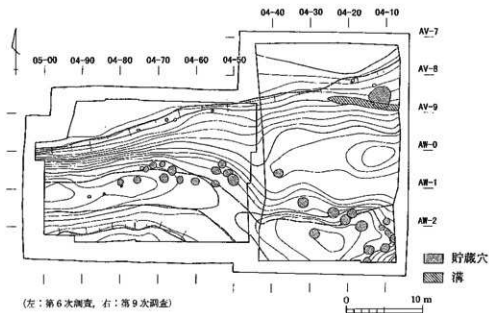


図6 縄文時代遺構面における第6次調査地点との関係

が横断しており、調査区南半の範囲のほとんどを占めている。したがって、地形は谷への斜面と微高地状の緩斜面で構成されている。北側の平坦面から河川におちていく途中には、やや平坦なテラスを形成する部分がある。河床はゆるやかに起伏をもつ。

調査区の南側には貯蔵穴が密集している。検出面は23層の上層と中層の2面である。谷から川底への変換点で、ややよどみが形成されると思われる地点に位置している。切り合い関係を有するものはない。貯蔵穴のうち、1基で底面にアンペラの残存が確認された。規模は上面の最大径で1.55m～1m弱であり、全体的に大形である。形態は、円形あるいは不整形である。いずれも底面は灰色砂層に到達しており、現在の環境下で湧水が認められた。

堅果類が貯蔵された状態のものはなく、いずれも使い尽くされた状態であった。しかし、堆積状況から2～3回の複数使用の痕跡や使用後開放状態で放置されたことを示す例が多く認められる。



図7 溝1断面図、出土遺物 (縮尺1/3)

## 調査の成果

遺物は、土器・石器が少量ふくまれるものと、全く含まれないものがある。時期はほぼ縄文時代後期前半におさまるものと考えられる。

この他、河床近辺の調査区南東では焼土土坑や土坑もみられる。北側の斜面には溝1が東西に走り、大形の焼土土坑とピットが近接する。河道への落ち際のテラスには、わずかに土坑1基のみが位置するだけである。

### 第6次調査との関係

第6次調査との関係であるが、ともに調査区内に河道が東西に連続する(図6)。斜面の上の北側では、敷高地がみられるが遺構等は検出されていない。今回検出した溝1は、西側の6次調査では検出されていない。貯蔵穴は、両調査合わせて21基検出されており、河床のたわみから傾斜をもって敷高地にあがる傾斜変換点までの間に立地している。6次調査において、貯蔵穴の西側に見られたピット群は今回の調査では検出されておらず、その機能は検討を要する。

### 溝

溝1(図5、7、図版10-1・21) 調査区の北東、河川へおちる緩斜面に位置し、東西方向に走る。現状では、調査区の西側方向へは続かず中央付近でとぎれる。焼土土坑2をきって構築している。付近にはピット群が位置する。溝は断面が台形で、底はやや平坦であるが、わずかに起伏をもつ。覆土は1層であり、暗褐色の砂質層が堆積している。規模は、現状で最大幅約1.4m、深さ約25cmである。

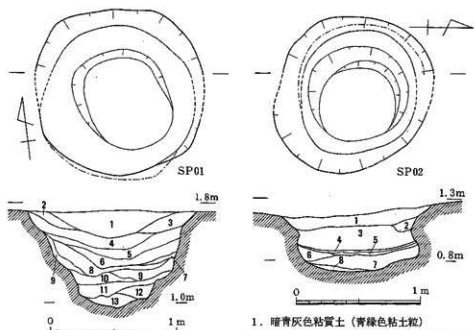
溝内からは、縄文後期の福田K2式に後続する土器の口縁部片が出土している(図7)。溝の時期は、ほぼこの土器の時期に相当するだろう。

### 貯蔵穴

SP01(図8、図版11-1・2) 調査区の南西、河床への落ち際に位置する。標高1.74m、23a層上面で検出した。本来の掘削面に近いレベルである。

平面形は、上面では径1.36mのほぼ円形、底面では径65~75cmの楕円状を呈する。深さは約80cmを測る。掘りかたは、前半では上面から15~20cmのあたりまではやや緩やかな傾斜だが、その後急峻な角度で落ち込み肩部を形成する。前半部は上面からすぐにオーバーハンズして底部に至る。底面は平型ではなく、凹凸をもちながら中央部がくぼむ形態を示し、標高0.96mの高さに位置する。掘削面は淡青緑灰色粘土層であるが、掘りかた下半からは灰色系の砂層になっており、底面からは湧水が顕著に認められた。

埋土は13層に分層しているが、大きくは8群にまとめられる。I群(1・2層)は、粘土層



1. 緑黑色粘土 (緑灰色粘土ブロック、不均質)
2. 淡緑黑色粘土 (黒灰色粘土ブロック)
3. 灰緑色粘質土
4. 緑灰色粘土 (黒灰色粘土ブロック)
5. 明緑灰色粘土
6. 暗緑灰色粘質土 (炭化物)
7. 明緑灰色粘質土
8. 緑灰色粘質土 (明緑灰色粘土粒)
9. 明緑灰色粘土
10. 緑灰色粘土
11. 褐緑灰色シルト質土
12. 褐緑灰色シルト質土+明緑灰色粘土
13. 明緑灰色粘土 (有機物・堅果類)

1. 暗青灰色粘質土 (青緑色粘土粒)
2. " " (青緑色粘土ブロック多)
3. " " (炭化粒・堅果類・木片)
4. 淡緑灰色粘土
5. 暗緑灰色粘土
6. 暗褐色粘土 (堅果類少)
7. " " (堅果類・木質多)
8. 黄褐色土 (細砂粒多・堅果類多)



0 10cm

図8 SP01・02平・断面図、SP02出土遺物 (縮尺1/3)

## 調査の成果

ロックを含む緑黒色系の粘土層で最後の流入土と言える。Ⅱ群（3層）は均質でやや砂質を帯びる層で、Ⅲ群（4～6層）は緑灰色系の粘土層である。Ⅳ群（7層）は、明るい色調で砂質を帯びる層でⅡ群に類似する。Ⅴ群（8・9・10層）は緑灰色系の粘土層である。上半にあたる8層ではやや砂質を帯びて粘土粒を含むが、下半の9・10層は粘性が強い。9層はやや明るい色調を呈する。Ⅵ群（11層）は有機質を多く含むため褐色を帯びる点が特徴で、上下層と明瞭に区別できる。堅果類の貯蔵に関連して堆積した土層と考えられる。Ⅶ群（12層）は下層の13層と上層の11層が混在する状態である。Ⅷ群（13層）は全体的には均質な層であるが、堅果類を含み使用時の堆積土とみなされる。

I～V群は流入土と考えられるが、その内容をみると、粘性の強いI・Ⅲ・V群が、砂質を帯びるⅡ・Ⅳ群をそれぞれ間層にして、繰り返し堆積していることが分かる。Ⅱ群とⅣ群を境に、埋設段階に3回の単位が想定される。一方、Ⅵ群・Ⅷ群は使用に関わる堆積土の可能性が高い。間層のⅦ群の存在を考慮すると、2回の使用を想定することができよう。

出土遺物は土器小片がある。本遺構の時期は、後期前半におさまるものと思われる。

SP02（図8、図版11～3・4、21） 調査区南側中央付近で、河床のたわみ部分に位置する。標高1.2～1.3m、23b層上面で検出した。上部の一部を23a層が覆っている。本来の掘削面に近いレベルであろう。

形状は上面で径1.15～1.25m、底面では径0.8mのはぼ円形を呈する。深さは約0.45mを測る。掘りかたは、上面から約20cmまではやや緩やかであるが、その後、底部まで急峻な角度で落ち込むため肩部が形成されている。肩部以下のラインは西側を中心にオーバーハングする。底面は標高0.7m前後に位置し、平坦ではなく東寄りにくぼむ形態をなす。掘削面は、淡青緑灰色粘土層であるが、掘りかた下半からは灰色系の砂層になり、底面からの湧水が顕著に認められた。

埋土は8層に分層しているが、大きくは4群にまとめられる。Ⅰ群（1・2層）は粘土粒を含む粘質土層で最後の流入土である。2層は粘土ブロックを多量に含んでおり、壁の崩落土の可能性が高い。Ⅱ群（3層）は、土層の色調や粘性はⅠ群と共通するが、堅果類や炭化粒、木質を含む点で区別できる。使用に関わる埋土の可能性が考えられる。Ⅲ群（4・5層）は、緑灰色系の粘土層で非常に薄い堆積をみせる。均質で包含物もなく、間層的な堆積である。Ⅳ群（6～8層）は褐色を帯びる土層である。6・7層は少量の堅果類・木質を含む。8層は6・7層と比べ粘性は弱く、細砂粒を多量に含む砂質の強い土層となっている。堅果類を比較的多く含む点も特徴である。貯蔵に関わる堆積層である。

以上の状況から、Ⅲ群の間層を挟んで、少なくとも2回の使用が考えられる。Ⅰ群が最後の流入土で、Ⅱ群は使用に関わる埋土、Ⅲ群は間層（穴の開放?）、Ⅳ群は使用直後の埋土あるいは



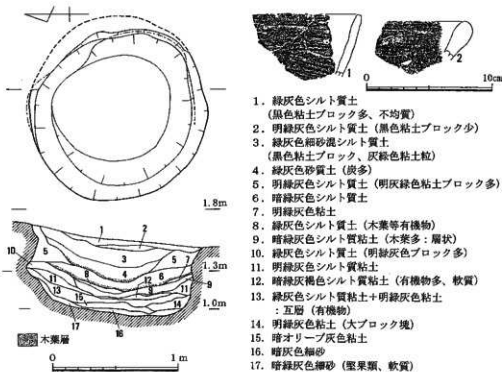


図9 SP03平・断面図、出土遺物 (縮尺1/3)

は使用時の埋土、という可能性を考えさせる様相である。

遺物は、小型の浅鉢と深鉢の破片が数点出土している(図8)。いずれも後期前半におさまる上器群である。

SP03 (図9、図版11-5・6、21) 調査区南側中央、河床への落ち藪に位置する。標高1.7~1.5m、23a層上面で検出したが、東部上方は側溝によって一部破壊される。

形状は上面で径約1.4mの円形、底部で径0.85m×0.95mの南北に長軸をもつ楕円形を呈する。深さは約0.55~0.6mである。掘りかたは上面から約15cm下がった位置で肩部を持ち、以下はオーバーハング気味に外側に膨れながら底部に至る。そのため、底面中央部は比較的平坦であるが、下半部から底面周縁部にかけては丸みをもつカーブを見せる。底面は標高約0.95mに位置する。掘削面は淡青緑灰色粘土層であるが、掘りかた下半からは灰色系の砂層になり、底面からは湧水が認められた。

埋土は17層に分層しているが、大きくは次のように3群にまとめられる。

1群(1~4層)：最終掘削に伴う堆積層で流入土と考えられる。やや粘性が弱く、粘土あるいは砂をブロック状に含む土層群である。1・2層は黒色粘土ブロックの包含を特徴とし、3・4層はそれに加えて細砂が混じり、4層ではかなり砂質を強める。4層下面には木葉の堆

## 調査の成果

積が薄い層状に確認された。

Ⅰ群（5～12層）とⅢ群（13～17層）の堆積構造は共通性が高く、以下の特徴を有する各土層で構成される。

A層…堅果類を含む・軟質・未分解の植物層などの特徴から使用時の埋土と考えられる。

B層…均質な粘土層。流入土の可能性が考えられる。

C層…基盤層をブロック状に多量に含む層。崩落土的性格が推定される。

D層…互層構造の堆積層。流入土の可能性が高いが、包含物によっては人為的な場合も考えられる。

Ⅱ群：2回目の使用に関連する埋土と流入土・崩落土を含むと考えられる。

5・10層は基盤土層のブロックである明灰緑色粘土ブロックを多量に含み、崩落土とみられる（C層）。6・7層そして11層は色調に明暗の差はあるが、いずれも均質な粘土層である（B層）。8・9層は多量の木葉を含む層であるが、特に9層は木葉が層状堆積を見せる（D層）。また、8・9層上面には4層下面と同様に薄い木葉層の堆積がみられた。12層は有機質・植物質を多量に含む軟質の土層で全体に褐色を帯びる。使用に関連する埋土と考えられる（A層）。下層から順番にその性格を示すと、A層・B層・C層・D層・B層・C層となる。

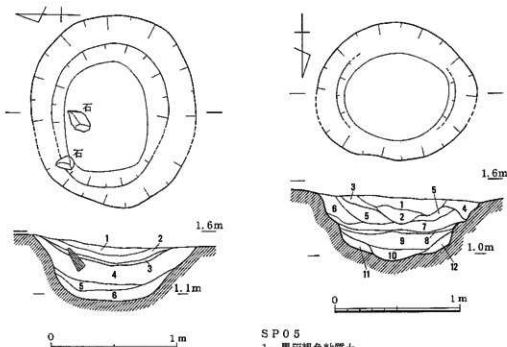
Ⅲ群：最初の使用段階から流入土・崩落土を含むと考えられる。

13層は緑灰色シルト粘土と明緑灰色粘土が互層に堆積する（D層）。14層は5層・10層よりは粘質を強めるが、同様の基盤層のブロックを含む。かなり大形のブロックである（C層）。15層は極めて均質な粘土層である（B層）。16・17層は暗灰色系の軟質細砂層である。特に17層には堅果類が認められる（A層）。下層から堆積順に性格を示すと、A層・B層・C層・D層となる。

このように、Ⅰ群とⅢ群はA・B・C・Dの繰り返しを示しており、ごく近い環境下で、使用后、開放状態で埋まりながらも連続的に使用されたことが想定される。最後の使用段階にあたるⅠ群は2回目の使用後はほとんど埋まった後に再掘削されたものであり、1、2回目の使用に見られるほどの連続性は認め難い。使用上の中断があったことも予想される。使用後はかなり急速に埋没したようである。また、Ⅰ群とⅢ群のD層に対応する9層、13層には、9層が木質の互層であるのに対して13層は粘土の互層であるなどの差が存在する。水量差などの自然環境に起因する違いであろう。

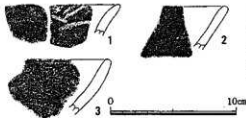
遺構内からは、深鉢口縁部破片等が数点出土している（図9）。いずれも後期前半におさまる土器群である。

SP04（図15、図版11-7・8） SP03に近接し、河床への落ち際に位置する。標高1.5～1.6 m、23a層上面で検出した。



## SP04

1. 暗灰色粘土 (緑灰色粘土ブロック少)
2. 灰色シルト質粘土 (炭多、砂混)
3. 明緑灰色粘土
4. 灰(褐)色粘土 (植物質多)
5. 暗灰褐色粘土 (植物質多)
6. 暗灰褐色シルト質粘土 (植物質、堅果類)



## SP05

1. 黒灰褐色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック、不均質)
2. 灰褐色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック大・多、不均質)
3. 淡灰褐色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック小、不均質)
4. 明青灰色粘質土 (暗灰色粘質土ブロック)
5. 暗青灰色粘質土 (炭僅少)
6. 暗青灰色粘質土 (暗灰色粘土粒多、炭僅少)
7. 淡黒灰褐色粘質土 (暗灰色粘土粒多、不均質)
8. 黒灰褐色粘質土 (炭多・大)
9. 淡黒灰褐色粘質土 (木質多、炭、軟質)
10. 黒灰褐色粘質土 (木質多、堅果類、軟質)
11. 暗灰褐色粘質土 (木質多、軟質)
12. 暗灰褐色粘質土 (木質多、地山ブロック多、軟質)

図10 SP04・05平・断面図、SP05出土遺物 (縮尺1/3)

平面形は、上面で径 $1.55 \times 1.3$ mを測る楕円形で東西に長軸を有す。底部は径 $0.65 \text{m} \times 0.9 \text{m}$ の東西に長軸をもつ不整楕円形を呈す。掘りかたは、上面から約20cm下がった位置に若干肩部を持ち、それより下位では、やや傾斜角度を強めて直線的に底部に至る。底面は平坦ではなく緩やかな丸みをもつ。深さは約0.45mで、底面は標高約1.05mに位置する。灰色系の砂層に達し湧水が認められる。また、20cm角程度の角礫2個が4層上面にあたるレベルで出土した。

## 調査の成果

埋土は薄い堆積をみせる3層を挟んで、上下で様相が異なる。

1・2層は粘土ブロックや砂が混入する粘土層である。3層は明るい色調の粘土層で上下層と明瞭に区別できる。4～6層は植物質を多く含む褐色を帯びる層で、最下層の6層には少量だが堅果類が残る。以上の状況から、4～6層は使用段階に関連する埋土で、1～3層は流入土と考えられるが、1～3層の厚さが比較的薄いことから、廃棄直後には4層で上面まで埋められた状態が予想される。とすると4層上にある角礫も何らかの意味を持つ可能性がある。

遺構内からは、深鉢口縁部破片等が数点出土している(図10)。いずれも後期前半におさまる土器群である。

SP05(図10、図版12-1・2、21) 調査区の南東隅、SP08とSP09に近接し、河床のたわみ付近に位置する。標高1.45～1.5m、23a層上面で検出された。

平面形は、上面で径1.3～1.1m、底面で径0.85m～0.7mを測る東西に長い楕円形を呈す。掘りかたは、上面から約20cmのあたりで肩部を持つ。標高約0.95mに位置する底面は平坦ではなく、中央部がややすり鉢状にくぼむ。深さは約0.5mである。掘削面は淡青緑灰色粘土層であるが、掘りかた下半からは灰色系の砂層になり底面から湧水が認められた。

埋土は12層に分層しているが、大きくは2群にまとめられ、それぞれの中で、さらにまとまりを見せる。

I群(1～7層)は暗灰色の粘土ブロックあるいは粘土粒を含む土層群で流入土と考えられる。それらはさらに2群に細分される。I-1群(1～4層)は暗灰色の粘質土ブロックを含み、均質さを欠く土層で、各層はブロックの包含率の差で細分される。4層はそれ自体が大型のブロック状を呈す。I-2群(5～7層)は粘土粒を含む土層である。下半の6・7層ではI-1群と同様に粒状の暗灰色粘土が多量に含まれる。

II群(8～12層)は多量の木質を含む土層群で使用に関わる土層とみられる。II-1群(8～10層)は、黒灰褐色系の粘質土である。薄い堆積の8層は、大形の炭化物を多量に含む点で他の層と区別される。9・10層は微細砂や地山ブロックを含み、軟質である点が特徴である。それらの包含率の違いと10層に堅果類が含まれる点で分層しているが、基本的には共通した性格が予想される。II-2群(11・12層)は、暗灰褐色系の粘質土層である。II-1群と同様に多量の木質と、微細砂・地山ブロックを含んで軟質を示す。11、12層はその包含物の量的な差によって区別できる。II-1群とII-2群の関係には、前者が後者を切るような状態を看取することができる。

以上の状況から、II群において少なくとも2回の連続的な使用が想定される。8層はそうした使用直後の堆積層とみられる。

出土遺物は土器小片である。本遺構の時期は、後期前半におさまるものと思われる。

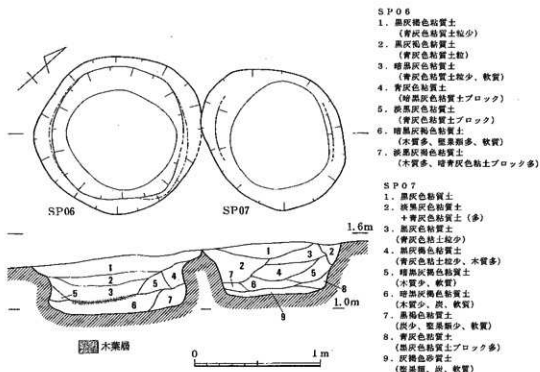


図11 SP06・07平・断面図

SP06 (図11、図版12-3~5) 調査区の南側、SP03・04・07に近接し、河床のたわみ付近に位置する。標高1.35~1.45mで検出された。23a層上面である。

平面形は、上面で1.35×1.25mを測る北東-南西に長軸をもつ楕円形である。底面形は径0.8m×0.9mの北東-南西方向に長い不整楕円形を呈す。掘りかたは、上面から15cm前後のあたりまでは緩やかな傾斜で、その後一部でオーバーハングしながら急峻な角度で掘り込まれ平坦な底面に至る。深さは約0.45mである。底面は標高0.95m前後に位置し、灰色系の砂層に達して湧水が認められた。

埋土は7層に分層しているが、大きくは3群にまとめられる。

I群(1~3層)は流入土と考えられる土層群で、黒灰色系の粘質土に青灰色粘質土粒を含む。1・2層の細分はその包含率の差である。3層はやや色調が暗く軟質である点が異なる。

II群(4・5層)は壁などの崩落土の可能性が考えられる堆積層である。青灰色あるいは暗灰色系の粘土粒やブロックが多量に包含されている。

III群(6・7層)は使用段階の堆積土と考えられる褐色を帯びる土層である。未分解の木質あるいは植物質の堆積層とみられ、発掘直後は明黄灰色を呈しているが、空気に触れると酸化し黒色化する。6層は軟質で堅果類が多量に含まれ、上面には木葉が薄い層状をなして堆積す

## 調査の成果

る。7層には堅果類は認められなかったが、6層堆積以前の使用に関わる可能性がある。

Ⅲ群の状況からは使用が2回以上であった可能性が、Ⅰ群・Ⅱ群の状態からは貯蔵穴の上部が開放状態で放置され自然流入土で埋没するという経過が考えられる。

出土遺物は土器小片のみである。本遺構の時期は、後期前半におさまるものと思われる。SP07(図11、図版12-3~5) SP06の南東部に接し、標高1.45~1.55mで検出された。検出面は23a層上面である。

平面形は、上面で1.2×1.05mを、底面で径0.8m×0.85mを測り、ほぼ東西方向に長軸をもつ不整形円形を呈す。掘りかたは、上面から約10~20cmに若干肩部が認められる部分もあるが、全体的には比較的急峻な角度で底部に至りオーバーハングなども認められない。深さは約0.4m、底面はほぼ平坦で標高1.1m前後に位置する。灰色系の砂層に連し底面からは湧水が認められた。

埋土は9層に分層しているが、5群にまとめられる。

Ⅰ群(1~3層)は黒灰色系の粘質土を基本とする。2層は同粘質土と青灰色粘土がブロック状にはほぼ同量含まれており、崩落土の可能性が考えられる。Ⅱ群(4層)は木質を多量に含む点の特徴である。Ⅲ群(5~7層)は黒褐色系の軟質の粘質土を基調とする。5層から7層に向けて色調は暗くなるが変化は漸移的である。Ⅳ群(8層)は明るい青灰色粘質土で黒灰色粘質土ブロックを多量に含む。2層に類似する土層で、やはり崩落土の可能性を予想させる。Ⅴ群(9層)は他の埋土とは全く異なり、比較的明るい灰褐色の砂質土層で堅果類がかなり多く残されていた。

以上の状況から、Ⅴ群(9層)は確実に使用段階の埋土であり、その直上のⅣ群(8層)の状況が崩落土的事実であることから、使用後、一時的に開放状態であったことが予想される。Ⅲ群・Ⅱ群は、7層に堅果類が少量確認されることや、4層に木質が際立って多いことなどから使用に関係する土層である可能性もあるがやや確実性に欠ける。Ⅰ群は崩落土、最終段階の流入土であろう。

出土遺物は土器小片である。本遺構の時期は、後期前半におさまるものと思われる。SP08(図12、図版12-6~8) 調査区の南壁際にあたり、調査区内では北側の約1/2が検出された。検出レベルは標高1.45~1.5mであったが、南壁断面で本来の掘削面が標高1.6~1.65mにあることが確認された。23a層上面にあたる。

残存規模は上面で東西0.95m程度であり、平面形を推定すると径約1.15mの不整形円形あるいは不整形楕円形が予想される。また、底面形も径約0.9mの不整形円形となろう。掘りかたは、上面から約10~15cmまでは緩やかにすばまった後、多くの部分でオーバーハングしながら底部に至る。底面付近の標高1.1m前後にはアンベラが数枚重なった状態で残存する。10~20cm角の断

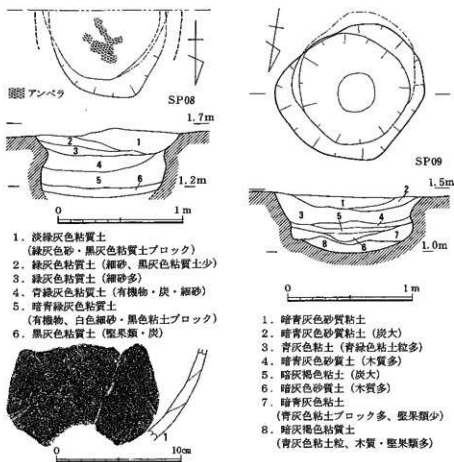


図12 SP08・09平・断面図、SP09出土遺物 (縮尺1/3)

片であったが、その取り上げのため、出土レベル以下の底部を破壊することとなり、正確な底面を確認することができなかつた。こうした事情から、正確な数値は提示できないが、掘削上面からの深さは約0.5~0.6mと考えられ、底面のレベルは標高1.1~1.05m付近に位置することが推定される。やはり灰色系の砂層に連する。

埋土は6層に分層しているが、3群にまとめられる。

I群(1~3層)はやや明るめの緑灰色粘質土で細砂を多く含む。II群(4・5層)はやや暗い緑灰色系の粘質土で、細砂を含むほか有機物の包含がみられる。III群(6層)は黒灰色を呈し、堅果類を含むなど他とは明瞭に区別できる。下面にアンベラが認められた。I・II群は流入土、III群が使用段階の埋土と考えられる。これも使用後開放されていた可能性がある。

出土遺物はアンベラ以外では土器小片がある。アンベラは、小断片で残存状態はよくない。本遺構の時期は、後期前半におさまるものと思われる。

## 調査の成果

SP09 (図12、図版12-9・10、21) 標高1.45~1.5mで検出された。23a層上面である。

平面形は、上面では1.2×1.05m、底面では径約0.9mを測る不整形を呈す。掘りかたは、上面から20cmあたりまで緩やかにすぼまり肩部を形成した後、垂直にあるいはオーバーハンダしながら底部に至る。南半部の壁が大きく挟れる。底面は中央部が緩やかにくぼむすり鉢状を呈し、深さは最深部で約0.45m、標高約1mに位置する。灰色系の砂層に達し底面からは湧水が認められた。

埋土は8層に分層しているが、その性格から大きく2群にまとめた。

I群(1~7層)は流入土あるいは崩落土と考えられる土層群である。その中で堆積状況から3分される。1・2層は暗青灰色の粘質土で2層に炭が多く含まれ、色調が暗い程度の違いで共通性は高い。最終段階の流入土である。3~6層は粘土層と砂質土層の互層構造をみせる。3層と5層が粘性の高い層、4層と6層が砂質に富み木質を多量に含む層である。下層に向けて暗い色調となる。水量の変化などの自然環境に即した堆積が繰り返された状況が考えられる。7層は青灰色粘上ブロックを多量に含む崩落土の可能性が高い。堅果類は下半に含まれ、木末は8層に帰属するものと判断される。II群(8層)は木質と堅果類が多く含まれる使用段階の埋土である。

8層上面において、壁際に厚く7層が堆積することから、使用直後に壁の崩落があったことが予想される。さらに、使用後埋め戻されず、開放状態であったことも考えられる。

遺構内からは、深鉢体部破片等が数点出土している(図12)。後期前半におさまる土層群であろう。

SP10(図13、図版13-1、21) 調査区の東壁際で、調査区内では西側の1/2が検出された。検出レベルは標高約1.45mの面であったが、調査区東壁の断面では、本来の掘削面が1.7mの高さにあることが確認された。23a層上面にあたる。

残存規模は上面で南北約1.25mであり、平面形を断面から推定すると径約1.45mの円形が予想される。また、底面形も径約0.9~0.95m程度の円形が想定される。掘りかたは、上面から20cmあたりで肩を持つ部分もあるが多くの部分では凹凸を有しながら直線的に底部に至る。底面も凹凸があり、現状では西部分がくぼむ形態を示す。掘削上面からの深さは約0.5~0.75mで、底面は標高1.15~0.95m付近に位置する。やはり灰色系の砂層に達する。

埋土は7層に分層できるが、土層の堆積状況から5~7層が堆積した後、新たな掘削に伴って1~4層が堆積するという2回の掘削が予想される。3層と5層の間に非常に薄く堆積する4層は、底面に沈殿するような粒子の細かい粘性に富んだ土層であり、2回目の掘削時の底部にあたるかと判断される。1回目の掘削時の最下層にあたる7層には少量の堅果類が含まれ、堅果類の貯蔵が行われたことを示す。しかし全体的な堆積は砂質土と粘質土の互層構造を示して



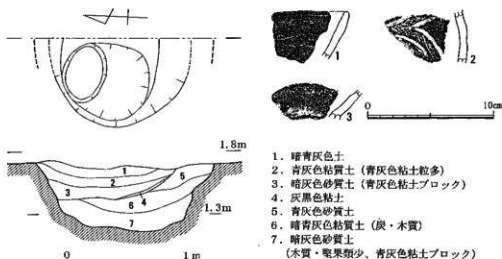


図13 SP10平・断面図、出土遺物 (縮尺1/3)

おり、いずれの層も流入土の性格が強いと考えられる。

遺構内からは、深鉢の口縁部や体部破片が数点出土している (図13)。2の土器は福田K 2式の深鉢体部破片であり、遺構の時期もこの土器の時期にさかのぼる可能性がある。

#### 焼土土坑

今回の報告では遺構内に明確な火床面を持たない土坑であっても、焼土が出土した場合は焼土土坑としている。

**焼土土坑1 (図14、岡阪10)** 焼土土坑1は、調査区の南東に位置し、河道の河床のたわみを形成している地点で検出した。遺構全体のプランは不明確であるが、焼土の範囲が楕円形であるので本来の遺構のプランも楕円形であった可能性がある。現存で遺構上面のプランの長軸は、約2.5m、短軸は約0.9m、深さ約20cmである。

覆土は6層に分かれ、焼土は下面で検出した。

遺構内からは、深鉢の破片数点と石鏝が1点出土した (図14)。土器は、すべて無文であり時期を特定できないが、後期前半に相当するものである。遺構の時期も後期前半に位置づけられるだろう。

**焼土土坑2 (図15)** 焼土土坑2は、調査区の北東に位置し、溝1により切られている。遺構のプランは不整形円形であり、現存で遺構上面のプランの長軸は、約2.8m、短軸は約2.7m、深さ約0.5mである。

焼土は遺構の底面側にやや集積していた。覆土は6層に分かれ焼土は覆土中層付近に集中す

調査の成果

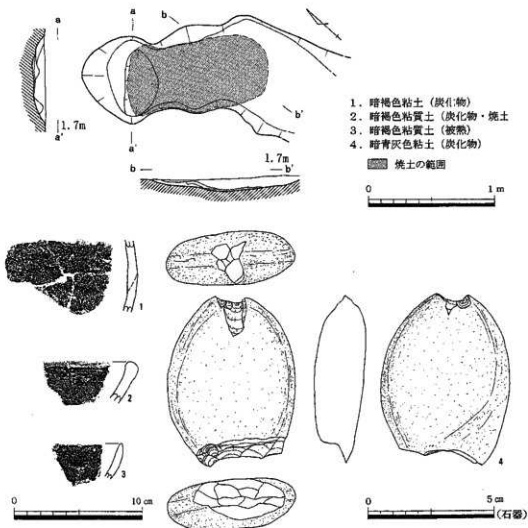


図14 焼土土坑1平・断面図、出土遺物 (1-3は縮尺1/3, 4は2/3)

る。

遺構内からは、時期を判定できる遺物が出土していないため時期を明確に特定できないが、後期前半の溝1にきられているので、同じく後期前半頃に相当するものと考えられる。

土坑・ピット

土坑1 調査区の南東、河床付近で野蔵穴群の東端に位置する(図16)。

プランは楕円形であり、現存でプランの長軸は、約1.2m、短軸は約1.0m、深さ約22cmである。覆土は2層に分かれる。

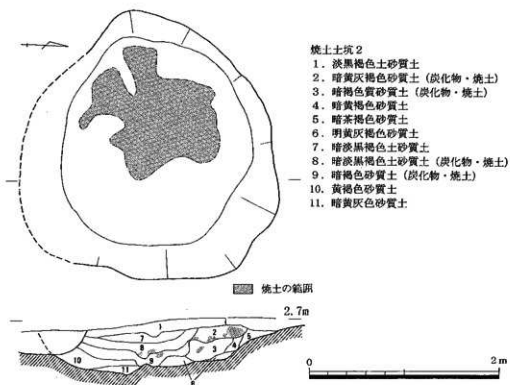


図15 焼土土坑2平・断面図

**土坑 2** 調査区の南東、河床付近で貯蔵穴群の東端に、土坑1に隣接して位置する(図16)。プランは円形であり、半分残存する。現存でプランの長軸は、約1.0m、深さ約20cmである。覆土は1層である。

**土坑 3** 調査区の中央西側端に位置する。プランは楕円形であり、現存でプランの長軸は、約1.6m、短軸は約1.3m、深さ約60cmである。覆土は3層に分かれる(図16)。

**ビット1・ビット2** 調査区の北東付近の、河川へ落ちていく緩やかな谷部に位置する(図16)。ビット1はビット2を切って構築している。両者ともにプランは円形である。覆土は1層である。ビット1の規模は、現状で長軸・短軸約40cm、深さ約32cmであり、ビット2は、長軸・短軸約30cm、深さ約32cmである。

**ビット3** 調査区の北東付近の、河川へ落ちていく緩やかな谷部に位置する(図16)。

ビット1はビット2を切って構築している。両者ともにプランは円形である。覆土は1層である。

調査の成果

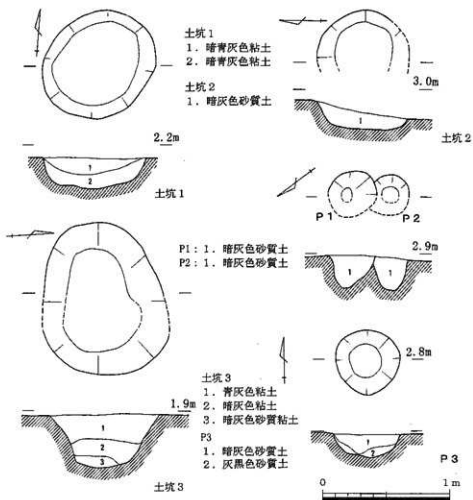


図16 土坑1~3・ピット1~3平・断面図

b. 縄文時代後期の包含層出土遺物

調査区南東付近遺物集中地点(図17、図版13- 1~4) 貯蔵穴の集中する調査区の南東隅付近において、縄文時代後期の土器群が集中して出土した。包含層出土遺物ではあるが、顕著なまとまりを形成していたため遺物集中地点として弁別して取り扱う。調査区南東隅にA~Fの方格グリッドを設定した。基本的にグリッドは南北約8m、東西約6mで設定しているが、調査区外に出る場合はこの範囲を満たしていない。この遺物集中地点における包含層中の遺物の取り上げは、この区割りにしたがっている。なお、特に遺物の集中がみられたC区とB区の境界付近については、南北方向に断面図を作成し、遺物の層的な出土状態を検討した(図

17)。この上段の土器の分布図を、A-A'ラインにおいて作成した断面図に俯瞰したのが下段の図である。この図のとおり傾斜があるため、断面図に俯瞰された土器のドットは、かならずしも土器の所属層位には入っていない。したがって土器の垂直分布の傾向を示すにすぎない。この断面図に見られるように、東側から西側にむかって傾斜がみとめられ、土器もこの傾斜に沿って出土している。1番の土器(図18-1)は、中津式に比定できる土器であり、23b層から出土している。23a層を挟んで上層の22b層から出土したのが2~7の土器である。これらの土器は、たとえば6番の土器のように津雲A式に比定されうるものから、2番の土器のように後期第N群とされる後期中葉にまで下がる土器群と混在しているような出土状態を示している。斜面堆積であるという状況からすれば、こうした出土状態は理解可能であろう。

ただし、第N群土器を牽引いた残りの土器については、まとまった時期の可能性も高く、今後の隣接地点の調査により22b層における遺構等の検出があれば一時期の土器群のまとまりを検出する可能性が高い。

このように、1番の中津式に比定できうるものと2~7までのそれ以外の資料については、層位的に峻別が可能であるが、22b層出土である一群の土器は、現状では新相と古相が混然となっていることがわかる。このことから、本遺物集中心地点は継続的な土器廃棄の結果形成されたブロックを示すものと考えられる。

**23b層検出縄文土器**(図18-1~4、図版21、22) 23b層では、後期初頭の土器群を少量検出した。精製土器は少数で、無文の粗製土器がやや多く出土している。図18-1は磨り消し縄文の中津式の鉢である。1本の沈線により区画されたなかに縄文を施している。底部は穿孔の可能性もある。図18-2・3は福田K2式に比定できる土器である。1はやや古相を示し、2は2本沈線の特徴からやや新相を示す。

**23a層検出縄文土器**(図18-5~26、図版21) 23a層では、縄文後期初頭の土器群を中心に、小破片が多く出土した。

口縁部片では、精製土器の深鉢は内湾するものが多く(図18-5、11他)、粗製土器は外反するものが多い(図18-20他)。文様は、磨り消しを伴い区画内に縄文があるもの(図18-11・12)、沈線で区画文を形成するものがある(図18-14他)。縄文はR.Lが目立ち、粗製土器の外には貝殻による擦痕を残すものが多い。土器群は、福田K2式段階及びその直後の段階に相当すると考える。

**22b層検出縄文土器**(図19-23、図版22、23) 22b層では、大型の破片を含め土器が多量出土した。精製土器は、深鉢では内湾あるいは肥厚した口縁部に沈線による区画内に縄文を充填したものが多い(図22-2・3他)。なかには、口縁部以下に櫛描き文をもつものがある(図20-1)この土器は、縄手式に近い内容を持つ。盲孔をもつ突起もある(図22-1)。鉢では、

調査の成果

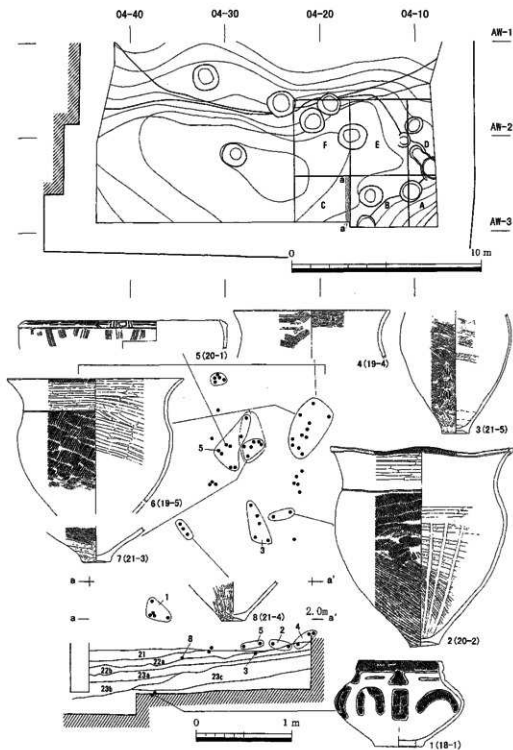


図17 縄文後期包含層南東側区割り図(上)・E区遺物出土状況平面分布(中)  
 C-E区南北断面図及び遺物の垂直分布状況(ドットの府藏はa-a'間)  
 (1-2は縮尺1/8, 3-8は1/8)土器実測図右下( )内数字は掲載図番号を示す。

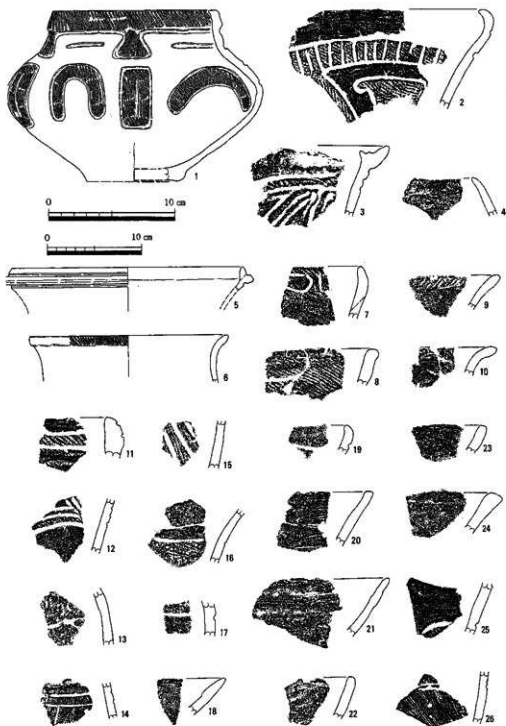


図18 23b層(1~4)・23a層(5~26)出土遺物(5・6は縮尺1/4, 他は1/3)

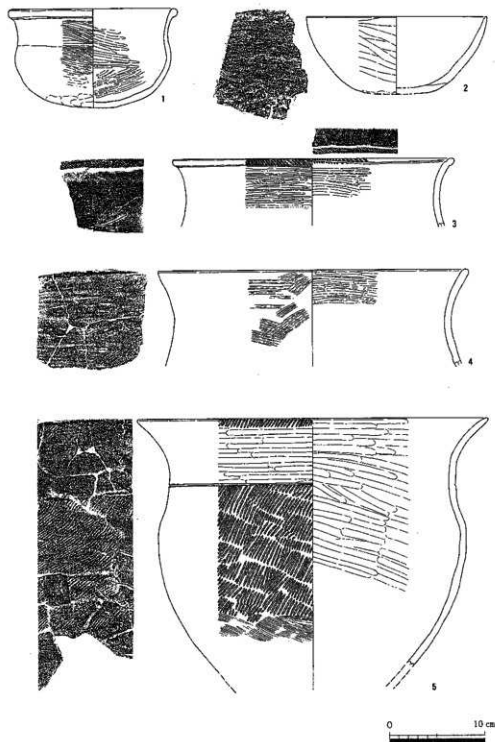


図19 22b層出土遺物 ① (縮尺1/4)



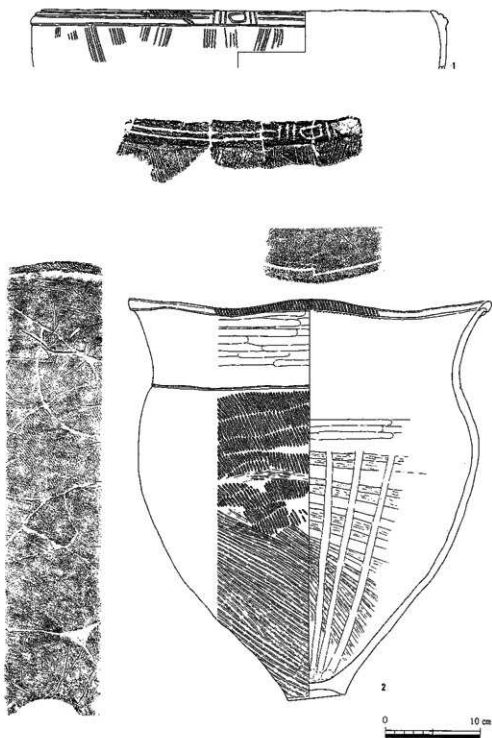


図20 22b層出土遺物 ② (縮尺1/4)

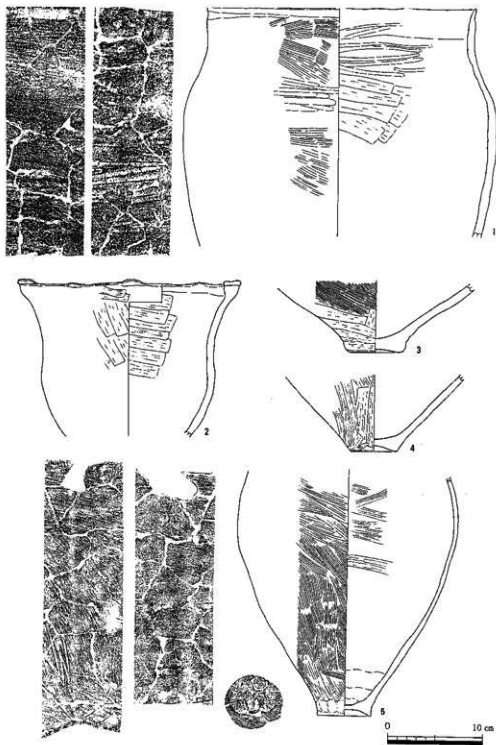


図21 22b層出土遺物 ③ (縮尺1/4)

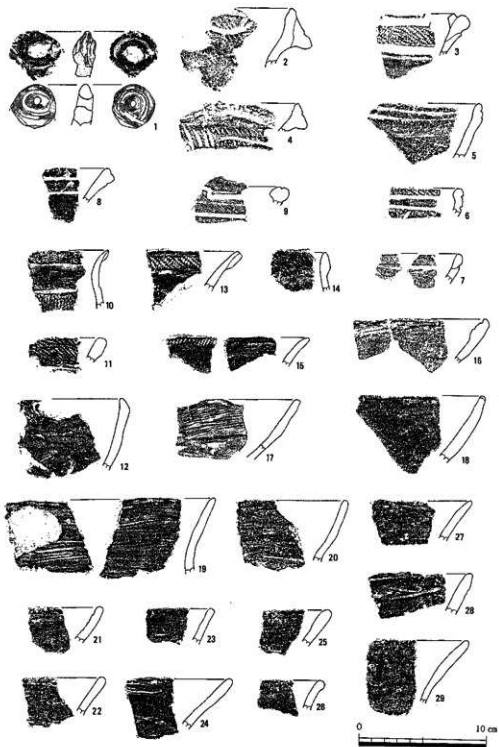


図22 22b層出土遺物 ④ (縮尺1/3)

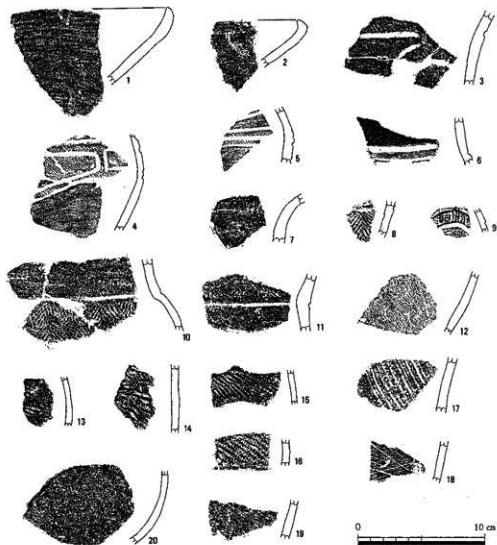


図23 22b層出土遺物 ⑤ (縮尺1/3)

全面にミガキを施した図19-1などがある。頸部に無文帯を有する半精製の鉢では、口縁部と体部に縄文を有する(図22-10・13他)。粗製土器は、外面が無文か只殻による擦痕を残すものが多く、口縁部の外反する鉢が主体である(図22-16~29他)。深鉢は、頸部に無文帯を有する半精製の鉢では、口縁部と体部に縄文を有する(図20-2他)ものがある。土器群は、福田K2直後型式(図22-1・2他)からいわゆる後期第Ⅳ群式(図22-9・6・10他)までのものが含まれている。

22 a層検出縄文土器(図24、図版23) 22 a層では少量の土器を検出した。精製土器は、津雲A式以前の土器(図24-1・6・7)と無文の粗製土器が少量出土している。いずれも小片

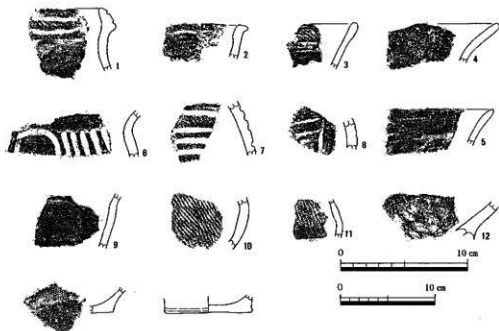


図24 22a層出土遺物 (14は縮尺1/4, 他は1/3)

である。

21・20層検出縄文土器 (図25～27、図版23) 21・20層については、層の識別が困難なため一緒に取り上げたものがあり、それらを21・20層検出縄文土器としてまとめて扱うこととする。

精製土器は、深鉢では内湾あるいは肥厚した口縁部が多く、沈線による区画内に縄文を充満したものが多く (図25-1～4他)。頸部に無文帯を有する半精製の鉢では、口縁端部内外面に縄文を有するもの (図25-8) と内面のみにもつもの (図25-9・10) がある。外面全面に溝の深い朱痕文を有する鉢もある (図25-9)。体部に羽状縄文をもつもの (図25-11) もある。粗製土器は、外面が無文か貝殻による擦痕を残すものが多く、口縁部の外反する鉢が主体である (図25-17～19他)。図27-31は穿孔を有する上器片で、弥生時代前期の紡錘車の可能性もある。土器群は、彦崎K1式以前が主体で、いわゆる後期第Ⅳ群式が多く含まれている。なお、新しい時期の土器の混入が認められ、弥生時代前期の突帯文土器 (図27-27) や前期の土器が数点出土している (図26-25～28)。

縄文時代後期包含層出土の石器 (図28、図版28) 今回の調査では、包含層から出土した石器は、極めて少数である。第6次調査においても縄文時代後期の石器の出土量は非常に少ないことが判明している。調査区内では、貯蔵穴等の屋外施設に関連する遺構しかなく、出土量の稀少さは遺跡の機能に影響していることが理解できる。図28-1はササカイト製のスクレー

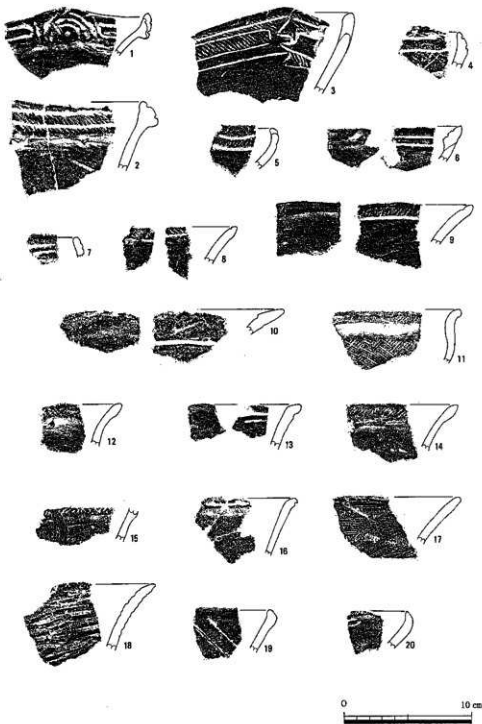


図25 20・21層出土遺物 ① (縮尺1/3)

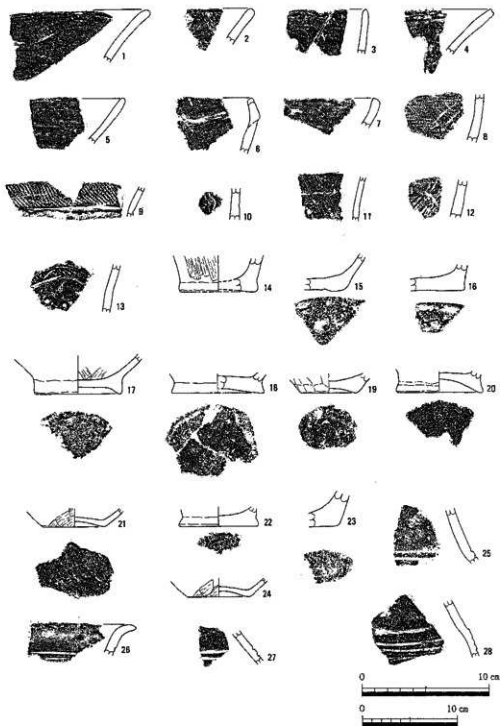


図26 20・21層出土遺物 ② (14~24は縮尺1/4, 他は1/3)

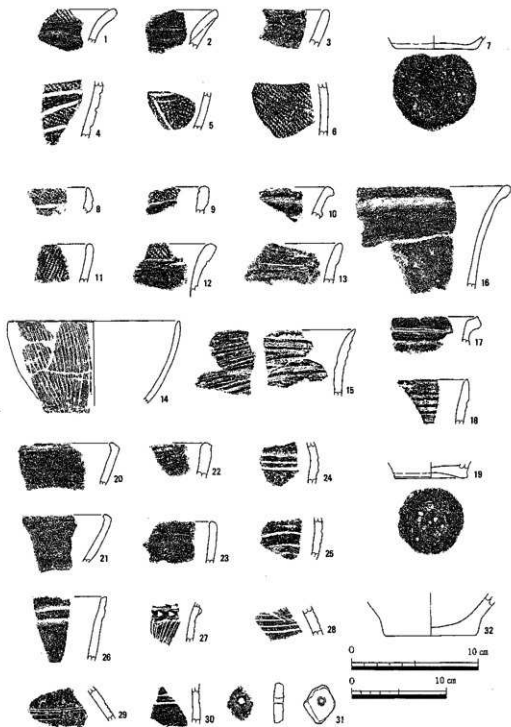


図27 21層(1~7)・20層(8~32)出土遺物(7・14・19・32は縮尺1/4, 他は1/3)



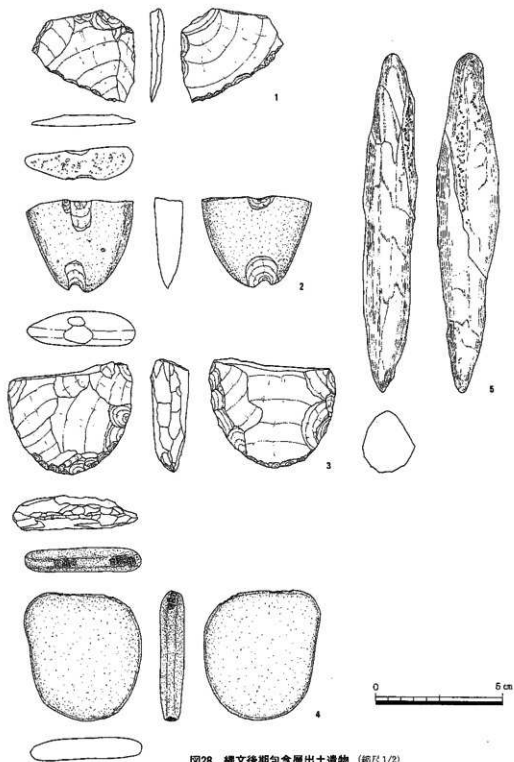


図28 縄文後期包含層出土遺物 (縮尺1/2)

## 調査の成果

パーであり、剥片の側縁に2次加工をしている。図28-3は打製石礫の破片である。ややもろい安山岩製である。刃部の摩滅した痕跡は見られない。図28-2は花崗岩製の石錘である。楕円形の原礫の一方を煎断し、先端部と切断部の両極に抉り状に剝離を行っている。図28-4は花崗岩製の叩き石である。やや平坦な側縁につぶれによる使用痕がのこる。図28-5はもろい安山岩製の石棒状の石器である。加熱による割れが認められ、表面は風化している。

## 4. 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は、19層、18層、14層、13層、12層で、古墳時代の遺構は、11層下層、11層上面、10層上面で検出した。

弥生時代の遺構については、隣接する第6次調査では、17層上面（9次の14～18層に対応）・16層上面（9次の14～16層に対応）で弥生早期から前期の溝を検出している。

### 弥生時代の遺構面での第6次調査との関係

第6次調査と第9次調査の関係については、第6次調査が河道を主体的に調査したのに対し、今回は北側の微高地を含んでおり層の堆積状況の対応関係が難しい。そのため、両調査において検出してきた遺構面も一致しない。したがって、今回の調査で検出した遺構と層位を総合して、第6次調査との関係を図にしたのが図29である。前半の時期には、溝2・3・4・5・6と水田畦畔がおそらく時間差をもちつつ位置し、後半の時期は、水田畦畔のみの時期である。第6次調査との関係でいえば、調査区の北側・南側で両調査区の溝がうまく接合しているが、第9次調査区の中央を「へ」の字に横断する溝については、第6次調査との整合性が नाही。また、水田畦畔は第9次調査でのみ検出している。

### a. 19層検出の遺構と遺物

19層においては、溝を2基検出した。いずれも調査区の北側に位置し、調査区を東西に横断している。2基は切り合い関係にあり、溝2の構築後に溝3を構築している（図30、図版14-2）。

### 溝

溝2 溝2は、溝3に切られているため残存状態は悪い。現存で約幅70cm、深さ10cmである。覆土は1層で、暗褐色の砂質土である。出土遺物はほとんどない。包含層に含まれる遺物の状況から、本遺構の時期は弥生時代前期におさまるであろう。

溝3 溝3は、東西方向に調査区を横断している。現存で約幅90cm、深さ10cmである。覆土

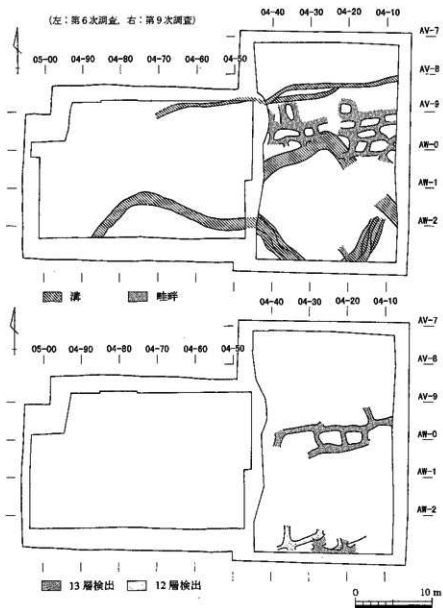


図29 弥生時代検出遺構(19～12層)と第6次調査地点との対応関係

は2層からなり、ともに暗褐色を呈する砂質土である。出土遺物はほとんどない。包含層に含まれる遺物の状況から、本遺構の時期は弥生時代前期と考えられる。

#### 19層検出の遺物

19層からは、土器と石器が少量出土した(図30、図版23)。1～7は弥生時代前期の土器であ

調査の成果

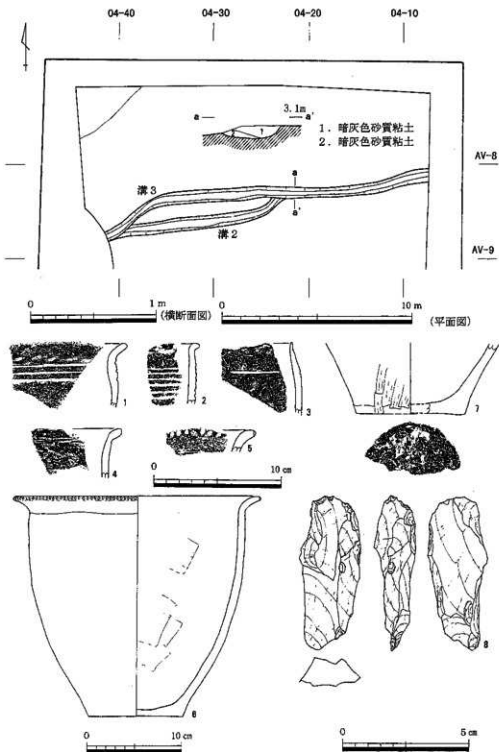


図30 19層上面検出遺構平面図・溝3断面図、出土遺物 (6・7は縮尺1/4, 8は2/3, 他は1/3)

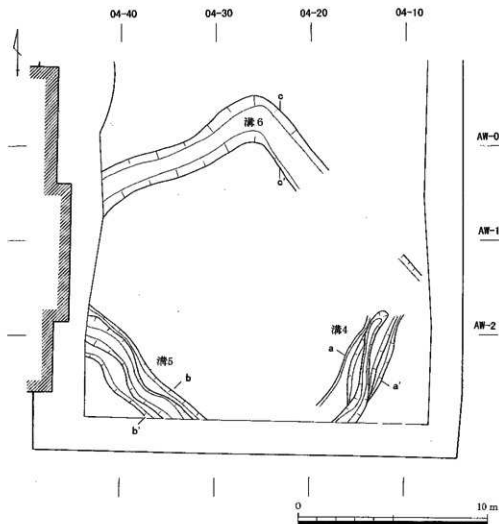


図31 18層上面検出遺構平面図

る。すべて甕の破片である。口縁部がくの字に外反するものと直立するものがある。文様は、口唇部に刻みをもつもの（5・6）と、口縁部下に沈線をもつもの（1～4）がある。底部（7）は平底を呈する。8はササカイト製のスクレーパーである。剝片の先端部分に微かな剥離を加えたものである。

#### b. 18層検出の遺構と遺物

18層においては、溝3条を検出した（図31、32、図版14-1）。溝6はやや幅の広い溝で、調査区中央部付近に「へ」の字状に屈折しつつ構築されている。調査区の南には、溝4と5が位置している。長期間の使用を示すのか、数回の掘り返しにより数条が切り合うような状況を呈

調査の成果

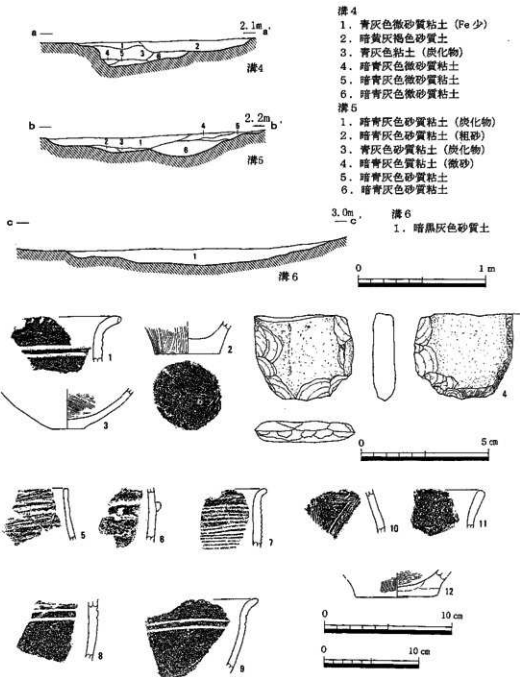


図32 18層上面検出溝(溝4~6)断面図、出土遺物  
(2・3・12は縮尺1/4, 4は1/2, 他は1/3)

している。いずれの遺構も、出土遺物から弥生時代前期におさまる。

#### 溝

溝4 溝4は、調査区の南東に位置し、北東方向に主軸をもつ。現存で最大幅約2m、深さ約20cmである。覆土は6層に分かれる。溝内からは、土器が少量出土している。また、弥生時代以前の土器の混入もある。

溝5 溝5は、調査区の南東に位置し、北西方向に主軸をもつ。現存で最大幅約1.8m、深さ約20cmである。覆土は6層に分かれる。遺物はほとんど出土していない。

溝6 溝6は、調査区の中央部に位置する。

現存で幅約2.2mであり深さ約20cmである。覆土は1層である。本溝からは、土器・石器が少量出土している。

#### 18層検出の遺物

18層からは土器と石器が少量出土している（図32、図版23、24）。5は縄文後晩期の条痕を有する深鉢口縁部片、6は、突帯文土器口縁部片である。2片とも混入だろう。7～9は弥生土器である。いずれも甕であり、口縁部下に2条の沈線をもつもの（8・9）と多重に沈線をもつもの（7）がある。すべて弥生時代前期のものである。

石器は、打製の石鍬（4）がある。花崗岩製であり、刃部の摩滅は不明である。外面に原礫面を残す。折損している。

#### c. 14層検出の遺構と遺物

14層では調査区の中央部付近において、水田畦畔を検出した（図33、図版14-2）。地形は緩斜面を形成している。全体に畦畔の残存状態は悪く、わずかに状況がわかる程度である。

#### 水田畦畔

畦畔はほぼ傾斜に直交してやや軸を北西側に傾けている。傾斜に影響された結果であろう。現存での畦畔の幅約40～70cm、残存高約3cmである。区画の大きさはばらつきが多く不明確である。水田及び包含層から出土した遺物は極めて少量であるが、弥生時代前期の土器片が少量確認できるので、畦畔の時期もほぼ弥生時代前期と考えてかまわないだろう。

#### d. 13層検出の遺構と遺物（図34、図版15-1・2）

13層では、調査区の中央部と南端において水田畦畔を検出した。いずれも18層のように畦畔

調査の成果

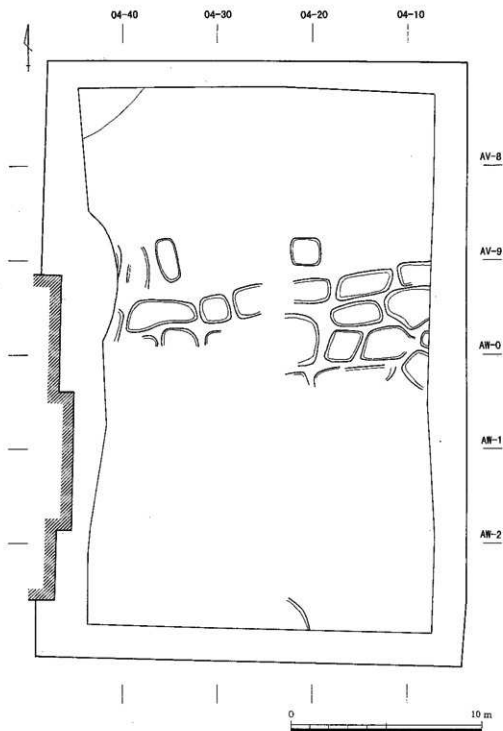


図33 14層上面検出遺構平面図



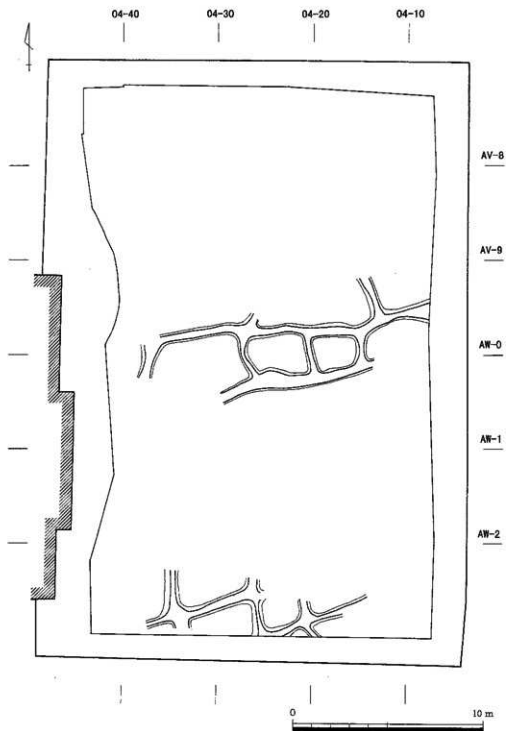


図34 13層上面検出遺構平面図

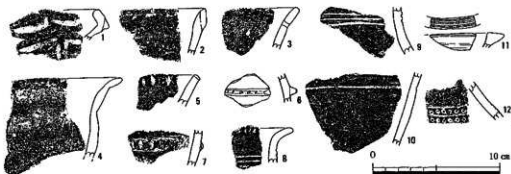


図35 13層出土遺物 (縮尺1/3)

の軸がやや北西側に傾く。地形はやや緩斜面を形成している箇所でも古代の溝の影響を受けていないところに残存している。

#### 水田畦畔

全体に畦畔の残存状態はやや悪い。現存での畦畔の幅約1m、残存高約3cmである。区画の大きさはばらつきが多く不明確である。

#### 13層検出の遺物

13層からは、主体的な時期の土器と思われる弥生時代前期の土器(5・8～11)の他に、混入である縄文時代後期(1～4)及び弥生時代早期(7)、さらに弥生時代中期(12)の土器片少量が出土している(図35、図版24)。包含層から出土した遺物は多時期にわたっており、畦畔の時期は弥生時代前期から弥生時代中期までの時間幅で考える必要がある。

#### e. 12層検出の遺構と遺物

12層では、調査区の南端において水田畦畔を検出した(図36)。残存状況が悪い。

#### 水田畦畔

畦畔は13層畦畔の直上に位置し、軸も同様にやや北西側に傾く。全体に畦畔の残存状態はかなり悪い。現存での畦畔の幅約80cm、残存高約3cmである。区画の大きさ等については不明確である。

#### 12層検出の遺物

12層からは、石器が少量出土している(図37、図版28)。1はサヌカイト製の打製石包丁であ

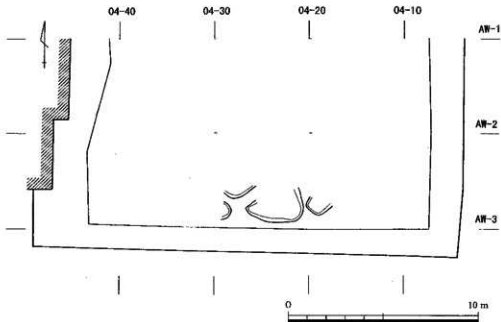


図36 12層上面検出遺構平面図

る。長方形の剝片に整形し、短側縁に抉りを入れている。長側縁には剝離を加え、刃部を形成している。2は、サヌカイト製のスクレーパーである。三角形の剝片の側縁に細かい剝離を加えている。3は花崗岩製の石錘である。楕円形の礎の両端に数回の剝離を交互に加え抉りを形成している。包含層から出土した遺物は、石器以外は極めて少量である。畦畔の時期は特定が難しい。しかし、13層の畦畔との関係が想定でき、古墳時代の土器は皆無であることから、埴輪時期は弥生時代の範疇で考えることができる。

#### f. 11層下層検出の遺構と遺物

11層下層では9条の溝とピット4基を検出した(図38、図版15-3～5)。

##### 溝

調査区の北西隅で9条の溝が切りあって検出された(図38)。これらの溝は調査時には11層検出中に検出されたが、いずれも11層の下面から掘削されている(図38断面図)ので11層下層検出の遺構として報告する。これらの溝はいずれも北東から南西に向かって掘削されている。検出状況は図38平面合成図に示しているが、複雑に切り合っており、個々の溝の状況がわかりにくいので、あえて図38-①～④では遺構の掘削順序を無視し、個々の溝が重複しないように表現している。

調査の成果

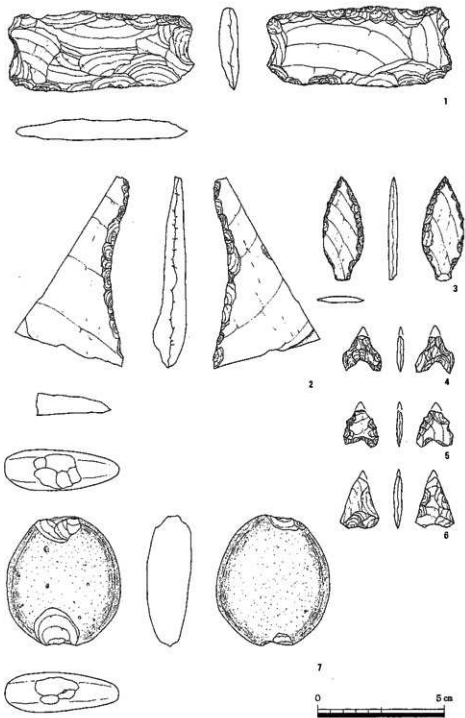


図37 12層出土遺物 (縮尺2/3)

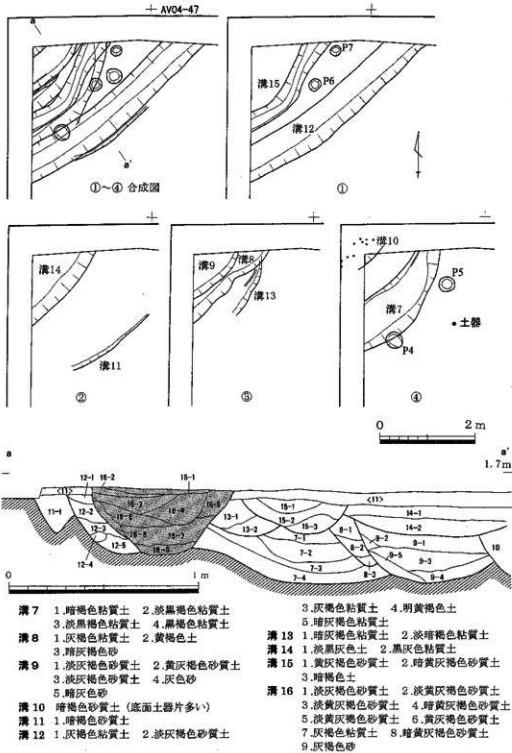


図38 11層下層溝群平・断面図

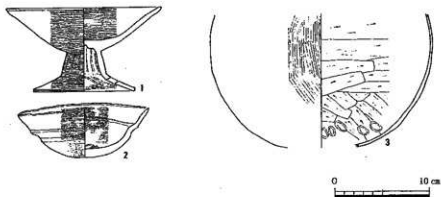


図39 溝10出土遺物 (縮尺1/4)

溝の掘削は土層断面の観察から、まず溝7あるいは溝11が掘削され、その後は埋没した溝を切りながら溝15にいたるまで掘削され続けていることがわかる。また溝10からは古墳時代前半期の高杯と鉢(図39-1・2、図版24)が出土しているので、これらの溝が掘削されたのは古墳時代前半期を中心とする時期に求められよう。この溝群が埋没し、11層が堆積した後に11層上面から溝16が掘削される(図38断面図アミカケの溝)。

これらの溝の掘りかたは残存している部分でみる限り、半円形、底面が極度に狭まる逆三角形、底面幅の広い平坦なものがある。これらの溝はほぼ同じ位置に繰り返して掘削されるとはいえ、掘りかたの形状が異なり、溝幅に大きな差がみられることから、流量にも差があることが想定され、その機能にも違いがあると思われる。

第6次調査においても調査区の北側において弥生時代後期から古墳時代前半期の溝群を検出している(図41)。溝の時期や位置、走行方向からみても矛盾なく連続するものと考えられる。

### ピット

ピット4～7 ピットは溝群のなかで4基検出した。これらのピットはいずれも直径30cm前後のものであるが、底面のレベルは約2.6m、2.7m、2.9mとばらつきがある。埋土はいずれも灰褐色砂質土で、鉄分を多く含み、暗灰褐色ブロックが入り込む。

### g. 11層検出の遺構

11層上面は標高2.75m～3.1mで、北から南に緩やかに下がる。11層上面で検出した遺構は溝16、溝17、溝18、溝19、水田畦畔である(図40、図版15-6)。調査区の南半は古代の溝群によって掘削され、遺構は残存していなかった。時期は層位の関係と出土遺物から古墳時代前半期に相当すると考えている。

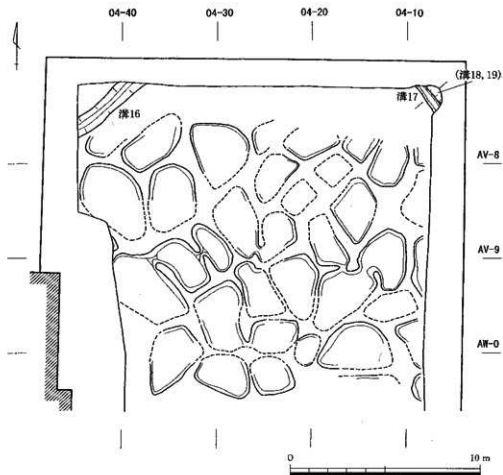


図40 11層上面検出遺構平面図

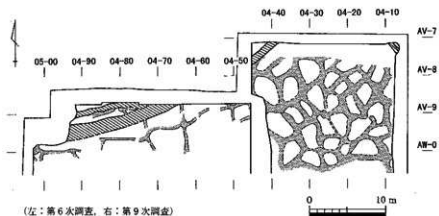


図41 11層上面検出遺構と第6次調査地点との対応関係

## 調査の成果

### 水田

水田畦畔は小区画水田であるが、その形状はいずれもかなりいびつな不整形である。また、水田1筆の面積もかなり違いがある。水田の幾つかには水口が認められる。水田畦畔は地形の傾斜にあわせて構築している。畦畔の幅は0.3~0.6m、残存高は約2~3cmである。畦畔によって区画された水田はいずれも不整形であり、その面積も大きく異なっているが、いくつかの水田が水口によって接続しており、これらの特徴は地形に合わせた水廻りを考慮して畦畔を作ったことをうかがわせる。

### 溝

溝は調査区北西角で1条、北東角で3条検出された。

溝16 溝16は調査区北西隅で検出した。その走行方向は北東から南西である。底面のレベルから北東から南西に水が流れていたことがうかがえる。溝の幅は約1m、深さは約0.2mである。11層下面では同一の方向に9条の溝が掘削されており、溝16もそれを踏襲して掘削されたものと思われる。

溝17 溝17は調査区北東隅で検出した。その走行方向は南東から北西である。底面のレベルから南東から北西に水が流れていたことがうかがえる。溝の幅は約0.6m、深さは約0.1mである。

溝18 溝18は溝17と側溝に切られており、その正確な規模は定かではないが、その走行方向は南東から北西である。その深さは約0.2~0.3mである。底面のレベルから南東から北西に水が流れていたことがうかがえる。

溝19 溝19は溝18と側溝に切られており、その正確な規模は定かでない。また深さも構築の際の上面を残していないため不明である。その走行方向は南東から北西であり、底面のレベルから水もこの方向で流れていたことがうかがえる。

### 第6次調査との関係

第6次調査との関係のみてみると、今回の調査区北西隅で検出した溝16は第6次調査の東北東から南南西にむかって走る溝に接続することがわかる(図41)。

水田畦畔は地形に制約され不統一であり、水田1筆ごとの面積も不統一で狭いものから広いものまで存在する点で共通している。また、溝の走行方向にあわせて畦畔を作り、水廻りを考慮した畦畔を作っていると考えられる点も共通する。しかし、畦畔の幅や1筆の平均面積が大きく異なるなど不整合な点もあり、この点は今後の調査の課題となろう。



#### h. 10層検出の遺構と遺物

10層上面は標高2.9m～3.2mである。地形は北から南に緩やかに下がるが、ほぼ平らな面を形成している。10層上面では水田畦畔と溝2条を検出した(図42・43、図版16-1)。この段階ではそれまでの地形に制約された水田の区割りから正方位の区割りに転換する。出土遺物はいずれも古墳時代後半期のものである。

##### 水田

水田は正方位にあわせて畦畔を作り出している。畦畔の幅は約0.6～0.8m、残存高は約2～3cmである。南北方向の畦畔は軸をほぼ真北にあわせて作る。畦畔の間隔も南北方向のものはほぼ等間隔である。ただし水田の面積は極端に小さいものから大きいものまで存在する。検出の際に南北方向の畦畔に比べて、東西方向の畦畔の検出が著しく困難であったという調査時の所見があり、南北方向の畦畔を東西方向の畦畔によって細分した区画が本来的なものであったとも考えられよう。こうした状況は第7次調査の水田畦畔にも認められた。

##### 溝

11層以下の層で検出した溝は、地形の傾斜にあわせて掘削され、いずれも方位を意識したものではなかったのに対して、10層で検出した溝20、溝21は東西方向に平行して掘削されている。溝は幅約1.6～2.0mであり、深さは約0.2～0.3mである。底面のレベルから東から西に水が流れていたことが考えられる。この溝は隣接する第6次調査地点でも検出されており、東西方向に延びる溝がほぼ直線的に40m以上確認できる。さらに本調査区の西約70mに位置する第7次調査地点でも古墳時代後半期にあたる層で東西方向に走行する溝が検出されている。この溝も本調査区で検出した溝に接続する可能性が高く、その場合約130m以上にわたって方位を意識した直線的な溝が掘削されたことになる。

##### 10層出土遺物

10層からは須恵器杯身、大甕片、土師器高杯が出土した(図43、図版24)。いずれも古墳時代後半期の範囲に収まるものと思われる。特に杯身は、第6・7次調査で検出した溝の出土遺物とほぼ同時期の所産と考えられる。

##### 第6次調査との関係

今回検出した東西方向にのびる溝は第6次調査で検出した溝にプラン・レベルのいずれも合致している(図44)。また第7次調査検出の溝とも対応していると考えられるので、この東西方

調査の成果



図42 10層上面検出遺構平面図

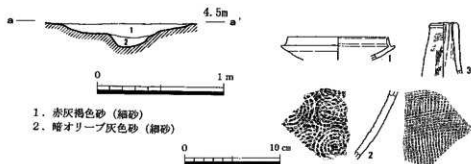


図43 溝20断面図、10層出土遺物 (縮尺1/4)

向の溝は少なくとも130m以上にわたって掘削されていることがうかがわれる。また、水田畦畔の項でもふれたとおり、この段階の水田畦畔は正方位に作られており、東西方向の溝にあわせてかなり広範に耕地の再編がなされていることが指摘できる。

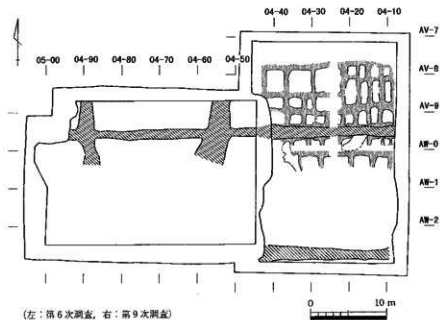
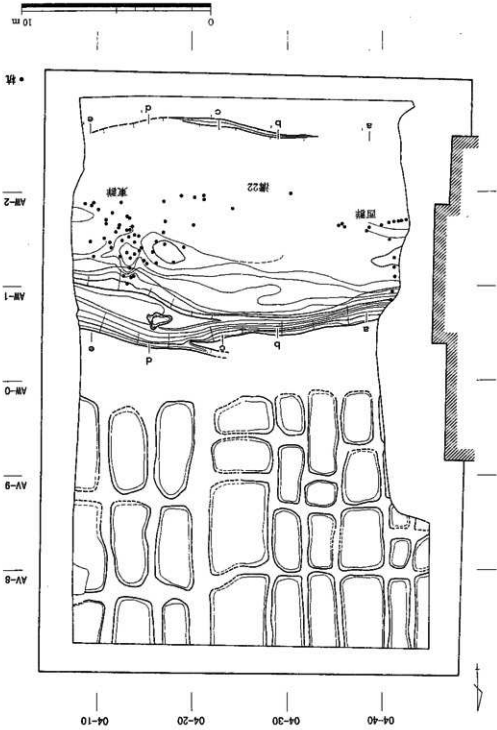


図44 10層上面検出遺構と第6次調査地点との対応関係

## 5. 古代・中世の遺構・遺物

古代に帰属と思われる遺構は8層、9層上面で検出した。中世に帰属と思われる遺

図45 9層上面検出遺構平面図



構は7層上面で検出した。

#### a. 8・9層検出の遺構と遺物

8層上面は標高約3.3m、9層上面は標高3.1~3.2mである。この段階には旧地形の起伏をほぼ解消している。

9層上面では溝22と水田畦畔を、8層上面では溝25を検出している。溝22~溝29はほぼ同じ位置で繰り返し掘削され続けており、検出は8層上面で行った。また溝23、溝27は新たな溝の掘削などによって掘削された面は不明であるが、切り合い関係から溝28以前の掘削であり、8層、9層の堆積する比較的短期間に4回の溝の掘削があったと考えられる。そのため溝22~29については8・9層検出の遺構・遺物として報告する。

#### 水田畦畔

水田畦畔は方位をほぼ正方位にあわせて作っている(図45、46)。調査区東半では水田1枚の面積が比較的広いのに対し、調査区西半では面積が狭いうえ、それぞれの水田の面積にはばらつきがみられる。

第6次調査との対応関係をもてみると、畦畔の方位はほぼ一致する。水田の形状は本調査区

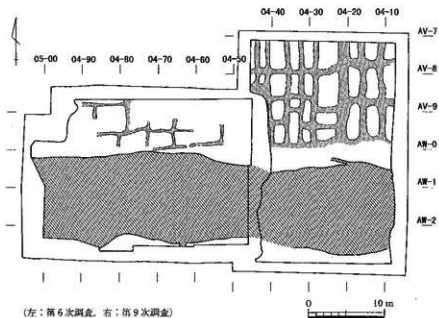


図46 9層上面検出遺構と第6次調査地点との対応関係

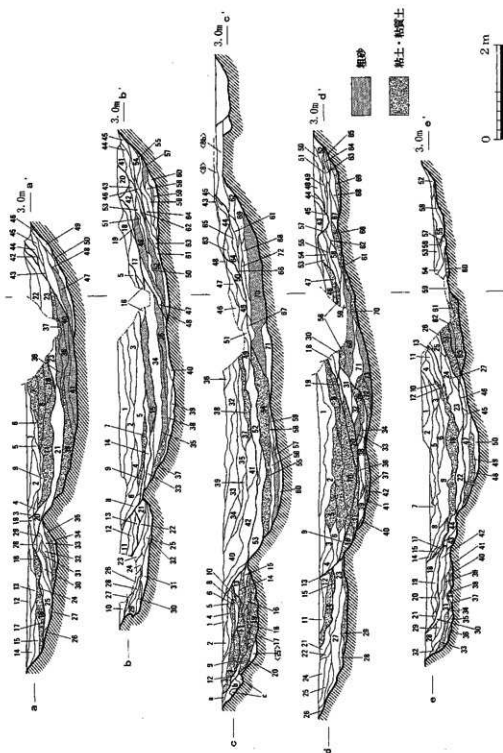


図47 溝22～29断面図

表2 溝22～29土層註記

a-a'			
粘土	10, 21, 31, 34, 37, 39, 46, 49	砂質土	3, 20, 22
粘質土	7, 8, 11, 16	砂	2, 5, 6, 12, 14, 17, 24, 26, 27, 29, 42, 43, 44
土	1, 4, 9, 13, 15, 18, 19, 23, 25, 29, 32, 33, 35, 45, 48, 50	粗砂	30, 36, 38, 40, 41, 47
b-b'			
粘土	7, 32, 37	砂質土	34
粘質土		砂	1, 2, 6, 8, 10, 11, 13, 17, 18, 19, 20, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 29, 31, 33, 38, 40, 42, 43, 44, 45, 47, 53, 54, 58, 60, 62, 63, 64
土	3, 4, 5, 9, 12, 14, 16, 21, 28, 30, 39, 46, 50, 51, 55, 58, 59, 61	粗砂	15, 35, 36, 48, 49, 52, 57
c-c'			
粘土	16, 17, 38, 42, 54, 68, 71	砂質土	1, 2, 3, 4, 5, 8, 45, 49
粘質土	6, 7, 9, 10, 11, 13, 14	砂	12, 15, 32, 33, 41, 43, 44, 46, 47, 48, 53, 55, 58, 59, 62, 63, 64, 65, 67
土	18, 19, 20, 34, 35, 37, 39, 40, 50, 51, 52, 56, 60, 61, 66, 69, 72	粗砂	57, 70
d-d'			
粘土	8, 10, 15, 17, 19, 20, 29, 32, 35, 37, 40, 42, 56, 66, 69, 70, 72	砂質土	11, 43
粘質土	5, 7, 14, 16, 27, 47	砂	2, 9, 22, 23, 25, 28, 30, 36, 44, 48, 49, 50, 52, 54, 57, 58, 59, 61, 62, 63, 64
土	1, 3, 4, 6, 12, 13, 18, 21, 24, 26, 31, 39, 45, 48, 51, 55, 65, 68, 71	粗砂	33, 34, 38, 41, 60, 67, 73
e-e'			
粘土	10, 15, 33, 40, 41, 48, 51, 60, 61, 63	砂質土	22
粘質土		砂	1, 2, 3, 4, 5, 7, 12, 13, 15, 17, 18, 24, 25, 26, 27, 28, 30, 35, 36, 38, 42, 46, 50, 52, 54, 55, 56, 57
土	8, 9, 11, 14, 19, 20, 21, 23, 29, 31, 32, 34, 37, 39, 43, 44, 45, 47, 53, 58, 59	粗砂	49, 62

では南北方向に長軸をとるが、第6次調査では東西方向に長軸をとる。

### 溝

調査区南半を東西に走る溝は、主流部の幅が約12mのかなり大規模なものである。またこの溝の主流部に沿って東西方向に幅約1～2mの溝が数条確認されている。以下ではこの主流部を大溝、主流部からの分流を副溝と呼称して説明する。

8、9層で検出した大溝はほぼ同じ位置で4回にわたって掘りこまれていたことが確認できた。古い方から溝22、溝23、溝25、溝29の順に掘削されているが、そのうち、溝25は8a層上面から、溝22は9層上面から掘削されていることが確認されている。

図47はこの古代の溝群の横断面を上から順に西から東に並べたものである。また、図48にはそれぞれの溝の切り合い関係の模式図を示している。これをあわせて溝の堆積状況をみてみた

調査の成果

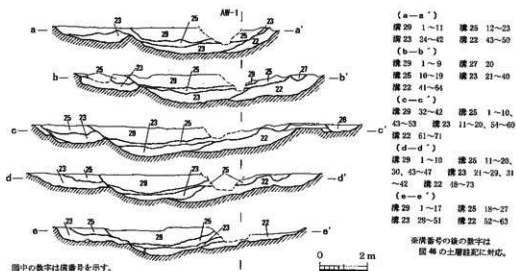


図48 溝22~29断面模式図

い。調査時には図47のように非常に細かく分層しているが、本報告では土質から粘土、粘質土、土、砂質土、砂、粗砂で大別して報告する。

最も古く掘削された溝22は西側から中央部の a-a'~c-c' 断面までは粗砂が底面付近に厚く堆積し、また埋土のほとんどは砂や砂質を帯びる土で構成されている。溝東半の d-d'、e-e' 断面をみてみると底面付近に粘土が堆積している。この堆積の差は図45の平面図をあわせてみると、この d-d'、e-e' 断面付近には多数の杭が打ち込まれ、導水用の堰が築かれたと考えられる地点にあたっていることに起因すると考える。このような施設が築かれた結果、杭群の東では水の流れが緩く、粘質土が堆積したものと考えられる。

溝23についても同様の傾向がうかがわれ、溝主流部西側では粗砂や砂質を帯びる埋土で構成されるが、中央部から東側では粘土が堆積している。またこの傾向は溝伏流部でもみられ、中央部から東には粘質土や粘土の堆積が顕著である。

溝25の主流部は溝29によってその多くを掘削され、この溝群の中では残存部の堆積が最も薄い。その底面の堆積土は西側では砂質を帯びる層が顕著であり、東側ではやはり粘土や粘質土が主体となる。この溝の副溝である溝28では中央から東側にかけての c-c'、d-d' ラインで粘土や粘質土の堆積がみられる。この付近には溝28から南に分かれる分流があり、また、溝28の底部はやや高まっている。杭列のような構築物はみられないものの、分流への導水のために水を止めた結果として粘質土が堆積したのではないかと考える。

最も新しく掘削された溝29は b-b' 断面付近を除いて、底面に粘土や粘質土が厚く堆積する。その後はやや砂質を帯びる土や砂が堆積している。この段階には粘土や粘質土が溝の西側



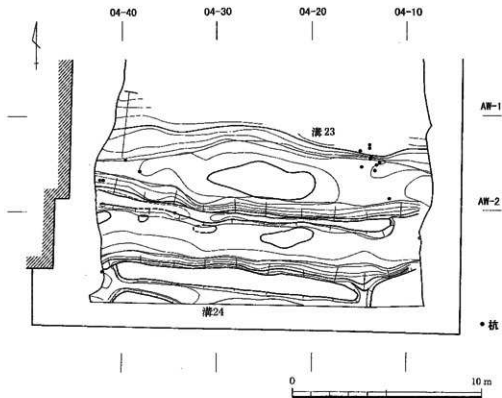


図49 溝23・24平面図

にも堆積するようになっている。

この古代の溝群全体の傾向としては、①溝群の東側では粘質土、粘土の堆積が非常に顕著であること、②これが杭群などの水利調節施設の影響によって生じた堆積状況であること、③水利調節施設の西側では溝の底部付近に粗砂が厚く堆積すること、が指摘できる。

**溝22** 溝22は9層上面から掘り込まれていることが平面的にも層位からも確認されている。したがって大溝の掘削の上限は9層地積以後にある。

溝22は確認できる限りでは幅約12mである。溝の底面は標高1.9m前後まで掘削され、その深さは約1.2～1.3mである。10層以下で検出した溝と比較すると飛躍的にその規模が大きくなっている。また、溝には多数の杭が打ち込まれている。杭群は溝東側と溝西側の二群に分けて考えることができるが、特に溝東側の杭群の北には大溝から分岐する副溝が認められることから、水利調整のための杭群であったと考えられる。溝西側の杭群については副溝が検出されていないが、同様の機能を想定してもよいと思われる。

**溝23** 溝23は溝22の南半を拡張するかたちで掘削される。その幅は確認できる範囲では約9mである。溝23では北側の掘りかたは底面まで掘り込まれるのに対して、南側では溝中央部に

調査の成果

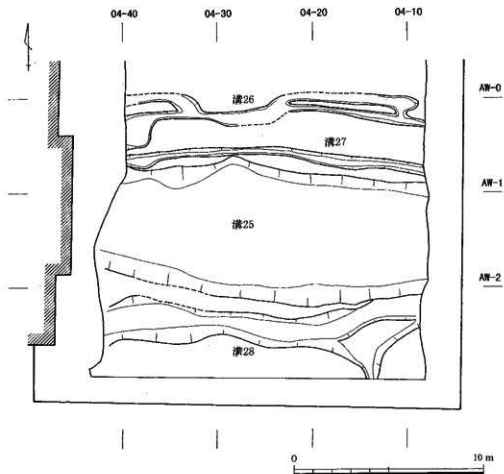


図50 溝25～28平面図

中洲状に高い部分を残し、中洲状の平坦面から再び掘削して底面に至るという掘削方法をとる。南側には副溝である溝24が大溝に沿って東西方向に掘削されており、この中洲状の高まりは副溝への導水を目的とした施設としての機能を持っていた可能性も考えられる。また、この溝23にも東側で枕群が認められ、この位置で水利調整を行っていた場合、中洲状の高まりの位置とあわせてみると、2段階に堰を築くことで効率よく副溝に導水できたのではないかと考える。

**溝25** 溝25は8 a層上面から掘削されている。幅約7m、深さ約0.7～0.8mである。溝25には溝の南北の辺に沿って東西方向の副溝（溝26、溝27、溝28）が掘削される。副溝は幅0.5m～2.5mとその規模には大きな開きがある。また溝26、溝28のように別の溝に分岐していると思われる溝もある。

**溝29** 溝29は幅約6mで調査区南半をゆるく蛇行しながら東西方向に走る。深さは約75cmで

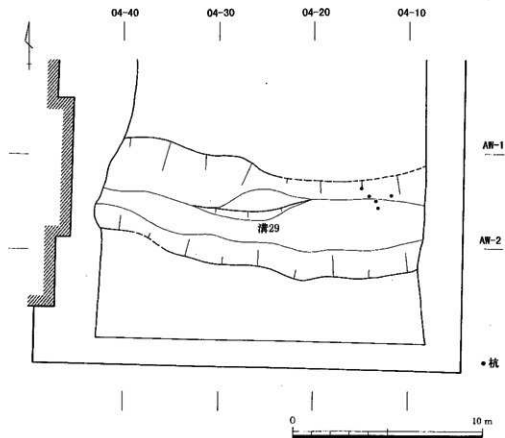


図51 溝29平面図

ある。

もっとも新しく掘削された溝29は、掘削された面は不明だが、上下の層の関係からみると8 a層上面から掘り込まれていると思われる。土層の堆積状況を見てみると、8層は溝22の上に堆積しているが、溝23、25の上位には複数の溝が切りあっていることもあって確認できない。したがって溝25が埋没してから溝29が掘削されたのか、機能している間に掘削されたのかは判断できない。ただし、それまでの流路を踏襲していることから、溝25が完全に埋没する前に掘削されたのではないと思われる。

これらの溝は岡山平野の復原条里からすると坪境の位置にあっており、これまでの調査で既に坪境の溝として機能していた可能性を指摘している。

#### 溝22～29出土遺物 (図52～54)

溝22～29からは須恵器碗・蓋、内面黒色土器碗、土師器碗・鉢、蜻蛉、土鏝が出土している。須恵器のうち、図52-10、11には外面に墨書が認められるが、書体の崩れと欠損部のため判

調査の成果

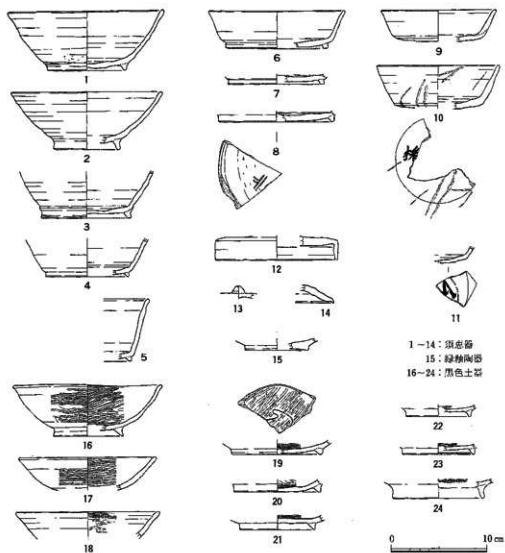


図52 溝22~29出土遺物 ① (縮尺1/4)

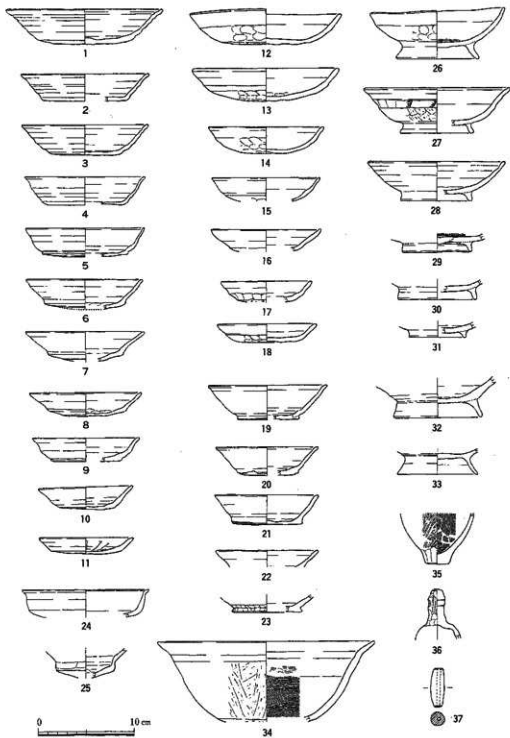


図53 溝22～29出土遺物② (縮尺1/4)

調査の成果

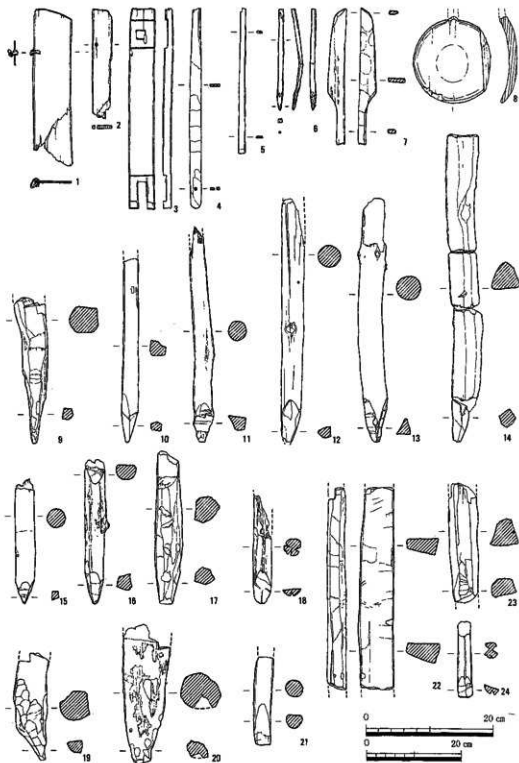


図54 清22~29出土遺物③ (1~8は縮尺1/6, 9~24は1/8)

説できていない。そのうち10では火葬が明瞭に観察できる。図52-15は緑釉のかかった坏身である。内面黒色土器は図52-16の外面が白色を呈するほかはいずれも黒色である。これらの遺物のうち一部には奈良時代のものを含んでいるが、ほぼ平安時代後半（10世紀後半～11世紀初頭）のものである。

溝からは土器のほか、木製品、杭が出土している（図54）。図54-1は箱部材の一部であると思われ、桜の皮で綴じている。図54-2も同じく箱部材と思われ、側縁付近に径約3mmの縦じ穴が穿孔される。3は両小口にはぞを切ったりえ、さらに穿孔がある。これは図54-1・2と異なり、皮綴じではなく部材同士をほぞで組み合わせる箱部材であると思われ、その厚さは約15mmと厚い。図54-4は扇の骨で、下端部が丸みをもつように加工されている。また下端付近に穿孔がある。図54-5はへら状の木製品である。下端部が厚みをもち、下端の端部にはすり減った痕跡が認められる。図54-7は杓子の一部である。図54-8は匙形木製品である。身の周縁部を面取りしている。裏面には加工痕が明瞭に残る。

杭は約80本出土している。そのうち、先端部を明瞭に加工しているもの（図54-9～21）や、面取り等の加工を行っているもの（図54-22～24）について図化した。

以上のほか、動物遺存体が出土している（第4章2）。

#### b. 7層検出の遺構と遺物

7層上面では溝1条、畝状遺構、小溝群、杭列を検出した（図55）。7層上面は標高3.3～3.4mである。

##### 小溝群

小溝群はいずれも幅約10～30cm、深さ3～5cmと浅いものである。これらの小溝群の多くは南北方向に延び、東西方向の溝30に沿う南北9mの範囲ではこの溝に沿って東西方向に掘りこまれる。

調査区の北西には幅約50～80cm、深さ10～15cmの畝状遺構が5条検出されている。

##### 溝

調査区南半部に東西方向に掘削された溝30は幅約2.8m～3.8mとかなり幅広である。この溝は2度にわたって掘削されており、上層溝は下層溝を北に拡張するかたちで掘り込まれている。深さは下層溝で約70cm、上層溝では約50cmと浅くなる。溝は坪境として機能していた古代の大溝の流路を踏襲して掘削されており、この段階においても前段階の土地区画が影響していることを示している。

調査の成果

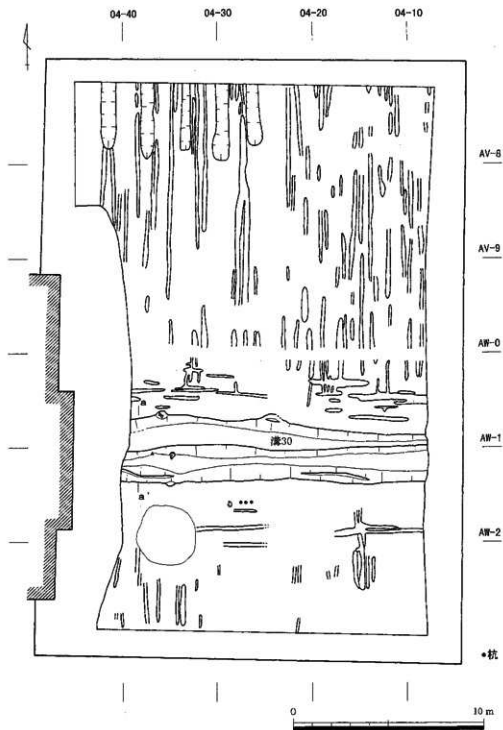


図55 7層上面検出遺構平面図



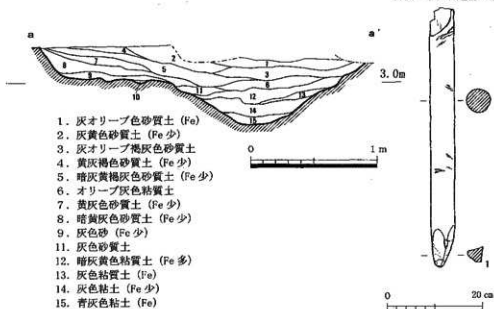


図56 溝30断面図、出土遺物 (縮尺1/8)

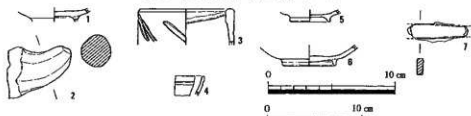


図57 7層出土遺物 (1-6は縮尺1/4, 7は1/3)

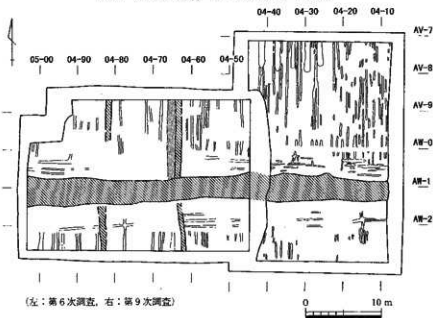


図58 7層上面検出遺構と第6次調査地点との対応関係

## 調査の成果

### 杭列

杭列は溝30の南に東西方向に打ち込まれている。杭は先端を削っただけの加工である（図56—1）。

### 第6次調査との関係

第6次調査との関係をみてみると、遺構の構成はほぼ対応している（図58）。したがってこの層での調査成果は第6次調査の成果を追認したものといえよう。

### 7層検出遺物

出土遺物には土師質碗のほか、青磁片（図57—3）、白磁片（図57—4）、土師質鍋の把手（図57—2）、不明鉄片（図57—7）がある。出土遺物と第6次調査の成果から、7層の時期は14～15世紀にあたると思われる。

## 6. 近世・近代の遺構・遺物

近世・近代の遺構は2、3、5層で確認されている。

### a. 5層上面検出の遺構

5層上面は標高3.5～3.6mをはかる（図59）。

5層上面では小溝群、南北方向に走る畦畔2条、東西方向の溝1条が検出されている。

南北方向に走る畦畔のうち、東側のものは畦畔の下に深さ10cmに満たない浅い溝が掘削されていた。

### 小溝群

小溝群はほとんどが南北方向に掘削される。これらはいずれも幅約10～30cm、深さ約3～5cmと浅いものである。東西方向に走るものはいずれも東西方向の溝付近のもののみである。

### 畦畔

畦畔は南北方向に走るものが2条確認されているが、その間隔は約2mと非常に狭い。しかし、先述の小溝群が東側の畦畔を切っている。したがってこの小溝群が形成された段階に畦畔は東側のものから西側の畦畔に移ったとみることができ、この間隔のせまい2条の畦畔は同時に存在したものではないことが推定できる。

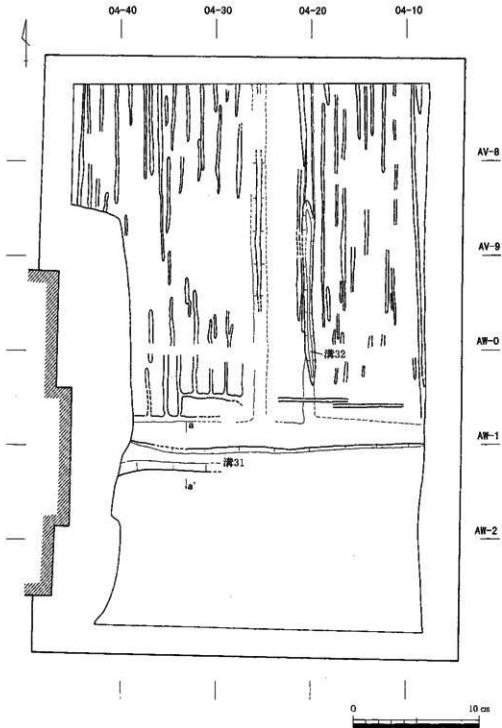


図59 5層上面検出遺構平面図

## 調査の成果

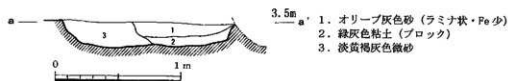


図60 溝31断面図

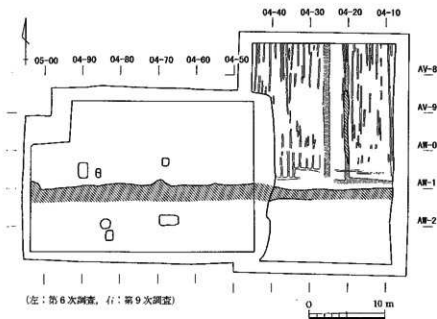


図61 5層上面検出遺構と第6次調査地点との対応関係

## 溝

東西方向に掘削された溝31は幅約1.4~1.6mであり、深さは約15~25cmである(図60)。溝南辺の東半部は3層上面から掘削される溝33によって掘り込まれているため、南側の掘りかたは不明である。

## 第6次調査との関係

第6次調査では5層上面に対応する層で本調査区の溝に接続する溝と6基の上坑が検出されている(図61)。しかし、本調査区で検出した小溝群は検出されておらず、また、本調査区では土坑が確認されていないなど、検出された遺構の状況が異なる。隣接地点でこのように遺構の状況が異なることは調査時の認識が異なったことに起因するといわざるを得ない。今後、隣接地を調査する際の課題となろう。

## b. 3層上面検出の遺構

3層上面は標高3.6~3.7mをはかる(図62)。

3層上面では南北、東西方向に走る畦畔が各1条と東西方向に掘削された溝1条、野臺と思われる土坑2基が確認されている。

## 畦畔

南北方向に走る畦畔は幅約1mであり、また、畦畔の高さは残存部で15~20cmである。東西方向の畦畔は溝の南辺に沿って構築されている。畦畔の南辺は上層の溝によって掘削されていた。この東西方向の畦畔には水口が2カ所設けられる。

## 溝

東西方向に掘削された溝33は幅1~2m、深さは約40cm前後である(図63)。この溝33の北辺では側面に貼り石がなされ、この貼り石は石列状に並んでいる。ただし、この貼り石は土で覆われて埋め殺された状況であり、畦畔や耕作土はこの埋め殺した土の上のっている。したがって、溝を掘削した後に貼り石をし、これを埋め殺した後にさらに畦畔や耕作土をのせたということになる。いかなる理由で貼り石を埋め殺したのか、貼り石の機能はいかなるものであったのかは不明である。

## 野臺

野臺と思われる2基の土坑は直径約1.8~2.2mであり、深さは約70cm前後である。

## 第6次調査との関係

本調査区で検出した溝は第6次調査の溝に接続する(図64)。しかし、溝の南辺に東西方向に走る畦畔は第6次調査では検出されていない。

## c. 2層上面検出の遺構

2層上面は標高3.8~4.0mをはかる(図65)。

2層上面では陸軍屯営地造成以前の畝状遺構、畦畔、溝、野臺と思われる土坑を検出した。

## 畝状遺構

畝状遺構は調査区中央を南北に走る畦畔の東に南北方向に約0.5m前後の間隔で認められた。幅は0.7~0.9mである。中央の南北方向の畦畔以西では全く検出されていない。第6次調査に

調査の成果

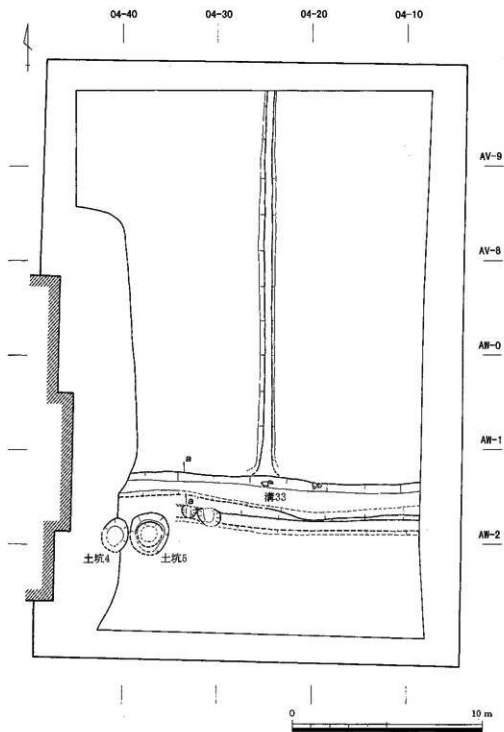
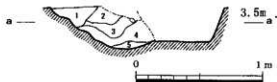


図62 3層上面検出遺構平面図



1. 淡青灰色粘土 (Fe)
2. 褐色砂質土 (Mn)
3. 暗灰黄色砂質土 (Mn)
4. 青灰色暗黄灰色粘質土 (Mn)
5. 暗黄灰色粗砂

図63 溝33断面図

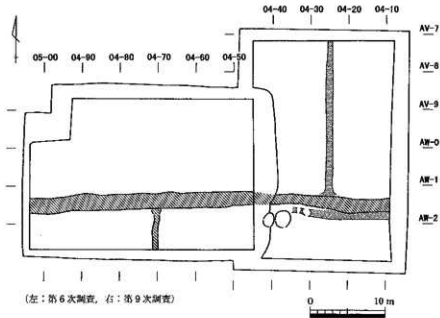


図64 3層上面検出遺構と第6次調査地点との対応関係

おいても04—80ラインから東に約20mまでは畝状遺構は検出されておらず、この約30mの範囲では畝が作られなかったということになる。

### 溝

溝34は東西方向に掘削されており、第6次調査の溝に接続する。幅約1.2～1.3mであり、深さは約30～40cmである。造成土（1層）によって埋められており、近代の遺構としてとらえることができる。

### 野臺

野臺と考えられる土坑は調査区内で3基確認した。直径は約1.6～2.4m、深さは約90cm前後であるが、浅い1基は約50cmである。

調査の成果

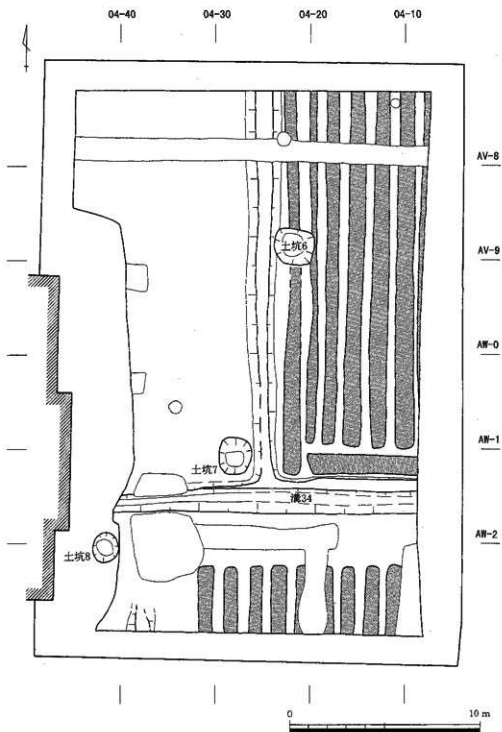


図65 2層上面検出遺構平面図



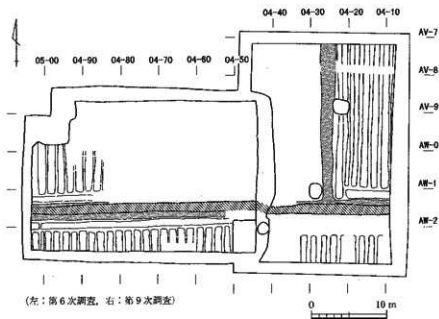


図66 2層上面検出遺構と第6次調査地点との対応関係

#### 畦畔

畦畔は調査区中央に南北に走り、東西方向に掘削された溝34に沿って東西方向に折れる。また、溝34の対岸にも東西方向に畦畔が走ることが確認されている。また、調査区南西隅にわずかながら南北方向にのびる畦畔が確認されている。

東西方向に掘削された溝34に沿って走る畦畔は第6次調査においても検出されている。南北方向の畦畔は第6次調査では検出されていないため畦畔の間隔は不明であるが、畝の検出されなかった範囲を考慮すれば約30m弱であったと思われる。

#### 第6次調査との関係

第6次調査では調査区南東隅に段状の高まりが認められたが、本調査区では確認されておらず、土坑3の位置から考えても第6次調査東壁の中10cm内外で収束しているものと考えられる(図66)。

#### d. 5～2層出土の遺物

5～2層出土遺物はおもに土器、陶磁器である(図67、図版27)。また、若干の鉄製品、銅銭が出上した。銅銭は5層出土で、北宋で1068年に鑄造された「熙寧元寶」である。踏鉄は2層から出上している。第12次調査地点では明治時代のトロッキ軌道と思われる遺構が確認されて

## 調査の成果

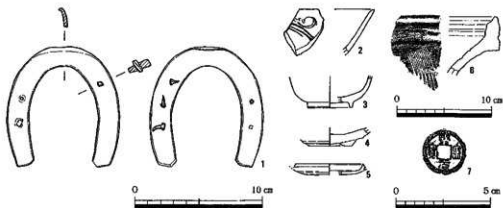


図67 5～2層出土遺物 (1・2・6は縮尺1/3, 3～5は1/4, 7は1/2)

<sup>(1)</sup> おり、トロッコを馬が引いた可能性もある。

## 註

1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』12号 1994

## 7. その他の遺物

そのほか、本来の包含層から遊離した遺物で、特徴的なものを示しておく。

### a. 溝22～29検出の遺物

古代の溝の埋土中からは古代の土器だけでなく、縄文時代から古墳時代に至るまで多くの遺物が出土した(図68)。

土器 1～3は縄文時代後期の深鉢である。1・2は福田K2式から津雲A式の間の土器であり、3は第Ⅳ群土器式である。5～7は弥生時代早期の突帯文土器である。ほぼ津島岡大式に相当する。8～11は弥生時代前期の土器である。8～10は壺の肩部片である。いずれも沈線を数条引き、段状にしていることから、前期でも前半の特徴を示す。11は前期末の壺の口縁部下片である。12は弥生時代中期後半の壺の口縁部片である。13は須恵器の蓋である。古墳時代後半期に相当する。

石器 溝22～29から出土した石器も溝に伴うものではなく、他の時期のものである。1・2は石鏃であり、ササカイト製である。ともに凹基式であり、1は先端部を折損している。3はササカイト製の石錐である。風化した面を有する細長い剥片に調整を加え先端を尖らせている。4はササカイト製の楔型石器の破片である。厚みのある剥片の側面に刻線を加えている。半分を折損している。5・6はササカイト製のスクレーパーである。5は側面に一部刻線が認められる。6は微細な刻線痕がわずかに残る。

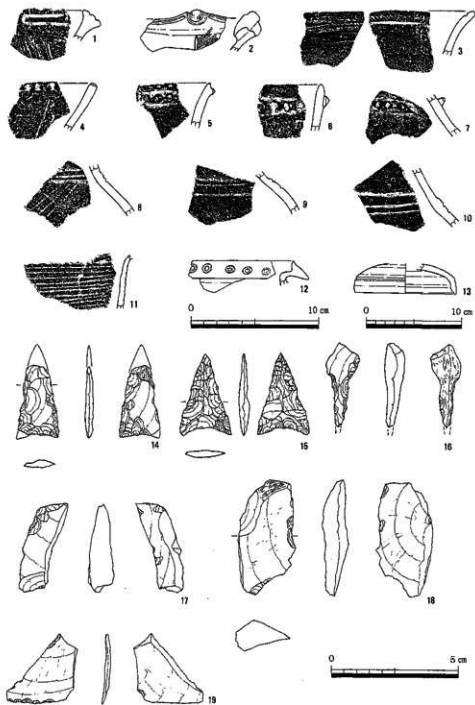


図68 その他の遺物（溝22～29出土）（13は縮尺1/4、14～19は2/3、他は1/4）

調査の成果

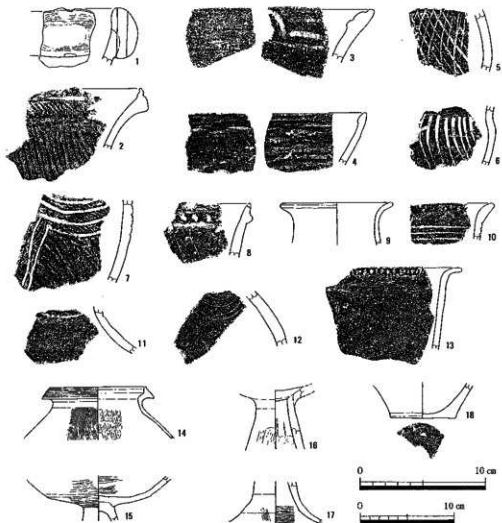


図69 その他の遺物（包含層出土）（9・14-17は縮尺1/4、他は1/3）

b. 本来の包含層から遊離した遺物

本来帰属していた包含層から何らかの要因によって遊離している遺物について示しておく（図69）。1～7は縄文時代後期の土器である。3・4が半精製で、他は精製である。7は、福田K 2式の深鉢体部片である。2本沈線の区画内に縄文が残る。1・2は福田K 2式から津雲A式までの土器群に相当する。4は、口縁部内面が肥厚する鉢である。5・6は、太めの条線を網目状にしたり垂下させたもので、縄手式に相当するものだろう。8は弥生時代早期の突帯文土器深鉢である。突帯以下に沈線文をもつ。9～13は弥生時代前期の土器である。9～12は

壺である。10・11の肩部には1・2条の沈線がみられ、12の肩部には沈線による連弧文が見られる。13は口唇部に刻みをもつ甕の口縁部片である。これらは、ほぼ弥生時代前期の前半に相当するものと思われる。14は、弥生時代中期の甕の口縁部片である。口縁端部に沈線による凹線文をもつ。体部は刷毛目が残る。弥生時代中期後半に相当する。15から17は高杯の脚部片である。15の内外面にはミガキが丁寧になされ、16・17の外面には刷毛目やケズリを施している。これらは、古墳時代前期のものであろう。

## 8. 出土遺物観察表

1 遺物観察表は、縄文土器・弥生土器・土師器・黒色土器・陶磁器・金属器・木器・石器の順に分類掲載している。表中の「番号」欄は「挿図番号一個々の遺物の番号」を示しており、実測図の番号と対応している。

2 観察表の遺構・地点・番号・層名は本文中の番号と一致する。

3 「地点」欄は、遺構出土のものは遺構名を記し、包含層出土のものは所属する層名を記している。出土した遺構が特定できず、複数の遺構が候補として考えられる場合、たとえば溝22から溝29の場合は、「溝22-29」としている。遺構名は、本文中同様、貯蔵穴：SP、と略号化して使用しているものがあり、その他、焼土土坑：焼、と略している場合がある。なお、出土地点のわからないものは不明としている。

4 遺物の観察表の表記は次のような基準で表記している。

法量…残存率が1/2以下のものは復原推定値である。なお、縄文土器と弥生土器については、小破片が多数であるため法量を明記していない。残存率は「形態の特徴と技法」の欄に適宜記載しているが、小片については残存率を示していない。〈 〉は残存値のみのものを示している。法量において表示している数値はすべて基本的に現存での最大値である。

胎土…微砂：径0.5mm未満、細砂：径0.5～1mm未満、粗砂：径1～2mm未満、細礫：径2mm以上である。その他、判別の困難なものに関しては砂あるいは砂を含むとしている部分がある。色調欄については、2つ併記してある場合は、「内面・外面」の順に表示し、1つだけの場合は、内外面全体の色調を表している。

## 調査の成果

表3 出土遺物観察表(縄文土器①)

番号	地点	器種	形態の特徴と技法	色調	粘土
7-1	溝1	深鉢	口縁部小片。縄文地に3本1單位の幅太沈線文。	赤茶灰	細砂少
8-1	SP02	深鉢	口縁部小片。肩部外面下に沈線、内面に縄文をもつ。	茶褐	細砂少
8-2	SP02	深鉢	体部小片。外面にRL縄文。	暗褐	細砂少
8-3	SP02	浅鉢	丸底で小型。頸部無文の他、外面はRL縄文。1/6残存。	黄灰褐	細砂少
9-1	SP03	鉢	口縁部小片。粗製で、外面にかすれた条痕。	暗褐	細砂
9-2	SP03	鉢	口縁部小片。粗製で、無文。	暗褐	細砂
10-1	SP04	深鉢	口縁部小片。内面に沈線文、外面は無文。	茶褐	細砂少
10-2	SP04	鉢	口縁部小片。直立外反する。粗製で、無文。	暗褐	細砂
10-3	SP04	鉢	口縁部小片。やや外反する。粗製で、無文。	暗褐	細砂
12-1	SP09	鉢	体部片。やや粗製で、無文。	茶褐	細砂
13-1	SP10	深鉢	口縁部小片。粗製で、無文。	暗褐	細砂
13-2	SP10	深鉢	体部片。精製で、磨り消し縄文をもつ。	暗灰褐	微砂
13-3	SP10	鉢	体部片。粗製で、無文。	暗褐	細砂
14-1	溝1	深鉢	体部片。粗製で、無文。	暗褐	細砂
14-2	溝1	深鉢	口縁部小片。肩部が肥厚する。粗製で、無文。	暗褐	細砂
14-3	溝1	鉢	口縁部小片。粗製で、無文。	暗褐	細砂
18-1	23b層	深鉢	口縁内両鉢。1本沈線、磨り消し縄文。2/3残存。	黒地	微砂
18-2	23b層	深鉢	口縁部片。肩部は内湾する。1本沈線と磨り消し縄文。	暗茶褐	微砂
18-3	23b層	深鉢	口縁部片。肩部は外反する。2本沈線と磨り消し縄文。	暗褐	細砂
18-4	23b層	鉢	口縁部小片。口縁部内湾。粗製で、無文。	暗褐	細砂
18-5	23a層	深鉢	口縁部小片。肩部は丁字形。沈線をもつ。摩滅激しい。	暗褐	微砂
18-6	23a層	深鉢	口縁部片。肩部は帯状に肥厚し、外面にRL縄文。	暗褐	微砂
18-7	23a層	深鉢	内湾の口縁部小片。外面上部、縄文帯と沈線区画。	暗褐	微砂
18-8	23a層	深鉢	外反する口縁部小片。外面にRL縄文。やや粗製。	暗褐	微砂
18-9	23a層	深鉢	外反する口縁部小片。肩部外面にLR縄文。	暗灰褐	細砂
18-10	23a層	深鉢	外反する口縁部小片。外面無文。	暗褐	細砂
18-11	23a層	深鉢	直立する口縁部小片。沈線区画内にLR縄文。	暗褐	微砂
18-12	23a層	深鉢	体部小片。1本沈線と磨り消し縄文。精製。	暗褐	微砂
18-13	23a層	深鉢	体部小片。外面に縄文。	暗灰褐	細砂
18-14	23a層	深鉢	体部小片。外面沈線文。精製	暗褐	微砂
18-15	23a層	深鉢	体部小片。1本沈線と磨り消し縄文。精製。	暗褐	細砂
18-16	23a層	深鉢	体部片。沈線下にLR縄文。	暗灰褐	細砂
18-17	23a層	深鉢	体部片。沈線とLR縄文。	暗褐	細砂
18-18	23a層	鉢	外反する口縁部小片。肩部内湾肥厚。やや粗製。	暗灰褐	細砂
18-19	23a層	深鉢	口縁部小片。区画となる沈線の一部残存。	暗褐	細砂
18-20	23a層	深鉢	口縁部小片。口唇部やや平坦。無文で粗製。	暗褐	細砂
18-21	23a層	深鉢	口縁部小片。内外面に強いナデ痕。無文で粗製。	暗褐	細砂
18-22	23a層	深鉢	口縁部小片。無文で粗製。	暗灰褐	細砂
18-23	23a層	深鉢	口縁部小片。無文で粗製。	暗褐	細砂
18-24	23a層	鉢	口縁部小片。無文で粗製。	暗茶褐	細砂
18-25	23a層	深鉢	体部小片。沈線をもつ。無文で粗製。	暗褐	細砂
18-26	23a層	深鉢	体部小片。外面に2本の沈線と条痕をもつ。	暗灰褐	細砂
19-1	22b層	鉢	無文で、丁寧なミガキ。肩部肥厚。底部丸底。精製。2/3残存。	茶灰褐	微砂
19-2	22b層	鉢	口縁部は外反。ナデのみ。1/4残存	灰褐	細砂
19-3	22b層	深鉢	口縁部片。肩部肥厚。外面RL縄文。1/8残存。	暗褐	細砂
19-4	22b層	深鉢	口縁部片。外面に条痕文。	暗灰褐	細砂
19-5	22b層	深鉢	底部欠損。肩部RL縄文。体部沈線以下縄文。3/4残存。	暗灰褐	細砂
20-1	22b層	深鉢	口縁部片。1/6残存。沈線区画。縄文、磨滅激しい。	暗灰褐	細砂

表4 出土遺物観察表(縄文土器②)

番号	地点	器種	形態の特徴と技法	色調	粘土
20-2	22b層	深鉢	半完形。肩部縄文、頸部沈線以下縄文・条痕。	暗褐	細砂
21-1	22b層	深鉢	半完形。口縁端部すぼまる。外面条痕、内面ケズリ。	灰褐	細砂
21-2	22b層	深鉢	半完形。口縁有突起。肩部縄文、外面無文。	暗灰褐	細砂
21-3	22b層	深鉢	底部片。凹底。外面条痕。	暗褐	粗砂
21-4	22b層	深鉢	底部片。凹底。外面ケズリ、かすれた条痕。	暗褐	細砂
21-5	22b層	深鉢	胴の張る器形。2/3残存。外面条痕。	暗茶褐	粗砂
22-1	22b層	深鉢	管孔の突起片。沈線をもつ。	暗灰褐	微砂
22-2	22b層	深鉢	口縁部小片。T字形の端部、沈線区画、縄文充填。	暗褐	細砂
22-3	22b層	深鉢	口縁部小片。T字形端部、外面太沈線区画、縄文。	暗褐	細砂
22-4	22b層	深鉢	口縁部小片。外面に縦沈線、縄文。	暗灰褐	細砂
22-5	22b層	深鉢	口縁部小片。端部下沈線、縄文。	暗茶褐	細砂
22-6	22b層	深鉢	口縁部小片。端部下沈線区画内縄文。	暗褐	細砂
22-7	22b層	深鉢	口縁部小片。端部下内外に沈線区画内縄文。	暗灰褐	細砂
22-8	22b層	深鉢	口縁部小片。端部下沈線、縄文。	暗褐	細砂
22-9	22b層	深鉢	口縁部小片。端部クランク状沈線、縄文。	暗褐	細砂
22-10	22b層	鉢	口縁部片。端部肥厚縄文、頸部無文、以下縄文。	暗灰褐	細砂
22-11	22b層	深鉢	口縁部小片。端部以下縄文。	暗褐	細砂
22-12	22b層	深鉢	口縁部小片。端部沈線区画、縄文。	暗褐	粗砂
22-13	22b層	深鉢	口縁部片。端部肥厚縄文、頸部無文。	暗褐	細砂
22-14	22b層	深鉢	口縁部小片。端部肥厚縄文、頸部無文。	暗灰褐	細砂
22-15	22b層	深鉢	口縁部小片。端部縄文帯、頸部無文。	暗褐	細砂
22-16	22b層	鉢	口縁部小片。端部やや肥厚。内面に沈線文。	暗茶褐	細砂
22-17	22b層	鉢	口縁部小片。低盛状口縁。外面条痕。	暗灰褐	粗砂
22-18	22b層	鉢	口縁部小片。無文で粗製。	暗褐	粗砂
22-19	22b層	深鉢	口縁部小片。内外面にかすれた条痕。粗製。	暗褐	粗砂
22-20	22b層	深鉢	口縁部小片。口縁部以下で屈曲。無文で粗製。	暗褐	粗砂
22-21	22b層	鉢	口縁部小片。外面にかすれた条痕。粗製。	暗灰褐	粗砂
22-22	22b層	鉢	口縁部小片。端部丸い。無文で粗製。	暗褐	粗砂
22-23	22b層	鉢	口縁部小片。口唇部面取。無文で粗製。	暗褐	粗砂
22-24	22b層	鉢	口縁部小片。無文で粗製。	暗灰褐	粗砂
22-25	22b層	鉢	口縁部小片。端部やや肥厚。無文で粗製。	灰褐	粗砂
22-26	22b層	鉢	口縁部小片。端部やや丸く肥厚。無文で粗製。	暗褐	粗砂
22-27	22b層	鉢	口縁部小片。無文で粗製。	暗灰褐	粗砂
22-28	22b層	深鉢	口縁部小片。無文で粗製。	暗褐	粗砂
22-29	22b層	深鉢	口縁部小片。無文で粗製。	暗褐	粗砂
23-1	22b層	鉢	内湾する口縁部片。1/4残存。無文で粗製。	暗灰褐	粗砂
23-2	22b層	鉢	内湾する口縁部小片。無文で粗製。	暗灰褐	粗砂
23-3	22b層	深鉢	体部片。1本沈線の区画内に縄文。	暗褐	細砂
23-4	22b層	深鉢	体部片。1本沈線の縁状区画内に縄文充填。	暗灰褐	細砂
23-5	22b層	深鉢	体部片。1本沈線の四角形区画内に縄文充填。	暗茶褐	細砂
23-6	22b層	深鉢	体部片。太い1本沈線の区画内に縄文充填。	暗褐	細砂
23-7	22b層	深鉢	頸部片。外面に縄文。彫減激しい。	暗褐	粗砂
23-8	22b層	深鉢	体部小片。沈線以下羽状縄文。	暗灰褐	細砂
23-9	22b層	深鉢	体部片。1本沈線の弧状区画内に縄文。	暗褐	細砂
23-10	22b層	深鉢	頸・体部片。頸部無文。体部外面に羽状縄文。	暗灰褐	粗砂
23-11	22b層	深鉢	体部片。沈線より上に縄文。	暗灰褐	細砂
23-12	22b層	深鉢	体部小片。外面に縄文R。	暗褐	細砂

## 調査の成果

表5 出土遺物観察表(縄文土器③)

番号	地点	器種	形態の特徴と技法	色調	胎土
23-13	22b層	深鉢	体部小片。外面に縄文R1。	暗褐色	細砂
23-14	22b層	深鉢	体部小片。外面に縄文R1。	暗灰褐色	細砂
23-15	22b層	深鉢	体部小片。外面に縄文R1。	暗褐色	細砂
23-16	22b層	深鉢	体部小片。外面に縄文R1。	暗褐色	細砂
23-17	22b層	深鉢	体部小片。斜めの条線をもつ。	暗茶褐色	細砂
23-18	22b層	深鉢	体部片。無文粗製。	灰茶褐色	細砂
23-19	22b層	深鉢	体部小片。外面にかすれた条痕。	暗褐色	細砂
23-20	22b層	深鉢	体部小片。外面にかすれた条痕。	暗灰褐色	細砂
24-1	22a層	深鉢	口縁部小片。縁部部に沈線と縄文。	暗褐色	細砂
24-2	22a層	深鉢	口縁部小片。端部先端部方突出。端部に縄文。	暗褐色	細砂
24-3	22a層	鉢	口縁部小片。端部やや肥厚。帯状に縄文。	暗褐色	細砂
24-4	22a層	鉢	外反する口縁部小片。無文。	暗灰褐色	細砂
24-5	22a層	深鉢	外反する口縁部小片。無文。	暗褐色	細砂
24-6	22a層	深鉢	頸・体部片。体部外面に円形・縦線の沈線文。	暗褐色	細砂
24-7	22a層	深鉢	体部小片。平行する沈線と縄文帯。	暗褐色	細砂
24-8	22a層	深鉢	体部小片。重四角形の沈線文。	暗灰褐色	細砂
24-9	22a層	深鉢	体部片。無文粗製。	暗褐色	細砂
24-10	22a層	深鉢	体部小片。外面に縄文R1。	暗褐色	細砂
24-11	22a層	深鉢	体部小片。外面に縄文R1。	暗茶褐色	細砂
24-12	22a層	深鉢	体部下位の片。無文粗製。	暗褐色	粗砂
24-13	22a層	鉢	底部片。外面は無文。	暗褐色	粗砂
24-14	22a層	深鉢	底部片。外面は無文。	暗褐色	粗砂
25-1	20・21層	深鉢	口縁部片。端部に多量円・沈線文対向。	暗灰褐色	細砂
25-2	20・21層	深鉢	口縁部片。端部肥厚。端部に沈線と縄文。	灰茶褐色	細砂
25-3	20・21層	深鉢	口縁部片。波状口縁。縦状帯区間に縄文充填。	暗褐色	細砂
25-4	20・21層	深鉢	内傾口縁の小破片。端部に平行沈線文・縄文。	暗褐色	細砂
25-5	20・21層	深鉢	内傾口縁の小破片。端部に平行沈線文・縄文。	暗灰褐色	細砂
25-6	20・21層	鉢	肥厚する口縁部小片。内面端部平行沈線文。	暗褐色	細砂
25-7	20・21層	鉢	内傾口縁の小破片。端部に平行沈線文。	暗茶褐色	細砂
25-8	20・21層	深鉢	口縁部小片。端部肥厚。内外面縄文帯。	暗褐色	細砂
25-9	20・21層	深鉢	肥厚する口縁部小片。内面端部平行沈線文。	暗灰褐色	細砂
25-10	20・21層	鉢	内面端部の肥厚する口縁部小片。内面に沈線文。	暗褐色	細砂
25-11	20・21層	鉢	頸部の屈曲する器形。端部・体部に縄文。	灰褐色	粗砂
25-12	20・21層	鉢	端部肥厚の口縁部小片。外面に縄文。	暗灰褐色	細砂
25-13	20・21層	鉢	口縁部小片。外面に縄文。内面沈線。	暗褐色	細砂
25-14	20・21層	深鉢	端部肥厚の口縁部小片。外面に縄文。	暗褐色	細砂
25-15	20・21層	深鉢	口縁部片。頸部無文。上位に縄文帯。	暗灰褐色	細砂
25-16	20・21層	深鉢	口縁部小片。端部下に沈線。外面無文。	暗褐色	細砂
25-17	20・21層	鉢	外反する口縁部小片。外面に弱い条痕。	暗灰褐色	粗砂
25-18	20・21層	深鉢	外反する口縁部小片。外面に条痕文。	暗褐色	粗砂
25-19	20・21層	深鉢	端部肥厚口縁部小片。外面に斜め沈線。	暗褐色	細砂
25-20	20・21層	鉢	内湾する口縁部片。端部に縄文帯。	暗褐色	細砂
26-1	20・21層	深鉢	外反する口縁部小片。無文で粗製。	暗灰褐色	粗砂
26-2	20・21層	鉢	外反する口縁部小片。無文で粗製。	暗褐色	粗砂
26-3	20・21層	深鉢	直立する口縁部片。無文で粗製。	暗褐色	粗砂
26-4	20・21層	鉢	外反する口縁部小片。無文で粗製。	暗灰褐色	粗砂
26-5	20・21層	鉢	外反する口縁部小片。無文で粗製。	暗褐色	粗砂
26-6	20・21層	深鉢	内湾する口縁部小片。無文で粗製。	暗褐色	粗砂



表6 出土遺物観察表(縄文土器④)

番号	地点	器種	形態の特徴と技法	色調	胎土
26-7	20・21層	鉢	外反する口縁部小片。無文で粗製。	暗灰褐	粗砂
26-8	20・21層	深鉢	体部小片。縄文R。粗製。	暗灰褐	粗砂
26-9	20・21層	鉢	体部小片。沈線上に縄文R施文。	暗褐	粗砂
26-10	20・21層	深鉢	体部小片。櫛状工具による縦の波状文。	暗灰褐	細砂
26-11	20・21層	深鉢	体部小片。斜位に櫛状工具による施文。粗製	暗茶褐	細砂
26-12	20・21層	深鉢	体部小片。かすれた条痕。	暗褐	細砂
26-13	20・21層	深鉢	体部小片。弱い沈線区画内に縄文施文。	暗灰褐	細砂
26-14	20・21層	深鉢	底部片。体部下位外面条痕。無文、凹底。	暗灰褐	細砂
26-15	20・21層	深鉢	底部片。底部外面無文。平底。	暗褐	細砂
26-16	20・21層	深鉢	底部片。底部外面無文。平底。	暗褐	細砂
26-17	20・21層	深鉢	底部片。底部外面無文。凹底。	暗茶褐	粗砂
26-18	20・21層	深鉢	底部片。底部外面無文。凹底。	暗褐	粗砂
26-19	20・21層	深鉢	底部片。体部下位ケズリ。底部外面無文。凹底。	灰褐	粗砂
26-20	20・21層	深鉢	底部片。底部外面無文。凹底。	暗褐	粗砂
26-21	20・21層	深鉢	底部片。体部下位ケズリ。底部外面無文。凹底。	暗灰褐	粗砂
26-22	20・21層	深鉢	底部片。下縁突出。底部外面無文。平底。	暗灰褐	粗砂
26-23	20・21層	深鉢	底部片。底部外面無文。平底。	暗褐	粗砂
26-24	20・21層	深鉢	底部片。体部下位ケズリ。底部外面無文。凹底。	暗灰褐	粗砂
27-1	21層	深鉢	口縁部小片。端部縄文帯。	暗褐	細砂
27-2	21層	深鉢	外反する口縁部小片。無文。	暗褐	細砂
27-3	21層	深鉢	外反する口縁部小片。無文。	暗灰褐	微砂
27-4	21層	深鉢	体部小片。沈線区画。縄文	灰褐	微砂
27-5	21層	深鉢	体部小片。沈線区画。縄文	暗褐	微砂
27-6	21層	深鉢	体部小片。外面縄文。粗製。	暗褐	粗砂
27-7	21層	深鉢	底部片。底部外面無文。平底。	暗灰褐	細砂
27-8	20層	深鉢	口縁部小片。端部縄文帯。沈線1条。	暗褐	微砂
27-9	20層	深鉢	口縁部小片。端部やや肥厚縄文帯。沈線。	暗褐	微砂
27-10	20層	深鉢	口縁部小片。端部肥厚。頸部無文。	暗褐	細砂
27-11	20層	深鉢	口縁部小片。外面縄文。	暗褐	細砂
27-12	20層	深鉢	口縁部小片。端部縄文帯。	暗灰褐	細砂
27-13	20層	深鉢	口縁部小片。端部肥厚。粗製。	暗褐	粗砂
27-14	20層	鉢	1/5残存。外面櫛状工具痕跡文。	暗褐	粗砂
27-15	20層	深鉢	口縁部片。内外面に条痕文。	暗茶褐	粗砂
27-16	20層	深鉢	口縁部片。端部肥厚。無文。	暗褐	粗砂
27-17	20層	深鉢	口縁部小片。端部肥厚。頸部無文。	暗褐	粗砂
27-18	20層	深鉢	口縁部小片。内外面に条痕文。	暗灰褐	粗砂
27-19	20層	底部	底部片。底部外面無文。凹底。	暗褐	細砂
27-20	20層	深鉢	口縁部片。端部内側に屈折。無文粗製。	暗灰褐	細砂
27-21	20層	深鉢	口縁部片。端部内側に屈折。無文粗製。	暗灰褐	細砂
27-22	20層	深鉢	口縁部小片。端部わずかに段をもつ。	暗茶褐	細砂
27-23	20層	深鉢	口縁部小片。無文粗製。	暗茶褐	細砂
27-24	20層	深鉢	体部片。3条の沈線。	暗茶褐	細砂
27-25	20層	深鉢	体部片。沈線と縄文帯。	暗褐	細砂
32-6	18層	深鉢	やや内湾する口縁部。外面に条痕。	暗灰褐	細砂
35-1	13層	深鉢	逆L字に内接する口縁部。沈線文を配設。	暗褐	細砂
35-2	13層	深鉢	口縁部小片。端部肥厚。外面無文。	暗茶褐	細砂
35-3	13層	深鉢	口縁部小片。内外面無文。穿孔有り。	暗褐	細砂
35-4	13層	深鉢	端部肥厚。縄文帯。頸部以下無文。1/8残存。	暗褐	細砂

## 調査の成果

表7 出土遺物観察表(縄文土器⑤)

番号	地点	器種	形態の特徴と技法	色調	胎土
68-1	溝22	深鉢	口縁部小片。肩部肥厚。沈線文。	暗褐色	細砂
68-2	溝23	深鉢	口縁部小片。太沈線。小突起。口縁下縄文帯。	暗褐色	細砂
68-3	溝23	深鉢	外反する口縁部小片。肩部内外に縄文RL帯状。	暗褐色	細砂
69-1	23-22層	深鉢	口縁部小片。上下方向の穿孔。無文精製。	暗灰褐色	微砂
69-2	不明	深鉢	肥厚する口縁部小片。肩部縄文帯。外面縦ミガキ。	暗褐色	細砂
69-3	19-7層	深鉢	内面肥厚口縁部小片。内面に太沈線文。	暗灰褐色	細砂
69-4	22-15層	鉢	内面肥厚口縁部小片。内外面無文。	暗褐色	細砂
69-5	19-7層	深鉢	体部小片。外面に櫛状工具による網目条線文。	茶褐色	細砂
69-6	23-21層	深鉢	屈曲する頸部-体部小片。体部に縦の条線。	灰茶褐色	細砂
69-7	22-15層	深鉢	体部小片。1本沈線と磨り消し縄文。精製。	暗褐色	細砂

表8 出土遺物観察表(弥生土器①)

番号	地点	器種	形態の特徴と技法	色調	胎土
26-25	21・20層	壺	体部小片。沈線2条。内外面ナデ。	茶褐色	微砂
26-26	21・20層	壺	外反口縁部小片。2条沈線。	茶褐色	微砂
26-27	21・20層	壺	体部小片。2条沈線。	茶褐色	微砂
26-28	21・21層	壺	体部小片。ケズリ出し段に2条の沈線。	茶褐色	微砂
27-26	20層	甕	低い突帯をもつ口縁部小片。肩部面取り。	暗灰褐色	粗砂
27-27	20層	甕	口縁部小片。突帯。三角形刻み。沈線文。	暗茶褐色	細砂
27-28	20層	甕	外面に沈線4条。ナデ。	茶褐色	微砂
27-29	20層	壺	外面に沈線4条。ナデ。	茶褐色	微砂
27-30	20層	甕	体部小片。2条沈線。	暗茶褐色	細砂
27-32	20層	壺	平底の底部。無文、ナデ。	暗茶褐色	微砂
30-1	19層	甕	如意状口縁部小片。沈線3条。木目刺突列。	暗茶褐色	微砂
30-2	19層	甕	口縁端部短く外推。沈線多条。	暗茶褐色	細砂
30-3	19層	甕	直立する口縁部。頸部細く上げまる。沈線1条。	暗灰褐色	細砂
30-4	19層	甕	口縁部外反小片。頸部に沈線2条。	暗灰褐色	細砂
30-5	19層	甕	外反口縁部小片。端部刻み。	灰褐色	細砂
30-6	19層	甕	半完形。端部刻み。平底。内面ヘラケズリ。	暗褐色	細砂
30-7	19層	甕	平底の底部。体部外面下位ケズリ。	暗褐色	細砂
32-1	18層	甕	口縁部小片。口唇部刻み。頸部沈線条。	暗褐色	細砂
32-2	18層	甕	平底の底部片。体部外面下位刷毛目。	暗灰褐色	細砂
32-3	18層	壺	平底の底部片。内面刷毛目。	茶褐色	微砂
32-6	18層	甕	体部小片。三角形突帯。刻み小さめ。	暗灰褐色	細砂
32-7	18層	甕	体部小片。頸部沈線多条。	暗褐色	細砂
32-8	18層	甕	体部小片。頸部沈線2条。	暗灰褐色	細砂
32-9	18層	甕	体部小片。沈線3条。	暗灰褐色	細砂
32-10	18層	壺	体部小片。櫛状工具による三角文。	暗褐色	細砂
32-11	18層	壺	口縁部小片。無文。	暗灰褐色	微砂
32-12	18層	甕	底部片。外面ヘケム。	暗灰褐色	細砂
35-5	13層	甕	口縁部小片。口唇部刻み。	暗灰褐色	細砂
35-6	13層	甕	体部小片。細く高い突帯をもつ。刻みは小ぶり。	暗褐色	細砂
35-7	13層	甕	体部小片。太く低い突帯をもつ。刻みは小ぶり。	暗褐色	細砂
35-8	13層	甕	体部小片。口唇部刻み。頸部沈線3条。	暗褐色	細砂
35-9	13層	壺	体部小片。頸部沈線3条。	暗褐色	細砂
35-10	13層	甕	体部小片。頸部沈線1条。他無文。	暗灰褐色	細砂
35-11	13層	甕	口縁部小片。肩部肥厚。上部に縦即縄文。	暗灰褐色	細砂
35-12	13層	壺	頸部小片。沈線間に竹管文列。	暗褐色	微砂

表9 出土遺物観察表(弥生土器②)

番号	地点	器種	形態の特徴と技法	色調	胎土
67-4	溝23	甕	口縁部小片。口唇部割み。	暗褐	細砂
68-5	溝22	甕	口縁部小片。口唇部割み。肩部下段突帯。	暗灰褐	細砂
68-6	溝22	甕	口縁部小片。突帯はやや下がる位置につく。	暗灰褐	細砂
68-7	溝22	甕	内縁する頸部片。細く高い突帯をもつ。	暗褐	微砂
68-8	溝23	甕	ケズリ出し段に1条の比線。3本の斜線。	暗褐	微砂
68-9	溝23	甕	頸部小片。沈線2本。	暗灰褐	微砂
68-10	溝23	甕	ケズリ出し段に1条の比線。	暗灰褐	微砂
68-11	溝22	甕	頸部小片。沈線多条。	明灰褐	細砂
68-12	溝22	甕	口縁部小片。肩部肥厚。上部に竹筥文列。	暗灰褐	細砂
69-8	18-15層	甕	口縁部小片。突帯小ぶり。低め。頸部比線文。	暗灰褐	細砂
69-9	14-12層	甕	口縁部。1/3残存。無文。ナデ。	灰褐	細砂
69-10	14-12層	甕	口縁部小片。頸部3本沈線。	暗灰褐	細砂
69-11	6次覆乱	甕	頸部小片。頸部1本沈線。	暗灰褐	細砂
69-12	20-12層	甕	頸部小片。頸部に4条程度の垂直文沈線。	暗灰褐	細砂
69-13	18-15層	甕	強く外反する口縁。1/6残存。無文。	暗灰褐	細砂
69-14	16層	甕	T字形口縁部。1/4残存。肩部上部撥回線文。	黄灰褐	細砂
69-15	14-12層	高杯	脚部片。外面ケズリ。内面板目。	黄灰褐	粗砂
69-16	14-12層	甕	底部・底部片。1/4残存。底部外面無文。	暗灰褐	細砂

表10 出土遺物観察表(土師器①)

番号	地点	器種	口径	器高	底径	形態の特徴と技法	色調	胎土
39-1	11層	高杯	16.2	9.0	10.4	大きく外反する口縁。裾の屈折する脚部。内外ミガキ完成。	赤褐	微砂
39-2	11層	鉢	13.8	5.9	-	L1線部段状に外反。底部ケズリ。胴部よりヒミガキ。	赤褐	細砂
39-3	11層	甕	-	-	-	球状の底部片。外面ハケメ。内面ケズリ・振振瓦敷。	黄灰褐	微砂
43-3	10層	高杯	-	-	-	脚部片。外面ハケメ・ミガキ。内面ケズリ。	黄灰褐	微砂
69-15	9-11層	高杯	-	-	-	肩部底部片。段をもつ。内外面ミガキ。	黄灰褐	微砂
69-16	9-11層	高杯	-	-	-	脚部片。外面ハケメ。内面ナデ。	黄灰褐	細砂
53-2	溝23	杯	13.4	2.9	9.3	底部：外面・ナデ・平滑。内面丹塗り明敷。1/4残存。内面石も含む。	淡灰白～赤橙灰褐	微砂多。赤色粒
53-3	溝23	杯	13.2	3.2	7.0	底部：寛キり後ナデ。丹塗り。	赤橙灰褐	微砂。赤砂少
53-4	溝22	杯	12.6	3.0	9.0	底部：外面寛キり後軽いナデ。内面押圧。1/3残存。	淡灰白	細砂。粗砂少
53-5	溝22	杯	12.4	3.0	9.0	底部：中央押圧・周縁寛キり。内面丹塗り。1/4残存。	赤褐。灰褐	微砂。赤砂多
53-6	溝22	杯	12.3	3.2	8.5	底部：内外面押圧。底部周縁寛キり。板質。口径：12.5cm。	明灰褐～灰褐	細砂。粗砂
53-7	溝22	杯	12.4	-	7.9	底部：中央押圧・周縁寛キり。口縁歪み。1/4残存。板質。	淡灰褐～明橙褐	細砂。粗砂少
53-8	溝22	杯	11.7	2.5	8.3	底部：中央押圧・周縁寛キり。口縁部内外面窪多。	灰褐色	微砂
53-9	溝22	杯	11.2	2.5	7.4	底部：寛キり。1/4残存。	暗橙褐	細砂
53-10	溝22	杯	9.7	2.3	5.9	底部：中央押圧・周縁寛キり後ナデ。口径：9.5～9.9cm。歪み。器高：2.1～2.5cm。	淡橙～淡黄灰褐	細砂。角閃石微少
53-11	溝23	杯	9.9	1.8	7.5	底部：中央押圧・周縁寛キり後ナデ。内面こてあて痕？。口縁板質。	灰黄	粗砂。赤色粒
53-12	溝23	杯	15.7	3.4	9.3	底部：押圧・重。内面種子圧痕。口径：15.4～16cm。1/2残存。器高：3.1～3.7cm。歪み。	黄褐灰	粗砂。微砂少
53-13	溝23	杯	15.4	3.5	13.1	底部：押圧・周縁には面有り。1/3残存。	淡灰白。明橙	微砂。赤色粒多
53-14	溝23	杯	12.1	2.8	10.7	底部：外面押圧。1/4残存。	黄灰褐	細砂

調査の成果

表11 出土遺物観察表(土師器②)

番号	地点	器種	口径	器高	底径	形態の特徴と技法	色調	胎土
53-15	溝22	杯	11.4	—	8.5	底部:押圧, 1/4残存。	淡褐色	微砂
53-16	溝22	杯	11.6	—	7.6	ナゲ, 1/4残存。	暗灰褐～黒灰	精良
53-17	溝23	杯	9.6	—	7.9	底部:造り歪ナゲ・角縁押圧とナゲ, 1/4残存。	淡黄灰白	精良, 赤色粒
53-18	溝23	杯	10.5	2.0	8.5	底部:押圧。	灰褐色～明褐色	精良, 赤色粒少
53-19	溝23	杯	12.5	3.7	6.6	横ナゲ, 底部:中央造り・周縁造り後ナゲ, 1/3～1/4残存。	淡灰褐, 底部黒灰	細砂多
53-20	溝22	杯	10.8	3.0	6.3	横ナゲ, 底部:造り, 全体に歪み, 1/4残存。	淡黄灰褐	細砂, 赤色粒
53-21	溝22	杯	10.9	3.2	7.3	底部:造り後粗いナゲ, ロクロ回転石, 口縁シャープ。	淡褐色	細砂多
53-22	溝23	杯	10.8	2.5	7.2	底部:造り, 硬質, 1/4残存, 角閃石も僅少含む。	淡褐色	細砂, 赤色粒
53-23	溝22	杯	—	—	7.4	底部:造り, 胴部下端工具使用の押圧・シャープ, 1/3残存。	淡灰褐白	微砂, 赤色粒
53-24	溝23	杯	13.2	—	11.8	全体丁寧なナゲ, 口縁部沈線1条, 内面丹塗り, 1/7残存。	赤褐, 灰褐	細砂, 角閃石多
53-25	溝23	杯	—	—	6.0	底部:外面造り後ナゲ・内面押圧, 内面に曲線の痕跡, 1/4残存。	灰褐	細砂多
53-26	溝22	高台付杯	14.6	5.1	8.7	体部下半押圧, 内面一部ミガキ痕, 口径14.3～14.9cm, 底径8.1～8.9cm, 器高4.8～5.4cm	淡黄灰	細砂多
53-27	溝29	高台付杯	15.4	7.9	7.7	幅1cm前後の工具によるナゲ(一部で砂粒動く), 1/4残存。	淡黄灰	微砂, 赤色粒
53-28	溝22	高台付杯	14.6	4.2	7.6	底部:押圧, 1/3残存。	赤褐	細砂, 赤色粒
53-29	溝22	高台付杯	—	—	7.3	内面粗いハケ, 高台内に粘土巻き上げ痕, 内外面丹塗り, 硬質。	淡灰褐, 赤色化	細砂
53-30	溝22	高台付杯	—	—	8.4	底部:押圧・ナゲ, 内面煤, 1/4残存。	黒灰, 淡黄灰	細砂, 角閃石
53-31	溝22	高台付杯	—	—	6.1	底部:押圧・ナゲ, 1/3残存。	明褐色, 暗褐色	細砂多, 角閃石
53-32	溝23	高台付杯	—	—	9.3	底部:内外面仕上げのナゲ, 硬質。	淡黄灰	精良, 金雲母
53-33	溝22	高台付杯	—	—	8.6	底部:外面押圧, 1/2面残存。	黄褐	細砂多
53-34	溝22	鉢	23.0	—	—	体部内面:ハケ・上半ハケ後ナゲ, 体部外面:ケズリ, 内外面丹塗り, 1/4残存。	赤褐色, 淡黄灰白	微砂, 赤色粒
53-35	溝22	鉢	—	—	2.5	内面ハケ, 外面タタキ, 底部ナゲ。	灰褐	細砂多, 雲母多
57-1	溝28	碗	—	—	—	高台付き。	灰	細砂多
57-2	溝28	碗	—	—	—	把手破片, 断面丸形, 外面ナゲ, 一部ハケメ残る。	灰茶褐	粗砂
57-5	溝28	碗	—	—	4.0	高台付き, 内外面ナゲ。	灰褐	細砂
57-6	溝28	碗	—	—	4.4	高台付き, 内外面ナゲ。	灰褐	細砂
67-5	溝31	皿	7.0	1.2	—	内外面ナゲ。	灰茶褐	細砂

表12 出土遺物観察表(黒色土器)

番号	地点	器種	口径	器高	底径	形態の特徴と技法	色調	胎土
52-16	溝23	碗	15.1	5.4	7.4	押圧・ナゲ後ミガキ(密), 口径15.1～15.6cm, 器高5.2～5.6cm, 古輪型柄に似た胎土。	灰黒, 淡黄灰	精良, 粗砂
52-17	溝22	碗	14.6	—	—	内外面ミガキ(密), 1/8残存。	灰黒, 淡黄灰	精良, 金雲母?
52-18	溝22	碗	15.2	—	—	内面ミガキ(不明箇), 外面横ナゲ, 1/6残存。	黒, 暗灰褐	微砂, 角閃石多
52-19	溝22	碗	—	—	9.7	内面ミガキ(密)・縁割?, 底部外面押圧, 1/4残存。	黒, 淡茶褐	微砂, 角閃石少
52-20	溝23	碗	—	—	9.2	内面ミガキ(稀), 1/5残存。	黒, 淡茶褐	微砂, 角閃石
52-21	溝23	碗	—	—	8	内面ミガキ(密), 底部外面押圧, 高台内縁状黒雲2条。	黒, 明茶褐	微砂, 金雲母多
52-22	溝22	碗	—	—	6.8	内面ミガキ, 底部外面押圧, 1/4残存。	黒, 淡赤褐	微砂, 角閃石多
52-23	溝22	碗	—	—	7.6	内面ミガキ(密)・強い, 底部外面押圧, 高台部に沈線, 硬質, 1/6残存。	黒, 明褐色	微砂
52-24	溝23	碗	—	—	9.6	内面ミガキ(密), 外面横ナゲ, 1/4残存。	黒, 灰褐	精良, 細砂

表13 出土遺物観察表(土製品)

番号	地点	器種	長さ	幅	厚さ	形態の特徴と技法	色調	胎土
53-35	溝22	罎壺	—	—	—	押圧・ナデ。つまみ部に5×7mmの円孔・縦方向の工具痕。	灰黒	微砂
53-36	溝22	土罐	1.5	4.1	1.4	丁寧なナデ。	淡黒灰	精良、角閃石少

表14 出土遺物観察表(須臾器)

番号	地点	器種	口径	器高	底径	形態の特徴と技法	色調	胎土
43-1	10層	杯身	—	—	—	端部丸くおさめ。内外面ナデ調整。	青灰	緻密
43-2	11層	罐	—	—	—	体部片。外面平行峭き目。内面青褐色文。	青灰	緻密
53-1	溝23	杯	16.4	3.6	9.6	底部：鋭キリ。1/4～1/6残存。	灰黄灰白	細砂少
52-1	溝23	高台付杯	16.5	6.3	8.3	全体横ナデ。底部中心部押圧。口縁部1/3残存。	灰	微砂、粗砂少
52-2	溝23	高台付杯	16.1	6.1	7.0	底部内面ナデ。シャープさない。内面黒色化？	黒灰系、淡灰	微砂少、粗砂
52-3	溝22・溝23	高台付杯	—	—	9.5	底部内外面押圧。シャープで硬質感あり。	暗灰	細～粗砂多
52-4	溝23	高台付杯	—	—	8.8	全体横ナデ。硬質感。	夜青灰白	微砂、粗砂僅少
52-5	溝23	高台付杯	—	—	—	全体横ナデ。高台部丸み有り。	淡灰、灰	微砂、粗砂少
52-6	溝22	高台付杯	14.4	4.0	10.8	全体横ナデ。1/6残存。	灰黒、新灰	微砂、粗砂少
52-7	溝22	高台付杯	—	—	10.2	全体横ナデ。底部：外面鋭キリ・内面ナデ。	淡灰白	微砂少
52-8	溝22	高台付杯	—	—	12.2	全体横ナデ。底部外面ケズリ・線刻。1/6残存。	淡灰	微砂、細砂少
52-9	溝23	杯	12.0	3.3	9.0	全体横ナデ。底部鋭キリ。1/7残存。	白	微砂、粗砂少
52-10	溝22	杯	12.8	3.7	9.2	全体横ナデ。底部鋭キリ。底部墨書。火押(図トーン部)。1/2残存。	灰	細～粗砂多
52-11	溝23	杯	—	—	—	底部：周縁部鋭キリ・中心押圧・墨書。	淡灰白	微砂少、黒色粒少
52-12	溝22	蓋	12.9	—	—	全体横ナデ。天井部：内面不規則ナデ・外面自然釉。1/3残。器高推定約2.5cm。	灰、暗灰	緻密
52-13	溝22	杯蓋	—	—	—	横ナデ。自然釉。	淡灰白	微砂、黒色粒
52-14	溝22	杯蓋	—	—	—	横ナデ。自然釉。	淡灰	微砂、黒色粒少
52-13	溝22	杯蓋	10.0	—	—	1/4残存。内外ナデ。	淡灰	緻密

表15 出土遺物観察表(陶磁器)

番号	地点	器種	口径	器高	底径	形態の特徴と技法	色調	胎土
52-15	不明	碗	—	—	6.6	緑釉陶器。底部外面鋭キリ。内面割箸。外面直軸。	淡黄白、緑、淡緑青	精良
57-3	溝28	蓋	10.0	—	—	青磁の蓋口縁部小片。内外面太沈線彫刻。	緑灰	緻密
57-4	溝29	碗	—	—	—	白磁の碗口縁部小片。端部下端沈線、段。	灰白	緻密
57-2	溝31	碗	—	—	—	青磁の蓋口縁部小片。内面に陰刻文。	緑灰	緻密
57-3	溝31	碗	—	—	4.6	陶器碗の底部片。1/3残存。底部ケズリ出し。	灰白	緻密
57-4	溝31	碗	—	—	4.3	陶器碗の底部片。1/4残存。底部ケズリ出し。	茶褐	緻密
57-5	溝31	攪鉢	—	—	—	陶器製攪鉢の口縁部小片。標目顯著。	暗茶褐	細砂

## 調査の成果

表16 出土遺物観察表(金属製品)

番号	地点	材質	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	形態の特徴と技法
57-1	7層	鉄	不明	4.5	1.2	0.4	7.5	方形でやや厚みがある。
67-1	2層	鉄	鑄鉄	9.0	8.5	0.5	100	U字形。釘が一部残存。
67-2	5層	銅	鏡	2.35	2.35	0.1	2.7	照本元寶。初鋳造年1068年

表17 出土遺物観察表(木器・木製品)

番号	地点	材種	器種	長さ	幅	厚さ	木取り	形態の特徴と技法
54-1	溝22		箱部材	24.0	5.7	0.5	板材	掘じ穴あり。樹皮層も残存。
54-2	溝22		箱部材	17.0	3.0	0.5	板材	S3-1と同一個体。
54-3	溝29		箱部材	30.0	4.0	1.2	板材	両端に方形孔をもつ。割板か。
54-4	溝22-29		扇骨	31.2	1.8	0.35	板材	薄く加工し、穿孔をもつ。
54-5	溝22-29		不明	23.0	0.9	0.3	板材	表面平滑、端部刃状に加工。
54-6	溝22-29		匙	21.5	1.1	0.8		中央で折れている。
54-7	溝23		杓子	21.3	2.7	0.7	板材	腹に半分折痕。先端摩滅。
54-8	溝23		匙形	12.5	12.0	1.1	板材	柄部欠損。工具痕顯著。
54-9	溝22-29		梳	30.0	6.4		みかん割	先端削り面多く尖る。
54-10	溝22-29		梳	40.0	3.6		みかん割	先端角状に尖る。
54-11	溝22-29		梳	46.0	4.0		丸太	先端削り面少なく尖る。
54-12	溝22-29		梳	52.0	4.4		丸太	先端削り面少なく尖る。
54-13	溝22-29		梳	52.1	4.6		丸太	先端やや角状に尖る。
54-14	溝22-29		梳	66.0	6.4		みかん割	先端角状に尖る。
54-15	溝22-29		梳	26.0	4.2		丸太	先端削り面少なく尖る。
54-16	溝22-29		梳	30.2	4.4		丸太	先端やや角状に尖る。
54-17	溝22-29		梳	32.4	5.8		みかん割	先端削り面多く尖る。
54-18	溝22-29		梳	22.4	4.0		みかん割	先端削り面少なく尖る。
54-19	溝22-29		梳	22.2	6.2		みかん割	先端削り面やや多く尖る。
54-20	溝22-29		梳	30.0	10.0		丸太	先端削り面やや多く尖る。
54-21	溝22-29		梳	18.4	4.0		丸太	先端削り面少なく尖る。
54-22	溝22-29		梳	42.4	6.6		みかん割	板状の身で、先端を欠損。
54-23	溝22-29		梳	24.4	5.9		みかん割	先端を欠損。
54-24	溝22-29		梳	16.0	2.6		丸太	先端を欠損。
56-1	溝28		梳	54.4	5.0		丸太	先端削り面やや多く尖る。

表18 出土遺物観察表(石器・石製品)

番号	地点	石材	器種	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	形態の特徴と技法
14-4	溝1	花崗岩	石鐮	6.5	5.0	2.1	100	両端部抉入部加工。
28-1	20-21層	安山岩	スタレイバー	5.7	4.2	0.65	17.0	上下端刃渡れ。
28-2	21層	花崗岩	石鐮	4.8	6.8	1.4	56.6	半折し、両端部抉入加工。
28-3	21層	安山岩	石鐮	12.2	6.8	1.9	85.0	身を折損。
28-4	21層	花崗岩	叩き石	6.8	6.1	1.3	22.0	上下端打痕。
28-5	21層	安山岩(石剣)		8.0	3.2	3.2	160.2	被熱による割れ。
30-8	19層	安山岩	削片	6.1	2.4	1.5	20.0	上下端刃渡れ。
32-4	18層	安山岩	石鐮	4.5	5.1	1.1	43.3	身を半分折損。
37-1	12層	安山岩	打製衝機具	7.3	2.9	0.8	25.3	両短側縁に抉入加工。
37-2	12層	安山岩	スタレイバー	7.5	4.3	0.5	20.3	長側縁に刃渡れ。
37-3	12層	安山岩	石鐮	4.0	1.5	0.4	2.7	木の葉形。
37-4	12層	安山岩	石鐮	1.4	1.6	0.3	0.5	凹基形。先端折損。
37-5	12層	安山岩	石鐮	1.45	1.6	0.34	0.5	凹基形。先端折損。
37-6	12層	安山岩	石鐮	2.0	1.6	0.35	1.0	平根形。先端折損。
37-7	12層	花崗岩	石鐮	5.1	4.5	1.7	50.0	両端部抉入部加工。
68-14	溝22	安山岩	石鐮	2.8	1.6	0.35	1.6	凹基形。先端折損。
68-15	溝22	安山岩	石鐮	3.3	2.0	0.4	1.5	凹基形。身が中央でやや窪む。
68-16	溝22	安山岩	石鐮	3.35	0.8	0.8	1.8	先端を欠損。上端刃渡れ。
68-17	溝22	安山岩	楔形石鐮	3.5	1.3	0.9	4.7	半分折損。
68-18	溝23	安山岩	削片	4.7	2.1	1.0	8.3	側縁に割線。上端部刃渡れ。
68-19	溝22	安山岩	削片	3.5	1.3	0.3	2.2	下短側縁に割線と潰れ。

## 第4章 出土木製品の樹種同定分析および動物遺存体分析

### 1. 津島岡大遺跡第9次、第12次調査出土の木製品の樹種

森林総合研究所木材利用部

能 城 修 一

岡山大学津島地区で行われた第9次調査（工学部生体機能応用工学科棟）および第12次調査（付属図書館）で出土した木製品の樹種を報告する。第9次調査では平安時代後期（10～11世紀）の幅5mほどの溝から、直径2.5～11cmの丸木杭が44点出土した。第12次調査では弥生時代後期の溝から鎌の刃先や盾、曲柄、立木など22点が、また平安時代後半の溝から容器と思われる加工木など3点が出土した。ここではこれら69点の樹種を報告する。樹種同定の方法は津島岡大遺跡第3次調査におけるもの（能城、1992）に等しい。標本番号は第9次調査のものがOKUF-509から552、第12次調査のものはOKUF-553から577である。

#### 1. モミ属 *Abies* マツ科 図版1: 1a-1c (OKUF-524)

仮道管と放射柔組織からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多く明瞭。放射組織は放射柔細胞のみからなり、その垂直壁は結節状を呈する。分野壁孔は小型のスピ型で、1分野に2-4個。

#### 2. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図版1: 2a-2c (OKUF-551)

仮道管と放射柔組織、放射仮道管、および樹脂道を裏打ちするエピセリウム細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多い。早材の終わりから晩材には樹脂道が散在する。放射組織にも樹脂道をもつものが見られる。放射組織の上下端には放射仮道管がありその水平壁には顕著な鋸歯がみられ、分野壁孔は大型の窓状である。

#### 3. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 枝・幹材 図版1: 3a-3c (OKUF-566)、根材 図版2: 4a-4c (OKUF-563)

枝・幹材：小型で丸い管孔が単独あるいは放射方向に2—3個複合して均一に散在する散孔材。管孔の直径は年輪の終わりでやや減少する。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性で、道管との壁孔はやや大型で密な蜂巣状。

根材：大型でやや放射方向にのびた丸い管孔が単独あるいは2—3個複合して密に散在する散孔材。年輪の幅はせまく、管孔の直径は年輪界付近でやや減少する。管孔の占める面積は繊維の面積よりもやや多い。それ以外の形質は枝・幹材と同じ。

4. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図版2: 5 a—5 c (OKUF—520)

小型で丸い管孔が単独あるいは2—3個複合してやや密に散在し、それを分断するように幅の広い放射組織が横ぎる放射孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性にちかい異性で、1—3列のものと大型の集合状のものからなる。

5. スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatusima ブナ科 図版2: 6 a—6 c (OKUF—510)

年輪のはじめにはやや大型で丸い単独管孔が年輪のはじめ放射方向に数個ずつ並んで断続的に配列し、その後晩材ではごく小型で薄壁の管孔が放射状—火炎状に配列する環孔材。木部柔組織はいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

6. コジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb. ex Murray) Schottky ブナ科 図版3: 7 a—7 c (OKUF—525)

スダジイによく似た環孔材。放射組織には単列同性のものほか集合状で大型のものがあがり、横断面でみると集合状放射組織のあたりで年輪界が大きiguezれる。それ以外の形質はスダジイと同じである。

7. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版3: 8 a—8 c (OKUF—571)

大型で丸い単独管孔が年輪のはじめに1—3列ほどならび、晩材では小型で薄壁の管孔が火炎状に配列する環孔材。管孔の直径は早材から晩材へ急激に変化する。木部柔組織はいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものと大型の複合状のものからなる。

8. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版3: 9 a—9 c (OKUF—



572)

大型で丸い単独管孔が年輪のはじめに1-3列ほどならび、晩材ではやや小型で厚壁の単独管孔が放射方向に配列する環孔材。管孔の直径は早材から晩材へ急激に変化する。木部柔組織はいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものと大型の複合状のものとからなり、道管との壁孔は櫛状になる。

9. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版4:10a-10c (OKUF-521)

やや大型で厚壁の丸い単独管孔が放射状に配列する放射孔材。管孔の直径は不規則に変化する。木部柔組織はいびつな接線状あるいは幅のせまい帯状。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性のものと大型の複合状のものとからなり、道管との壁孔は櫛状になる。

10. エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版4:11a-11c (OKUF-511)

年輪のはじめにやや大型で丸い管孔が2-3列集合し、晩材ではごく小型で薄壁の管孔が数個から10数個ずつ集合して、全体として斜め方向に連なる環孔材。早材から晩材への移行は緩やか。道管の穿孔は単一、放射組織は異性で1-10細胞幅くらい、鞘細胞をもつ。

11. ヤマゲワ *Morus australis* Poir. タワ科 枝・幹材 図版4:12a-12c (OKUF-574)、根材 図版5:13a-13c (OKUF-562)

年輪のはじめにやや大型で丸い管孔が単独あるいは2-3複合して数列集合し、晩材では小型で丸い管孔が数個ずつ集まって散在する環孔材。早材から晩材への移行は緩やか。道管の穿孔は単一で小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で1-8細胞幅くらい、上下端の1-3細胞が直立細胞からなる。

12. ヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum* Sieb. ex Nakai クスノキ科 図版5:14a-14c (OKUF-522)

やや小型-中型で厚壁の丸い管孔が単独あるいは放射方向に2-3個複合してやや疎らに均一に散在する散孔材。木部柔組織は周囲状でしばしば油細胞をふくむ。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で上下端の1-3細胞が直立細胞からなり、1-3細胞幅。

13. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版5:15a-15c (OKUF-550)

ごく小型の単独管孔が年輪界にむけて径を減じながら均一に散在する散孔材。木部柔組織は

散在状。道管の穿孔は10—20本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は異性で2細胞幅、多列部は10細胞高以下で背が低く、直列部にはしばしば大型で丸い結晶細胞がみられる。

14. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版6:16a—16c (OKUF—513)

ごく小型で薄壁の単独管孔が均一に散在する散孔材。木部柔組織は散在状。道管の穿孔は30—40本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は単列異性で、道管との壁孔は小型の対列状。

15. モモ *Prunus persica* Batschバラ科 図版6:17a—17c (OKUF—519)

やや小型で丸い管孔が年輪界にそって数列ならび、晩材では径を減じたごく小型の丸い管孔が単独あるいは放射方向に2—数個複合して、放射方向につらなる傾向をみせながら散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で1—4細胞幅。

16. リンボク *Prunus spinulosa* Sieb. et Zucc. バラ科 図版6:18a—18c (OKUF—556)

小型で丸い管孔が単独あるいは数個放射方向に複合し、ときに斜め方向に断続的につらなる傾向をみせる散孔材。管孔の直径は年輪の終わりでやや減少する。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性に近い異性で、1—4細胞幅。

17. センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. センダン科 図版7:19a—19c (OKUF—512)

年輪のはじめには大型で丸い管孔が数列集合し、晩材では小型で薄壁の管孔が放射方向や接線方向に不規則にのびる塊をなして散在する環孔材。早材から晩材への移行は緩やかで、早材の大管孔の間には小型で薄壁の管孔が塊をなして散在する。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で1—4細胞幅くらい。

合計69点の試料中には17分類群が認められた。そのうちヤナギ属とヤマダグワには枝・幹材のほか根材が認められた。それ以外の分類群の木材はすべて枝・幹材であると判断した。

第9次調査の平安時代後期の杭ではスダジイおよびコジイといったシイ属が40点中24点と60%を占め、その他ではサカキが4点と多いものの、あとはすべて1、2点でその中には10分類群が認められた(表1)。津島地区の第3次調査および第6次調査でも平安時代の杭が115点出土したが、そこではまったくシイ属の樹種が出ておらず、代わりにアカマツをふくむマツ属、縦管束亜属がほぼ半数を占め、コナラ属アカガシ亜属やクスノギ節がそれに次いでいた(能城、

1992)。また今回認められたクマシデ属イヌシデ節やヤブニッケイ、モモ、センダンなどは第3次および第6次調査では出ておらず、代わりにツガ属やヒノキ、クリ、ブナ属、エズリハ属、モチノキ属、カキノキ属などが認められた。このように第9次調査の杭の樹種構成は第3次および第6次のものとは対照的であり、杭材にはそれほど意識的な樹種選択を行っているとは思えないことを考えると、この結果は周辺の植生の場所による違いか時代的な周辺植生の変遷を示唆するのかもしれない。第12次調査のほうは製品それぞれの出土点数が少なく明瞭な傾向を読みとることは難しいが、又鋸や桁目板にコナラ属アカガン亜属が用いられていることは西日本の典型的な樹種選択を表している。

## 引用文献

能成修一、1992、岡山大学津島地区から出土した木材化石の樹種、山本悦世編「津島岡大道跡3—3次調査」、169—187、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター。

表19 岡山大学津島地区9次、12次調査出土木材の樹種

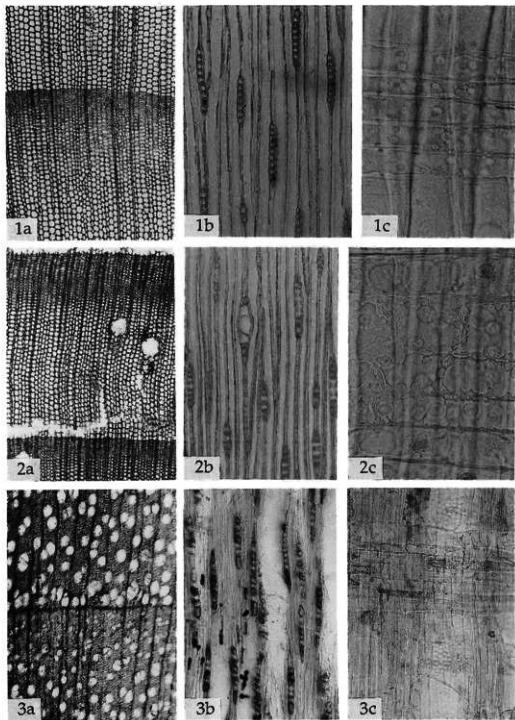
樹種名	生体(9次)		図書館(12次)									
	平安後期		弥生後期				平安後半					
	杭	自然木	又鋸	曲柄	盾	桁目板	建築部材	杭	自然木	桁目板	寄廊?	
モミ属	2				1							
アカマツ	1	1										
ヤナギ属 枝・幹材								1				
ヤナギ属 根材									1			
クマシデ属イヌシデ節	1											
スダジイ	14											
コジイ	10											
コナラ属コナラ節	1	1									3	
コナラ属クスギ節	1							1	2			
コナラ属アカガン亜属	2	1	2			4		3		2	1	
エノキ属	1							1				
ヤマグワ 枝・幹材										1		
ヤマグワ 根材										1		
ヤブニッケイ	1											
ツバキ属		1										
サカキ	4											
モモ	1											
リンボク				1								
センダン	1											
総計	40	4	2	1	1	4	1	5	8	2	1	

表20 岡山大学津島9次調査出土木製品樹種一覧表(1)

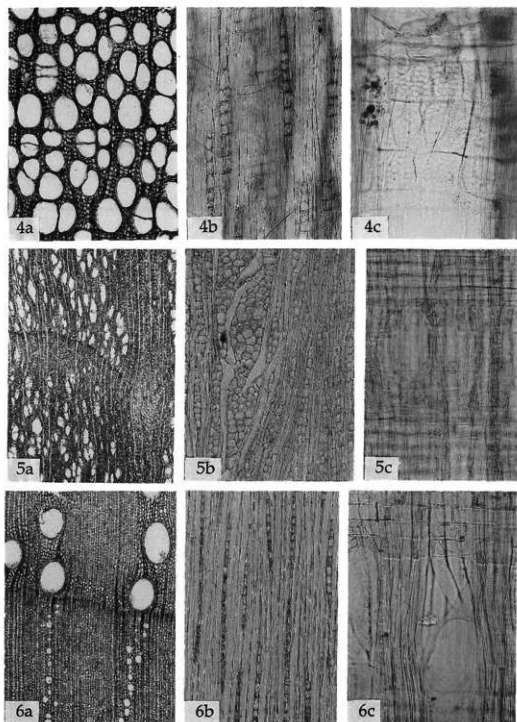
OKUF-	No.	樹種名	製品名	木取り	遺構	出土地点	時代
OKUF-	509	コナラ属クヌギ節	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	510	スダジイ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	511	ヒノキ属	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	512	センダン	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	513	サカキ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	514	サカキ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	515	スダジイ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	516	サカキ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	517	サカキ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	518	スダジイ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	519	モモ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	520	クマシラダマ属イヌシラダマ節	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	521	コナラ属アカガシ亜属	枕	ミカン割	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	522	ヤブニツケイ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	523	アカマツ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	524	モミ属	枕	丸木	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	525	コジイ	枕	ミカン割又は板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	526	コジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	527	コジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	528	スダジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	529	スダジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	530	スダジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	531	コジイ	枕	丸木	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	532	スダジイ	枕	ミカン割又は丸木	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	533	コジイ	枕	丸木	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	534	スダジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	533	コジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	536	スダジイ	枕	丸木	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	537	スダジイ	枕	ミカン割	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	538	コジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	539	スダジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	540	コナラ属アカガシ亜属	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	541	スダジイ	枕	板目	不明		平安後期(10-11c)
OKUF-	542	スダジイ	枕	ミカン割又は板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	543	モミ属	枕	丸木	不明		平安後期(10-11c)
OKUF-	544	スダジイ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	545	コナラ属コナラ節	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	546	コジイ	枕	丸木	溝22	東群	平安後期(10-11c)
OKUF-	547	コジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	548	コジイ	枕	板目	溝22	西群	平安後期(10-11c)
OKUF-	549	コナラ属アカガシ亜属	自然木	ミカン割?	溝22		平安後期(10-11c)
OKUF-	550	ツバキ属	自然木	丸木	溝22		平安後期(10-11c)
OKUF-	551	アカマツ	自然木	丸木	溝22		平安後期(10-11c)
OKUF-	552	コナラ属コナラ節	自然木	丸木	溝22		平安後期(10-11c)

表21 岡山大学津島12次調査出土木製品樹種一覧表(2)

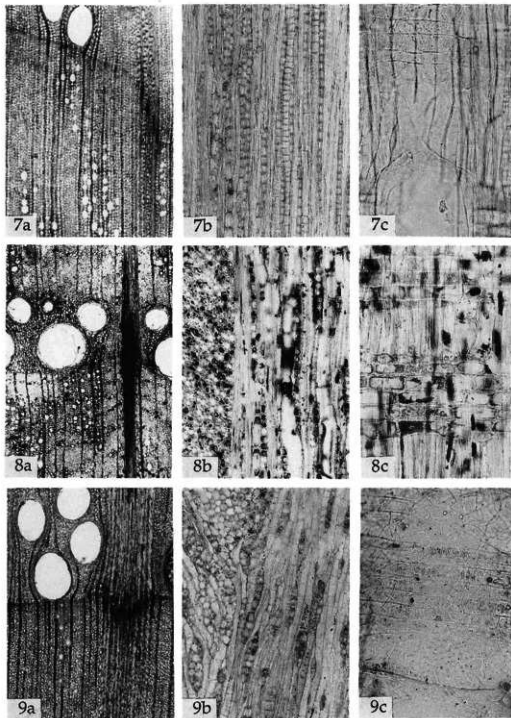
OKUF-	No	樹種名	製品名	木取り	地区	遺構	W No	時代
OKUF-	553	コナラ属アカガシ亜属	板目板	板目	岡書館	SD30	24	弥生後期
OKUF-	554	コナラ属アカガシ亜属	又鋸 刃先	板目	岡書館	SD30	25	弥生後期
OKUF-	555	コナラ属アカガシ亜属	板目板	板目	岡書館	SD30	26	弥生後期
OKUF-	556	リンボク	鹿柄 着柄部	芯なし削出し	岡書館	SD30	27	弥生後期
OKUF-	557	コナラ属アカガシ亜属	板目板	板目	岡書館	SD30	29	弥生後期
OKUF-	558	コナラ属アカガシ亜属	板目板	板目	岡書館	SD30	30	弥生後期
OKUF-	559	コナラ属アカガシ亜属	又鋸 刃先	板目	岡書館	SD30	35	弥生後期
OKUF-	560	モミ属	盾	板目	岡書館	SD30	36	弥生後期
OKUF-	561	エノキ属	地箸部材		岡書館	SD30	38	弥生後期
OKUF-	562	ヤマグワ 板材	自然木		岡書館	SD30	42-1	弥生後期
OKUF-	563	ヤマギ属 板材	自然木		岡書館	SD30	42-2	弥生後期
OKUF-	564	コナラ属アカガシ亜属	枕		岡書館	SD30	42-3	弥生後期
OKUF-	565	コナラ属アカガシ亜属	枕		岡書館	SD30	42-4	弥生後期
OKUF-	566	ヤマギ属	枕		岡書館	SD30	42-9	弥生後期
OKUF-	567	コナラ属クヌギ属	枕		岡書館	SD30	42-11	弥生後期
OKUF-	568	コナラ属アカガシ亜属	枕		岡書館	SD30	42-13	弥生後期
OKUF-	569	コナラ属コナラ属	自然木		岡書館	SD30	49	弥生後期
OKUF-	570	コナラ属コナラ属	自然木	流木18	岡書館	SD30	94-2	弥生後期
OKUF-	571	コナラ属コナラ属	自然木	流木10	岡書館	SD30	94-3	弥生後期
OKUF-	572	コナラ属クヌギ属	自然木	流木14	岡書館	SD30	94-5	弥生後期
OKUF-	573	コナラ属クヌギ属	自然木	流木9	岡書館	SD30	94-7	弥生後期
OKUF-	574	ヤマグワ	自然木	流木8	岡書館	SD30	94-10	弥生後期
OKUF-	575	コナラ属アカガシ亜属	板目板	板目	岡書館	SD6	65	平安後半
OKUF-	576	コナラ属アカガシ亜属	板目板	板目	岡書館	SD6	72-1	平安後半
OKUF-	577	コナラ属アカガシ亜属	容器?	板目	岡書館	SD6	72-6	平安後半



図版1 9・12次調査出土木材の顕微鏡写真(1) 1a-1c:モミ属(OKUF-524),  
2a-2c:アカマツ(OKUF-551), 3a-3c:ヤナギ属 枝・幹材(OKUF-566). a:横  
断面×40, b:接戦断面×100, c:放射断面×200(3c), ×400(1c, 2c).

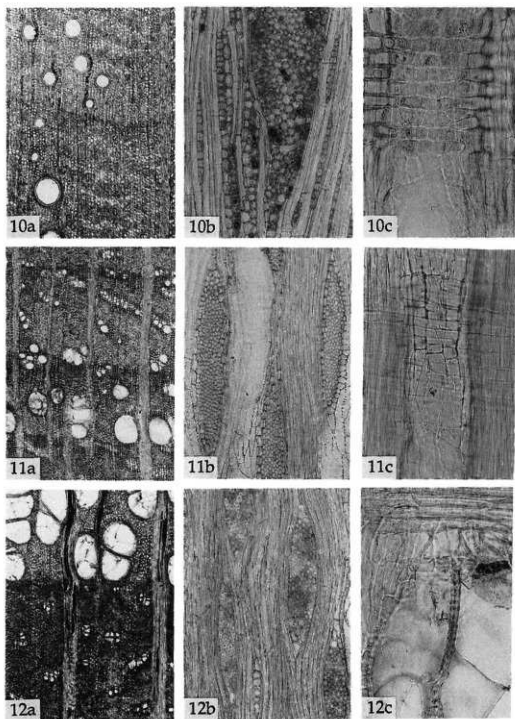


図版2 9・12次調査出土木材の顕微鏡写真(2) 4a-4c: ナナギ属 根材 (OKUF-563), 5a-5c: クマシデ属イヌシデ節 (OKUF-520), 6a-6c: スダジイ (OKUF-510), a: 横断面  $\times 40$ , b: 接戦断面  $\times 100$ , c: 放射断面  $\times 200$

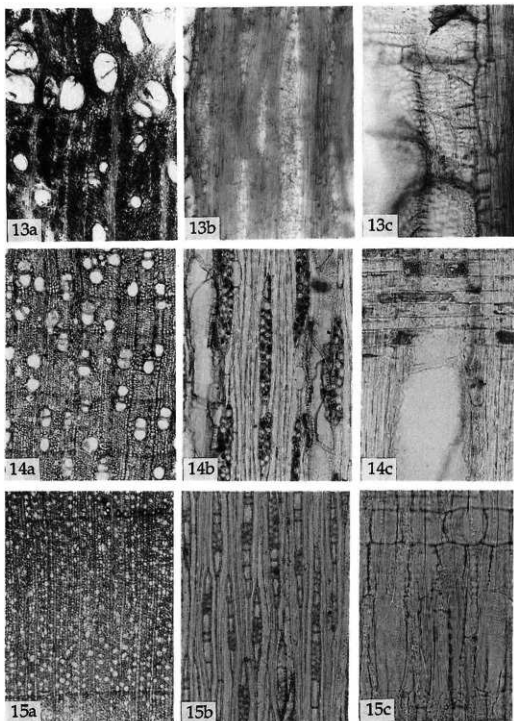


図版3 9・12次調査出土木材の顕微鏡写真(3) 7a-7c: コジイ (OKUF-525),  
8a-8c: コナラ属コナラ節 (OKUF-571), 9a-9c: コナラ属クスギ節 (OKUF-572),  
a: 横断面  $\times 40$ , b: 接戦断面  $\times 100$ , c: 放射断面  $\times 200$

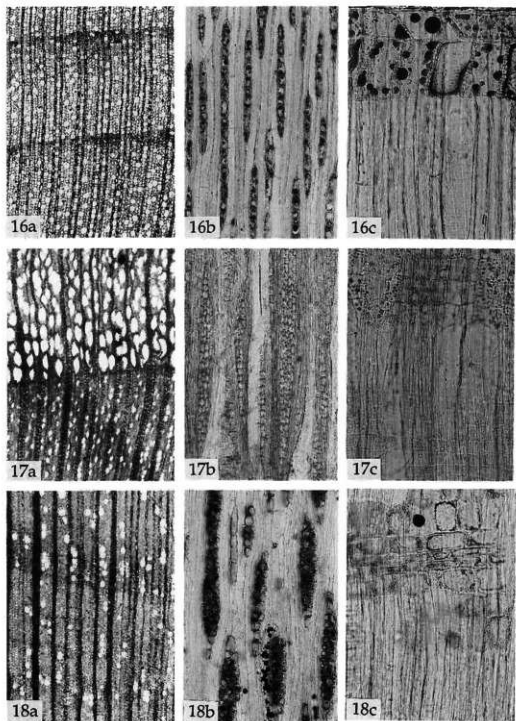




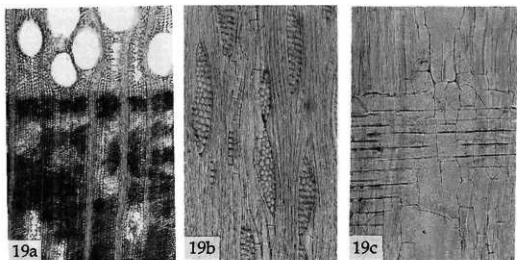
図版4 9・12次調査出土木材の顕微鏡写真(4) 10a-10c: コナラ属アカガシ至属 (OKUF-521), 11a-11c: エノキ属 (OKUF-511), 12a-12c: ヤマブツ 枝・幹材 (OKUF-574). a: 横断面  $\times 40$ , b: 接戦断面  $\times 100$ , c: 放射断面  $\times 200$ .



図版5 9・12次調査出土木材の顕微鏡写真(5) 13a-13c: ヤマグチ 根材 (OKUF-562), 14a-14c: ヤブニッケイ (OKUF-522), 15a-15c: ツバキ属 (OKUF-550).  
a: 横断面  $\times 40$ , b: 接線断面  $\times 100$ , c: 放射断面  $\times 200$ .



図版 6 9・12次調査出土木材の顕微鏡写真(6) 16a-16c: サカキ (OKUF-513),  
 17a-17c: モモ (OKUF-519), 18a-18c: リンボク (OKUF-556). a: 横断面  $\times 40$ ,  
 b: 接線断面  $\times 100$ , c: 放射断面  $\times 200$ .



図版7 9・12次調査出土木材の顕微鏡写真(7) 19a-19c:センダン(OKUF-512). a:横断面  $\times 40$ , b:接戦断面  $\times 100$ , c:放射断面  $\times 200$ .

## 2. 津島岡大遺跡第9次調査出土動物遺存体

奈良国立文化財研究所

松井 章

出土した動物遺存体は、すべて10世紀から11世紀にかけての古代の大溝から出土したものである。この大溝は、幅、約10メートル、深さ1メートル以上の大規模なもので、所々に杭を打ち込んで堰を設けて副水路や取水口に導水していた。動物遺存体は、そうした堰や取水口などの溜まりから出土したものが多く、いずれも水酸化鉄が凝着し、風化による磨耗が著しい。出土した動物遺存体は、すべて哺乳類のものであり、種名が判明したうちでは、ウシ (*Bos taurus domesticus*) の臼歯、肩甲骨、上腕骨が10点と圧倒的に多く、ニホンジカ (*Cervus nippon*) の大腿骨が1点あるのみであった。以下に取り上げられた動物遺存体の概要を記す。

- 1: ウシの右上顎第1大臼歯の破片である。かなり老齢で、頬側のエナメル高は、23ミリを測る。
- 2: ウシの臼歯の頬側の破片。残存状態でエナメル高が38ミリあり、下顎臼歯と思われる。
- 3: ウシの下顎臼歯の破片。永久歯がまだ放出していない段階で、エナメル質の磨減が見られない。
- 4: 不明四肢骨。ウシまたはウマに相当する骨の大きさ、厚さである。明瞭な刃物による解体痕が残る。人為的に断ち切られた可能性が高い。
- 5: ウシの右、肩甲骨の遠位端。かなり破損するが、人為的かどうかは不明である。
- 6: ウシの左、中足骨の近位と遠位。同一個体のもと考えて矛盾はない。表面の風化が著しく、計測は不可能である。
- 8: ウシの左、上腕骨の体部である。遠位部は鋭い刃物で一撃の下に斜めに截断されている。
- 9: 不明骨片。
- 10: ウシの左、上顎第3大臼歯。老齢である。エナメル高が頬側で18ミリ、舌側でも18ミリを測る。
- 11: 不明四肢骨: ウシ、ウマに相当する大きさ、厚みである。
- 12: ニホンジカの右の大腿骨。ほぼ完形であるが、骨頭部を欠損する。成獣で骨端部の骨化は終了している。遠位端最大幅 (Bd) は、48ミリをはかり、大きさからメスのものと思われる。明瞭な解体痕は無い。

13: ウシの左、胫骨の遠位部である。遠位端最大幅は63.1ミリを測る。骨化は終了しており成獣である。明瞭な解体痕は見られない。

14: ウシの右側、上顎大臼歯の破片。頰側のエナメル高は、15ミリを測り、老齢である。

15: ウシの下顎臼歯の破片。左右不明である。

第9次調査で検出した古代の大溝から15点の動物遺存体が出土した。すべて、地下水に含まれる水酸化鉄が凝着しており、風化、水浸状態からくる磨耗を受けている。しかし、出土した骨以外に溝中に捨てられたが埋没の過程で腐朽し、残存しなかったものが存在する可能性も考えられるが、出土した骨のなかに、極端に保存度の悪いものは見られないことから、元来、溝中に骨が投棄されれば保存されていたと思われる。特に、No12のニホンジカの大腿骨は、表面が剝離している他は残りがよく、他の骨も、この溝中にあれば同様に保存される環境にあったことは間違いない。出土量の少なさは、元来この場所に投棄された骨の少なさを示しているだろう。したがって、これらの骨は、この場所で投棄されたか、あるいは、上流で一括して捨てられたものが軟部組織が腐って流されて、この堰の手前の深みやその付近に堆積した可能性が高い。これまで筆者が扱ってきた畿内から瀬戸内沿岸の奈良、平安時代の出土資料では、ウシに比べるとウマが圧倒的に多かったが、今回の資料ではウマが無く、ウシが大部分を占めた。近世の日本列島では、西日本ではウシが、東日本ではウマが多く農作業に使われてきたと言われてきたが、今回の出土資料はそれを裏付けるものであろうか。これまでの鹿田遺跡の発掘では、第3、4次調査において平安時代の溝（河道一）から、ウマ、イヌ、ニホンジカなどの動物遺存体が出土し、第5次調査では鎌倉時代の井戸の廃棄に伴うウシの頭蓋骨を埋納した遺構を報告した<sup>(1)</sup>。第3、4次調査で出土したニホンジカの鹿角には、明確な切断痕があったが、今回の大腿骨には、人為的な加工痕が見られなかった。今回の報告例でも、鹿田遺跡における平安時代から鎌倉時代にかけての人々の動物利用に関する問題に大きな手がかりを与えた。

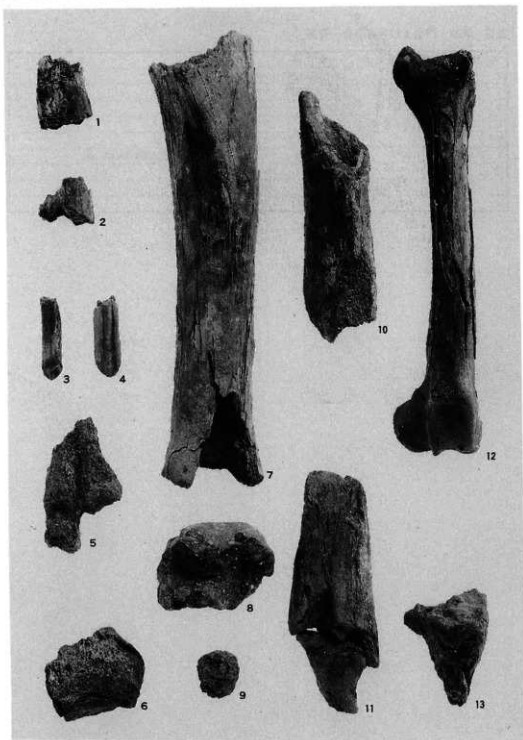
## 註

1 松井章1990「鹿田遺跡（Ⅱ、Ⅲ次調査地点）出土の動物遺存体一」『岡山大学構内遺跡調査研究報告』第4冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp. 107-110。

松井章1993「鹿田遺跡第5次調査（医学部付属病院棟新築に伴う発掘調査）出土のウシ」『鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp. 115-118。

表22 溝22～29出土動物遺存体一覧表

調査番号	遺構	層位	地区	備考
1	溝23	底	1・2区結間	ウシ：右 上 第1後臼歯
2	溝22	下層～底	3・4区結間	ウシ：上臼歯
3	溝22	下層～底	2区	ウシ：臼歯破片 上下不明
4	溝22	最下層～底	2区	ウシ：臼歯
5・9・13	溝23		分溝1・2区	ウシ：中手骨 or 中足骨 左
7・8	溝23	底	2区北斜面	ウシ：頸骨 左 遺位、遺位傾斜大標63.1mm
10	溝23		1・2区	ウシ：上腕骨 左 体部
11	溝22	たまり状遺構		不明：四肢骨
12	溝23	1区		シカ：大腸骨 右 完形



図版8 動物遺存体 1-ウシ臼歯 (溝23) 2-4-ウシ臼歯 (溝22) 5・9・13-ウシ中足骨 (溝23) 6-ウシ肩甲骨 (溝23) 7・8-ウシ脛骨 (溝23・25) 10-ウシ上腕骨 (溝23) 11-ウシ・ウマ不明四肢骨 (溝22) 12-ニホンシカ (溝23)



## 第5章 考 察

### 1. 弥生時代早・前期の津島岡大遺跡とその周辺

#### はじめに

今回、9次調査(図70・7)では弥生時代前期の溝を5条、そして14層において水田畦畔を検出した。隣接する6次調査との対応関係において、東西に展開する溝は敷高地の縁辺部にはほぼ平行して構築されていることが明らかになった。また、弥生前期段階において幾度かの溝の付け替えが行われていることが判明しており、6次調査における前期前半の土器の存在から弥生初期以降の溝内北端部における開発の連続性が推定できる。津島岡大遺跡の弥生時代初頭の水田開発の時期はいつからはじまり、どのような変遷をたどるのか。今回の調査でも早期の資料も含め、前期段階の水田等や遺物は各期のものがみられ、この状況は溝内各所でも同じ様相である。以下では、これまでの溝内調査の成果を踏まえて、津島岡大遺跡全体で早期・前期の様相を検討し、周辺遺跡との関係についても検討を加えて、いくつかの問題について考えることにする。そして、こうした様相が岡山南部平野という少し広い枠組みでみた場合ではどのように展開しているのか、比較検討することにした。

なお、以下の検討にあたり、時期区分は早期(津島岡大式古・中・新段階)と、前期の1期から4期までの細分案<sup>(1)</sup>で行う。

#### 1 津島岡大遺跡における弥生時代早・前期の様相

津島岡大遺跡の弥生時代早・前期の状況について、調査されたものに限って概観する。

2次調査(図70・1) 農学部構内の4地点(A・B・C・BH13)において調査が行われ、溝(A・C・BH13)、畦状遺構(C・BH13)、土坑(A)、足跡状遺構(C・BH13)を検出した(岡大埋文調査室1986)。遺構の時期は、特定が難しい。遺構の覆土や包含層から比較的多量に出土した早期の遺物が出土している。土器の内容は、A地点は津島岡大式古～新段階の土器が多く、前期4期段階の甕片が出土しているが詳細については不明である。B地点は、早期・前期土器片があり、小片のみで不明である。C地点及びBH13では、早期の土器は津島岡大式の古・中段階が少量と、新段階がやや多い。前期は、1期に廻り得る壺(図2-14・15)の他、2期の土器が少量、3期と4期の土器がやや多い。

3・15次調査(図70-2) 3・15次調査は同一地点において調査が2回行われている

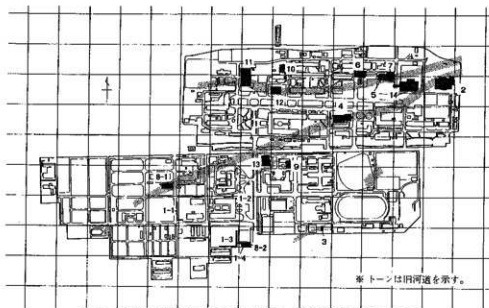


図70 津島岡大遺跡における弥生時代早・前期の遺跡 (縮尺1/12,000)

(岡大埋文センター1992・1997 a)。北西隅を流れる河道では早期の貯蔵穴が、微高地から水田畦畔が検出された。土器の内容は、早期は津島岡大式古段階～中段階が中心で、新段階が少量含まれている。前期は、2期から3期にかけてのみられ、量的に少ない。

4次調査(図70-3) 前期の3条の溝が検出されている(岡大埋文調査室1986)。土器は3期と4期に相当するものが出土している。

5次調査(図70-4) 早期の貯蔵穴、前期の水田畦畔が検出されている(岡大埋文センター1994)。前期の土器は、3期の土器が中心であるが、段を持つ壺等が含まれており、一部2期に遡る可能性もある。

6次調査(図70-5) 溝2条が検出されている(岡大埋文センター1995 c)。包含層と河道からは、早期の津島岡大式古段階～新段階までの土器がみられ、中～新段階の土器群がやや多い。前期は、1期に相当する壺(図2-17・18)がみられ、3期と4期が主体的である。

7次調査(図70-6) 早期のピット群、前期の100基近い多数のピットと土坑が敷基、そして水田畦畔が検出されている(岡大埋文センター1996 a)。遺構については、前期前半まで遡る可能性のものがある。土器は、早期については津島岡大式古段階から新段階の破片が極少量含まれており、前期については3期に相当するものが主体である。

8次調査(図70-8) A・Bの2地点の調査が行われ、弥生前期の溝等の遺構が検出されている(岡大埋文センター1996 a)。土器は、A地点では4期がみられ、B地点では3期の土器群が集中して出土しており、4期の土器が少量含まれる。壺口縁部の破片で、段を持つ可能性のある土器がみられるので、2期の存在も考慮する必要がある。

10次調査(図70-9) 前期の土坑等が検出されている(岡大埋文センター1995a)。遺構は調査区の西側に広がる可能性が高く、前期でも末にはこの地点周辺の微高地に集落が存在している可能性がある。土器は未報告のため詳細は不明だが、4期のものが主体であろう。

11次調査(図70-10) 水田畦畔と池状の窪地を検出している(岡大埋文センター1996)。土器は少数であるが、前期の3期に相当する土器が出土している。

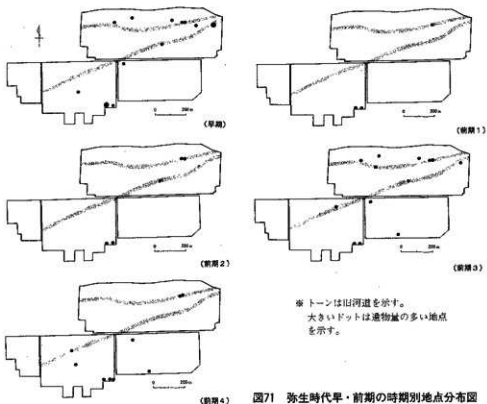
12次調査(図70-11) 早期から前期の水田畦畔が検出されている(岡大埋文センター1994a)。土器については、早期・前期の土器が出土しているが、未報告のため不明である。

13次調査(図70-12) 前期の水田畦畔と2条の溝を検出している(岡大埋文センター1997a)。3期の土器が出土している。

14次調査(図70-13) 早期の土坑、前期の土坑・溝・水田畦畔を検出した(岡大埋文センター1997b)。早期の土器は津島岡大式の古～新段階、前期の土器は3期を中心とする。

17次調査(図70-14) 前期の水田畦畔等を検出している(岡大埋文センター1997a)。土器については、整理途中のため不明である。

以上の早前期における様相を整理して、構内全体での各期の様相を検討する。図71は構内全



体における各時期の地点の分布をプロットしたものである。プロットした地点は、遺構等が検出されていなくても、遺物の存在が認められれば1地点として考えている<sup>(12)</sup>。

早期の地点は構内の各所においてみられ、遺物の出土量の多さからみて3・15次調査地点と2次調査のC地点とBH13地点の2カ所の周辺に主な拠点を想定できる。

前期は、まず1期に早期の拠点周辺に3カ所分布するのみで、地点の密度は希薄である。2期は地点数が5つに増えるものの、前段階と同様に拠点周辺における出土にはほぼ限られる。3期になると前段階までの状況からは一変し、地点の密度は一気に増大する。4期になると、遺跡数は前段階に比較すると減少傾向にある。地点の分布は、南側山河道の津島南区に集中する傾向が看守できる。10次調査地点(図70-9)において、微高地上に該期の集落の存在の可能性が指摘されており、地点の分布における津島南区での偏在性を示している。以上の分布の変遷からは、早期における遺跡密度の高さ、前期における1期から2期の減少傾向、そして3期での急増傾向、さらに4期での分布の偏在性がそれぞれみられた。

## 2 津島遺跡出土土器と津島岡大遺跡出土土器の関係

先の検討では、早期における地点の高密度の段階の次に前期の1期段階の遺跡数の減少と、

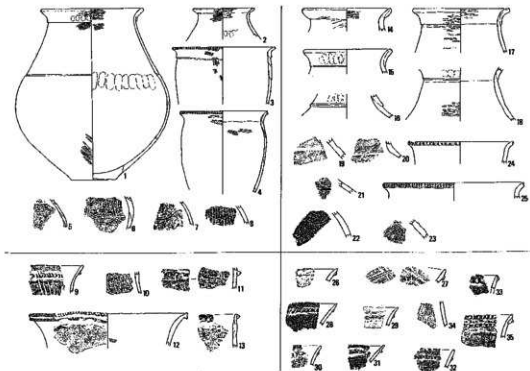


図72 津島岡大遺跡・津島遺跡南池地点出土土器 (1は縮尺1/18, 2-4は1/9, 他は1/6)

[1-13-津島南池, 17-18-26-津島岡大6次, 22-津島岡大9次, 35-津島岡大3次]

早期の拠点周辺での分布が窺われた。ところで、図71の分布図では、あえて早期の図と前期の1期の図を分けて表示したが、津島岡大式のなかに前期の1期の土器と併行する可能性があるため、ここで両遺跡の関係について検討しておくことにしたい。

前期の1期を代表する津島遺跡南池地点（以下「津島南池」と略称）の土器（図72-1～13：藤田1982）は、壺にあっては口縁部に粘土帯接合部を利用した段をもち、甕では頸部下に段をもつのが主たる特徴である。そして、9から13のように突帯文系土器を含んでいるのが特徴である。こうした土器群に類似するものが、津島岡大遺跡でも出土している（図72-14～35）。14から18は口縁部下に段をもつ壺であり、外面は丁寧に磨かれ、指頭圧痕がこのころ。頸部に段をもつ土器（19・20）もある。津島Ⅱ式から前期2期の22の木ノ葉文土器もある。

問題は、26から35の突帯文系土器である。深鉢の口縁部はいずれも外反度が強く、31のように突帯の位置も口縁部からかなり下がった位置に付く。刻みはいずれも小ぶりである。特に注目できるのは、胎土や色調、焼き具合、薄さが、それまでの津島岡大式とは全く異なりむしろ遠賀川系土器に類似していることである。新しくなると突帯が下がるという型式学的特徴と傾向については、沢田遺跡高縄手B調査区出土の沢田式土器の検討で平井勝も指摘しており（平井1993）、かつて藤尾慎一郎も同様な指摘をした（藤尾1991）。つまり、図71に示した土器群は、沢田式のなかでも新しい様相を示し、また津島岡大式のなかでも最も新しい様相を示す土器群ということになる。ここでは、これらの土器群を冒頭で述べた津島岡大式新段階として考える。津島南池に含まれている突帯文系土器群の内容は、以上の土器群と大差がないので同一時期と認定できるであろう。

以上のように、津島岡大遺跡と津島南池両者の間に時期的に重なる部分を想定した場合、興味深い状況が指摘できる。それは、両遺跡がわずか1km程の距離にあって棲み分けをしていることである。<sup>(2)</sup>ほぼ両者の領域は重なるのは明らかであり、領域内の棲み分けが行われていた。土器の状況からみれば、津島岡大遺跡側では壺のみが出土し、1期に相当する甕が全く見あたらない。また、津島南池側では少量の突帯文系土器が出土しているので、両遺跡間では相互に交渉がもたれていた。また、胎土や焼き具合などで影響を受けていても折東土器はないので、両者の併存期間は非常に短く、すぐに融合したことを示している。

### 3 岡山南部平野の弥生時代早期・前期における遺跡動態

ここまで検討してきた諸点を踏まえ、最後に岡山南部平野における弥生時代早期・前期の遺跡の動態について検討する。

図73は平野部の遺跡分布図である。トーン部は丘陵部を示し、空白部分は低地等の平野部を示す。■は早期の遺跡を、●は前期の1期の遺跡を、○は2期を、▲は3・4期を、それぞれ

示す。早期の主要な拠点となる遺跡は、東から沢田遺跡(5)、津島岡大遺跡(2)、南溝手・窪木遺跡(16)がある。前期になり、早期の拠点あるいはその周辺に前期の遺跡が出現する。

この段階は、津島南池と津島岡大遺跡の関係のように、互いに距離をおきつつ相互に一時的に併存する段階である。この段階は早期から継続する拠点集落と合わせて、各遺跡間の間隔がほぼ5~7kmになり、図4の範囲では拠点間の中間点で仕切り線(a~c)を引けば、A~Dの4つの地域に分割が可能となる。各仕切り線は便宜的なものであるが、偶然にもc線は百間川とはほぼ一致し、b線も笹が瀬川とはほぼ一致する。さらに、a線は足守川の南側の山手村等の丘陵と備中高松城付近の丘陵のせり出しにより平野が区切られている。拠点集落同士の間中に自然地形や河川が境となって領域を分割しているのである。こうして区別しうる各地域は、小丘陵で囲まれた極めて狭小な平野を領域とするようになる。こうした状況は、吉備津付近で早期の遺跡がまだみあたらず不明な点があるが、すでに早期段階に小丘陵で囲まれた狭小な平野を領域としていた可能性が高い。試みに農耕民の日常生活圏と考えられている半径3kmの円(Vita-Finzi and Higgs 1970)を各拠点を中心にして引くと、ほぼ各領域内におさまる。

こうした早期と前期の領域の空間的な類似性は、早期段階から、すでに水稲農耕を開始していた突帯文土器の集団の領域の中に、新たに移住してきた遠賀川系土器の集団が入植してきて、ほぼ早期農耕民の領域を同じ範囲でカバーしていることを示している。

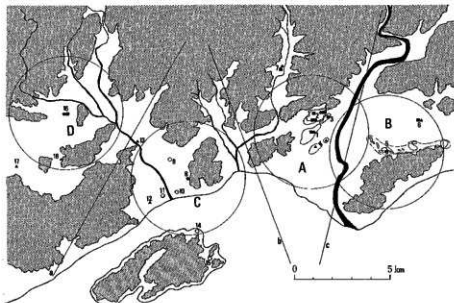


図73 岡山南部平野における弥生時代早・前期の主要遺跡と領域

[津島(1)・津島岡大(2)・津島江道(3)・南方(4)・百間川(5)・紙野(6)・田益(7)・東山(8)・高田(9)・川入(10)・岩倉(11)・上東(12)・津守(13)・関戸(14)・高尾(15)・南溝手(16)・窪木(16)・岡塚(17)・山津田(18)]

前期の3・4期になると岡山南部平野において遺跡が増加し、各領域の中心となる拠点から周辺に向かって遺跡が拡散するように見える。丘陵の入り組んだ狭小な領域にあっては、積み分けを続けながらの耕地開発での共倒れを避けるように、それほどの犁式の空白もなく、突帯文土器の集団と遠賀川系土器の集団は融合したのであろう。津島遺跡を中心とするA地域では、それまで未開拓な南側方面に遺跡が展開するようになるなど、各地域で遺跡の動態が活発化する。津島岡大遺跡でも、3期に遺跡の増大が激しく、4期になるとやや減少し、津島南地区の敷高地付近に遺跡が偏在する。この場合は、4期に新たに集落がこの地区で場所をかえて形成された結果生じた現象として理解すれば、この段階の各地域で見られる現象と同じ動向である。

ところで、沢田遺跡では前期の3期に環濠集落が形成される(岡山県教委1985)。3期は遺跡の増加と領域内の耕地の拡大の時期であるという観点からみれば、狭小な領域にもかかわらず、急激に増加した人口を支えるために耕地の拡大化がはかられ、領域外への動きが表面化し、それに応じてトラブルが増加したためにその成立をみたしと解釈ができるのではなからうか。

#### おわりに

津島岡大遺跡では、初期の段階に突帯文土器の終末段階の集団と遠賀川系土器の集団とが重なり、他の地域に先駆けて融合した可能性が高い。突帯文土器の胎土や焼き具合の変化は、それまでの伝統からの脱却を意味しており、急速な同化を促すように開放的な関係性のなか、相互の交流は密であった。さらに他の遺跡の状況からすると、前期水田開発前段階に、水田や水路の開発など、すでにある程度の状況が用意されていた可能性が高く、前期社会形成への突帯文土器集団の役割は大きかったはずである。ここに文化変容に基づく、縄文系社会側も主体的に参画した内的変化の重要性を見いだすことができる。

前期の3期段階における遺跡数の増加は、構内をふくめた津島地区のような狭小な領域での可耕地確保の極めて困難な状況を引き起こし、必然的に領域外への動きの活発化をまねいた可能性が高い。こうした動向のなかで、白間川の東岸の沢田遺跡に環濠集落が出現した。縄文系文化との融合を果たした集団間に、自己の領域外と緊張関係が生じるような社会的変化がはじまったことを示すのであろう。このように岡山南部平野の初期弥生社会は、急速な発展と、狭小な領域ゆえの限界性という相矛盾する特徴により、前期的低生産社会を形成したのである。

以上が、構内の調査成果の一部から導いた、弥生時代早・前期の様相である。紙幅の都合上捨象した点が多々あるが、考え方の枠組みは示せたと思う。詳細な議論は、今後に譲りたい。構内の調査が進みさらに詳細な状況が判明することにより、今回の検討も検証されていくであろう。最後に、本稿をなすに際し、野崎貴博、山本悦世、猪原千恵の各氏にご教示、ご協力いただいた。感謝申し上げます。

(小林青樹)

## 註

- 1 早期については、まず北部九州の山ノ寺式併行の前趾式(山陽町教委1995)を置き、そして次にくる津島岡大遺跡3次調査を指標とする「津島岡大式」(平井1992)を古・中・新の3段階に細分し、それぞれを近畿地方の口酒井遺跡出土土器・船橋式・長原式、北部九州の夜白1式・夜白2式と板付1式・板付2式に併行して考える。津島岡大式新段階の土器については、2項において触れている。前期については、これまでいくつかの編年案があるが(高橋1980・平井1992他)、概ね4期に細分することで落ち着いている。本稿でもこれら編年案と同様に4期に細分して考えることにする。具体的には、1期を津島遺跡南池地点の土器群(藤田1982)を指標とし、2期は高尾貝塚第2層出土土器群(鎌木・高橋1961)、3期は同じく高尾遺跡第3層の土器群(鎌木・高橋1961)、第4期は南舞手遺跡河道3下層出土土器群(岡山県教委1996)や門田貝塚出土土器(岡山県教委1983)を代表して考える。なお、1期については平井勝により「津島1式・2式」とする細分案がされている(平井1995)が、本稿では、一括して1期とし、記述上分けて考える場合は平井による「津島1式・2式」の細分に準拠する。
- 2 土器片が、小片であまりに厚減している場合は時期の特定を保留している。
- 3 津島遺跡の遠賀川人と津島岡大遺跡の突帯文人の併存については、藤尾慎一郎により指摘されている(藤尾1991)。本論の仮説は、現象的には近畿地方と類似するが、同化の速度等の特質は異なる様相を示す。
- 4 ここでのサイト・キャッチメント分析の適用はあくまでも、領域の範囲の目安の範囲をでない。

## 引用参考文献

(津島岡大遺跡関連文献) 岡山大学埋蔵文化財調査室 1986『岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第2冊、1994『岡山大学構内遺跡調査研究年報』11 1993年度、1995『岡山大学構内遺跡調査研究年報』12 1994年度。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第5冊、1994a『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13 1995年度、1994b『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊、1995a『岡山大学構内遺跡調査研究年報』13 1996年度、1995b『津島岡大遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第8冊、1995c『津島岡大遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊、1996a『津島岡大遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊、1996b『津島岡大遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第12冊、1997a『岡山大学構内遺跡調査研究年報』14 1996年度、1997b『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第13冊。

## (その他の文献)

岡山県教育委員会 1985『白間川沢田遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告50

岡山県教育委員会 1996『南舞手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107

山陽町教育委員会 1995『南方前趾遺跡』

鎌木義昌・高橋 謙 1961『岡山県高尾遺跡』『日本農耕文化の生成』

高橋 謙 1980『入門講座弥生土器—山陽1』『考古学ジャーナル』No.173

平井 勝 1992『弥生時代への移行』『吉備の考古学的研究』上巻

1993『第3章 第3節 高尾手B調査区』『白間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84

1995『岡山平野における遠賀川系土器の出現』『古代吉備』第17集

藤尾慎一郎 1991『水原農耕開始期の地域性』『考古学研究』第38巻 第2号

藤田直司 1982『中部瀬戸内の前期弥生土器の様相』『倉敷考古館研究集報』第17号

Vita-Finzi, C. and E. S. Higgs 1970, Prehistoric Economy in the Mount Carmel Area of Palestine: Site Catchment Analysis, Proceedings of the Prehistoric Society 36

挿図の出典 図70・図71:小林作成、図73:1~13(藤田1982)から引用・再トレース、(14~23)は津島岡大遺跡各文献から引用・再トレース。その他は小林実樹・拓本・製図、図74:小林作成、遺跡名は(平井1992集)。



## 2. 岡山平野における正方位方格地割水田の出現

—津島岡大遺跡第9次調査地点検出の古墳時代水田の理解のために—

### はじめに

岡山平野では弥生時代の水田遺構については津島岡大遺跡のほか、津島遺跡や、津島江遺跡、百間川遺跡群などの調査によってその実態が明らかにされてきた。しかし古墳時代の水田遺構の検出例は少なく、後期のもものでは津島岡大遺跡、中溝遺跡、南方釜田遺跡で検出されているにすぎない。また、これらはいずれも旭川西岸地域に所在しているため、岡山平野全体の様相をうかがうことは困難な状況にある。このような状況ではあるが、津島岡大遺跡、中溝遺跡では畦畔の方位を北にあわせた正方位方格地割水田が認められ、条里制以前の方格地割水田を考えるうえで重要な資料である。

また、このような条里制施行以前の方格地割水田の出現には地割を施行したと考えられる地域の首長層の動向が反映されている可能性もある。そこで小論では岡山平野の古墳時代後期の水田遺構の分析に加え、古墳時代中期末から後期、飛鳥・白鳳期にかけての岡山平野の小集団の動向を追いながら土地区西の再編成がなされた背景について考察を加えたい。

### 1 津島岡大遺跡検出の古墳時代後期水田遺構

津島岡大遺跡では今回報告した第9次調査地点のほか、第6・7次調査で古墳時代後期の水田遺構や灌漑施設を検出している。この3調査地点は130mの範囲に東西に並んで位置する(図74)。

津島岡大遺跡の古墳時代前期水田は、水回りを考慮して地形の傾斜にあわせて水田畦畔を作っており、方位を意識している状況はみられない。本報告の11層検出遺構にみられるような状況が一般的である(図40)。

古墳時代後期の水田畦畔は第7・9次調査で検出している(図74)。これらはいずれも水田畦畔を方位にあわせて作っている。また、区画はいずれも方格である。しかし、個々の水田一筆の面積は不揃いで、極度に狭いものも存在する。全体としてはいずれも狭い面積で区画しているといえよう。これは地形の傾斜がわずかに残っていたために、区画の細分がなされた結果であるといえることができるかもしれない。大区画の畦畔はいずれの調査地点においても検出されていない。

溝は第6・7・9次調査地点で検出されている。第9次調査地点では東西方向に直線的に延びる2条の溝が平行して掘削されていた。このうち、北側の溝は第6次調査地点検出の溝と接続し、また、走行方向と底面のレベルから第7次調査地点検出の東西方向に掘削された溝に接続するものと推定される。この溝の走行方向は真北から西に91°振れており、ほぼ真北にあわせた東西方向を志向しているといえよう。

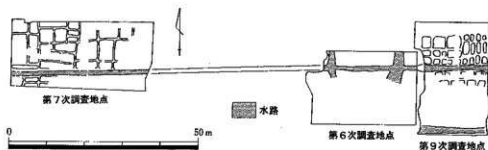


図74 津島岡大遺跡における古墳時代後期水田遺構の状況

以上の検出状況から、古墳時代後期には130m以上にわたって直線的に東西方向に走行する溝が掘削され、その南北には正方位方格地割水田が広がっていた状況が復原でき、この段階にそれ以前の地形にあわせた区画から方位を志向した区画へと耕地区画が変化したことがわかる。

## 2 岡山平野における古墳時代後期の水田遺構

岡山平野の古墳時代後期の水田遺構は津島岡大遺跡のほか、内容のわかるものとしては中溝遺跡、南方釜田遺跡のものがある。

**中溝遺跡<sup>(31)</sup>** 中溝遺跡は津島岡大遺跡の南約1.5kmに所在する。水田畦畔は東西南北に軸線をあわせ、約10×15mの方格に区画した水田を形成している。水口から出土した須恵器杯片から正方位方格地割水田が出現するのは5世紀末から6世紀前半とされている。水田はかなり整然とした区画をもち、水田一筆の面積も140～150㎡前後になると思われ、津島岡大遺跡のように極端な区画の細分はみられない(図75-1)。

中溝遺跡の水田畦畔が明確に方位を志向していたのか、局地的な調査のため偶然方位に一致した状況になったのかは今後の広範囲にわたる面的な調査で確認していく必要がある。

**南方釜田遺跡<sup>(32)</sup>** 南方釜田遺跡は津島岡大遺跡の南約2.5kmに所在する。ここでは弥生時代以降連続して水田が作られている。古墳時代後期段階の水田も検出されているが、この段階の水田はそれ以前の水田と変わらず、地形の傾斜にあわせて畦畔を作り出している。水田一筆の面積は80㎡前後であり、極端な細分区画はみられない(図75-2)。水田畦畔が正方位を志向して整然とした方格地割になって現れるのは奈良・平安時代になってからである(図75-3)。古代の遺構面では調査区中央に水路が南北方向に走るが、これは坪境にあたる溝とされている。

## 3 古墳時代後期の方格地割水田についてのこれまでの評価

このような古墳時代の方格地割水田について、都出比呂志や広瀬和雄は次のように評価する。都出はこのような計画的な土地の再編成について、「すでに開発された耕地を再編成して整

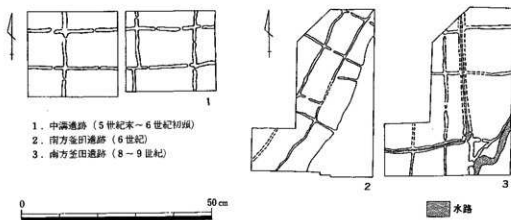


図75 岡山平野における古墳時代後期の水田遺構

然とした方格地割のなかにはめこみ、耕地の境界と面積を正確に決め、農民の耕作地を割り付け、租税を通じて支配することを第一の目的としたことは間違いない。」「さらには、有力首長層が所有する耕地や屋敷地や寺院などの領有関係を確定し、土地にたいする権利関係を調整するうえでも、このような統一的な地割は不可欠となる。」「七世紀以前において、有力首長層による小地域単位の方格地割の設定を認めれば、むしろこの第二の側面こそが、大規模な統一地割施行の最大の目的であったと考えられる。」とする（都出1989 p.90-91）。

また、広瀬は大阪府長原遺跡、城山遺跡の7世紀の方位に沿った区画水田の分析から、こうした水田が「米の新しい収奪方式と、それを実現する水田形態が試行された」ために出現し、それは『「国家」主導型開発の中心地域で、「官営実験農場」が設けられたということになろうか。』としている（広瀬1991 p.33-34）。

根木修は吉備の古墳時代水田について分析し、古墳時代後期のこのような正方方位格地割の区画原理を「5～6世紀に朝鮮から伝えられた新米の文物とともに水田の造成・経営技術への新たな技術導入が存在したものと推定され、この時期『日本書紀』に伝えられる吉備の反乱伝承に伴う朝鮮との直接交流などからしても、旭川流域の先進地域に正方方位格地割が存在することは、それはそれで充分に納得される状況にあった」（根木1992 p.413-414）として、このような方格地割の出現が朝鮮からの技術導入によるものと考えている。

それでは渡来系集団が津島周辺に移入してきたことを示す考古資料はどの程度存在するかみてみたい。津島周辺では上伊福九坪遺跡で陶質土器高杯蓋が、南方遺跡で軟質土器が出土しているが（亀田1997 p.133表1）、今後の調査で渡来系要素の強い遺跡が発見される余地が残されているとしても、遺構・遺物からみる限りこの地域における渡来系集団の存在は稀薄であった可能性が高い。

また、都出や広瀬の主要からは古墳時代後期の耕地の再編成は首長層、あるいは支配階級が支配や収奪の強化を目的として行ったものであることが考えられる。そこで次に古墳時代後期における岡山平野の地域集団の動向について検討を加えたい。

#### 4 岡山平野における地域集団の動向と耕地再編の背景

##### (1) 岡山平野における地域集団とその動向

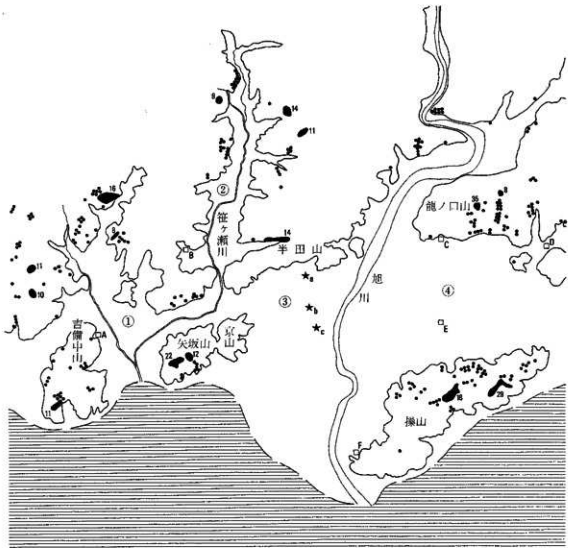
古墳時代の岡山平野では基本的には河川や山塊、海岸線によって分断された小地域を一つの単位としていくつかの集団が存在していたと考えられる(図76)。

岡山平野の小地域をみてみると、①笹ヶ瀬川下流域の吉備中山、矢坂山で囲まれた地域、②笹ヶ瀬川上流の小盆地、③旭川西岸の沖積地、④旭川東岸の龍ノ口山、操山で囲まれた地域、の4小地域に分けることができる。

地域集団の動向については集落遺跡、墳墓、寺院などをあわせて考える必要があるが、岡山平野では古墳時代の集落遺跡については調査例が少なく、不明確な点が多い<sup>(4)</sup>。そこでこれら①～④の地域集団の動向について造墓活動を中心に古墳時代前期から飛鳥・白鳳期までの状況をみていきたい。

まず①地域では前期に中山茶臼山古墳、尾上車山古墳、一宮天神山2号墳などの前方後円墳が連続して築かれる。②地域には目立った首長墓は築かれないが、小規模な方墳、円墳の築造がみられる。③地域には半田山山塊に都月坂1号墳、七つ坊古墳群、平野部に神宮寺山古墳、京山山塊に津倉古墳が築かれ、中期には一本松古墳やダイミ山古墳、お塚様古墳が築かれるなど、前期から中期にわたって連続して首長墓が築かれる。④地域では備前車塚古墳、宍甘山王山古墳、金蔵山古墳が、海浜部では操山109号墳、網浜茶臼山古墳、漢茶臼山古墳が連続してあるいは並行して築造される<sup>(5)</sup>。中期には上の山1号墳や旗振台古墳といった方墳が築かれている。これらの4地域は前期には規模や墳形の差はあるとしてもそれぞれの地域に首長墓を築いている。中期には前方後円墳は③地域のみ築かれ、④地域には方墳が築かれるが、①、②地域では目立った造墓活動がみられなくなる。

古墳時代後期になると、これらの4地域のうち①、②、④地域では有力家父長層が築造したと考えられる小規模な円墳を中心とする古墳群が形成されている。また、①、②、④地域では白鳳期までに寺院が建立されており、これらの寺院が各地域の氏族の氏寺であったならば、①、②、④地域の集団については古墳時代からの連続性を石取できる。ところが、唯一中期に前方後円墳の系譜が認められる津島一帯を含む③地域では、中期後半に全長約30mの前方後円墳であるお塚様古墳を築造した後、古墳の築造を行っていない<sup>(6)</sup>。また、飛鳥・白鳳期の寺院の建立も認められない。この③地域は他の地域と異なり古墳時代中期以降の政治的記念物が全く



凡例 ● 後期古墳

● 後期古墳密集域  
(数字は範囲内の古墳数)

□ 古代寺院

★ 水田遺構

古代寺院：A. 神力寺院寺 B. 富原北庭寺 C. 寅田庭寺

D. 辰部庭寺 E. 幡多庭寺 F. 網浜庭寺

水田遺構：a. 津島岡大遺跡 b. 中溝遺跡 c. 南方堂田遺跡

※ 海岸線は推定復原、河道は現在の流跡。

図76 岡山平野における後期古墳、古代寺院、水田遺構の分布 (岡山市教育委員会 1983『岡山市埋蔵文化財分布地図』を参考にして作成)

認められない異質な地域といえる。

(2) 真北志向の地割

方位の問題については、津島岡大遺跡の東西方向に掘削された溝がほぼ真北を志向している

ことはすでに述べた。方位をあわせている構築物の存在は方位を志向する技術や思想の存在の目安になると考える。そこで岡山平野のこの時期の構築物のうち、地域内の有力首長墓と考えられる横穴式石室墳の石室主軸や、飛鳥・白鳳期の寺院で内容の明らかになっているものについてみてみたい。

④地域に所在する唐人塚古墳は切石に近い整った横穴式石室をもつ古墳時代終末期の古墳であるが、その石室主軸は真北からも磁北からも大きく外れる。同じく④地域の沢田大塚古墳も大形の横穴式石室を有しているが、その石室主軸も大きく真北、磁北から外れている。このほか、吉備地域の6～7世紀の首長墓と目される古墳の石室主軸で真北を志向するものはほとんどない。

また、吉備の飛鳥・白鳳期の寺院で中軸線の判明しているものは少ないが、④地域の事例では、7世紀前葉に建立された賞田廃寺の中軸線は真北から西に9度振っている。賞田廃寺の次に7世紀後葉に建立された幡多廃寺の中軸線は真北から東に1度30分振<sup>(17)</sup>っている。これはほぼ真北を志向したものと考えられる。

ここで確認できることは、有力な首長墓と目される古墳の横穴式石室においても真北を志向しないこと、7世紀前葉の寺院においても真北を志向しないこと、真北を志向して寺院の中軸線を設定するのは7世紀後葉であること、である。このことから、6世紀から7世紀前半にかけての①、②、④地域の集団には、真北を志向して領域を区画する思想や技術がなかったと考える。このような状況のなかにあつて、津島周辺の地域はいち早く真北を志向して耕地区画を再編成しているのである。このことから津島周辺地域を含む③地域の特異性がうかがえる。

### (3) 岡山平野における正方位方格地割水田の二段階

現在も津島一帯を含む岡山市北半部の条里地割は方位にあつており、津島岡大遺跡や中溝遺跡で検出された古墳時代後期の正方位方格地割本田畦畔がこのような地割の先駆けとなつたとみることもできるのかもしれない。しかし、中溝遺跡の南約1kmに位置する南方釜田遺跡ではこの段階にはまだ地形の傾斜にあわせて水田畦畔を作っており、正方位の方格地割水田が出現するのは8世紀である。このことから、6世紀の耕地の再編成は地域全体に及ぶものではなかったことが推定できる。また、津島岡大遺跡でも後の条里に合致する坪境の溝は古代になってから掘削されており、その坪境の溝と古墳時代後期に帰属する層で検出した東西方向の溝の位置は合致しない。このことは古墳時代後期の方格地割を踏襲しない区画の再編成が古代に行われたことを示していると考えられる。すなわち、古墳時代後期の耕地区画は後の条里に連続しないと考えるのである。また、津島岡大遺跡で古代の坪境として機能したと考えられる大溝は、その後明治時代にいたるまでその位置をほとんど変えずに掘削され続けて機能している。方位の問題からは、④地域で古代寺院の中軸線の方位が真北になるのは7世紀後葉であり、条里制

が施行されたと思われる時期に近似することが指摘できる。これはこの段階になって寺院の地割が条里地割に規制されたことを示唆する。つまり古代の条里制こそが道路や寺院、官衙の整備も含めた統一された地割であったことを示している。

以上から、古墳時代から古代の岡山平野では古墳時代後期の耕地区画の再編成という地域内の部分的な再編、7～8世紀の広範囲に及ぶ統一的な条里制の施行という二段階の土地区画の再編成があると考えるのである。

#### (4) 正方位方格地割水田出現の背景

水田畔畔の方向を正方位にあわせた方格地割水田は③地域に5世紀末～6世紀代にかけて出現している。この地域は当該期の集落や生産遺跡が存在し、中期まで首長墓が築造され続けてきたにもかかわらず、古墳や寺院が造営されない。このことから在地の集団を規制するような政治的な圧力が加えられていた可能性を考えることができる。そして他地域に先駆けて真北を志向する区画を行っていることや耕地の再整理を行うことから、在地の集団とは異なる思想や技術を有する集団の関与があったと考える。しかし、この集団の性格を明らかにする材料は現状ではほとんど無い。また、この地域には支配者層の存在を示す墳墓や寺院も無いため、このような地割の施行をもって直ちに支配者層による耕地再編とすることはできない。正方位方格地割水田出現の背景については、今後、津島岡大遺跡やその周辺で方格地割を施行した集団の生活域が調査される可能性があり、資料の蓄積を待って再び検討する必要がある。

#### おわりに

小論では、津島岡大遺跡の古墳時代後期の方格地割水田が後の条里地割に直接つながらないこと、墳墓や寺院の造営、方位の志向という観点では方格地割を施行した旭川西岸の集団が岡山平野の集団のなかで特異な位置にあることを指摘した。一方で、資料数が少なく、地域的な偏りや調査の疎密が認められる現状での分析であり、正方位方格地割水田の出現の背景については今後の研究課題として残っている。予察的な要素を多く含む不十分な議論であるが、小論が古墳時代後期の方格地割の出現の理解に向けて一つの問題提起となれば幸いである。

小論を作成するにあたり、小林青樹、澤田秀実、津村宏臣、土井基司、新納泉、松木武彦の各氏から有益な助言を得た。記して謝意を表したい。

(野崎貴博)

#### 註

- 1 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「中興遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
- 2 岡山県教育委員会による1993年の調査では中興遺跡の隣接地点で該期の水田遺構が検出され、方位に乗っていたと報告されている(岡山県教育委員会1994)。正式な報告ではないため今後の正式報告を待つ必要がある

が、現状ではどちらも評価しがたい状況にあるといえる。

- 3 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
- 4 津島岡大遺跡では第10次調査地点において古墳時代後半期に属する壘穴式住居2棟が検出されている。このうちの1棟は6世紀末～7世紀初頭の須恵器片、土師質甕の把手などが出土しており、この時期に属する可能性が高いとされている（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1995）。  
そのほか、津島遺跡や津島江道遺跡でも古墳時代中・後期の集落の調査が行われているが、本報告であるため詳細は明らかではない。今後、これらの資料も含めて津島周辺の集落の置選や集団の性格を明らかにさせていく作業が必要である。
- 5 首長墓の状況からみる限り、この地域はさらに細分される可能性がある。
- 6 津島地域の西に位置する京山山城の北側は土取りが行われており、その際に破壊された可能性も残るが、仮にそうであっても他地域と比較した場合にはその種持ちは変わらない。
- 7 岡山市教育委員会による調査の結果では、方位を厳密に測定しうるだけの遺構遺存状態ではなかったが、南大門基礎地形中心と北門基礎地形中心を結ぶ一応の中軸線は真北から東に1度30分振れている（岡山市教育委員会1975）。
- 8 墳墓や寺院が存在せず、集落遺跡の実態も明らかになっていない現状では、この集団の出自や性格にまで踏み込んだ議論はできない。今後資料の増加を待って検討する必要がある。

#### 参考文献

- 岡山市教育委員会 1971 『資田鹿寺発掘調査報告』  
 岡山市教育委員会 1975 『幡多高寺発掘調査報告』  
 岡山市教育委員会 1983 『岡山市埋蔵文化財分布地図』  
 日本考古学協会静岡人会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』  
 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』  
 徳山比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』  
 河本 清 1991 「山城と寺院の建立」『岡山県史』原始・古代I  
 広瀬和雄 1991 「耕地と灌漑」『古墳時代の研究』4 生産と流通I  
 板木 修 1992 「水稲農耕の展開」『吉備の考古学的研究』(上)  
 岡山県教育委員会 1994 「都市計画道路万成町富嶽建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』24  
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995 『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター年報』11  
 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995 『津島岡大遺跡』6  
 亀田修一 1997 「考古学から見た古備の渡来人」『朝鮮社会の史的展開と東アジア』

#### 図出典（図はすべて再トレース、一部改変）

- 図74 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995 『津島岡大遺跡』6、図75-1 日本考古学協会静岡人会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』、図75-2・3 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』



### 3. 津島岡大遺跡出土古代土器の再検討

#### はじめに

津島岡大遺跡において古代に属する遺物は、第3次調査で確認された条里の<sup>(1)</sup>坪境に位置する大溝出土遺物が中心である。遺跡内を東西に走る同溝は、その後、第6次調査<sup>(2)</sup>・第9次調査<sup>(3)</sup>・第13次調査<sup>(4)</sup>でも調査が続き、第6次調査報告にあたっては遺物の概要をまとめて考察を試みた<sup>(5)</sup>。しかし、今回報告の第9次調査では同溝出土遺物群に関して、重複関係にある新旧溝の分離によって、より一層状況を明確にすることができた。それに伴って、前回おこなった考察の一部を修正する必要性が生じたため、この遺物群に第6次調査の資料を加えたかたちで、再度の検討を行う。

さらに、同遺物群と併行期にほぼ対応する段階における周辺地域の様相、および前後にあたる時期の状況との比較から、古代後半の土器様相がどのような変化をたどり、中世的なものに向かうのかという視点の中で、法量分布とその構成状況から得られる情報をもとに簡単な予察を加えておきたい。ただし、津島岡大遺跡出土の資料が小形器に集中することから、ここでは大形の甕・壺といったものや、特殊な形態のものは除外する。

#### 1 分類基準<sup>(6)</sup>

種類の基準は前回の報告と同じ特性で、須恵器・須恵質土器・土師器・黒色土器・白色土器を用いる。

器種名は古代の小形土器では碗・杯・皿・鉢などの表現が一般的で、それらの分類基準は、体部下半のラインを重視した形態差と器高の違いに着眼した法量差を併用することが多い。この分類は受け入れやすいが、特に、カーブなどの形態差は基準が曖昧で明瞭な線を引くことができないため、往々にして判断に苦慮し感覚的なものに頼る結果を招きがちである。

ここでは、土器の使用状況に視点をおき、機能性を重視した分類を用いたい。基本的な機能を強く反映する要素の一つに法量がある。容器として機能する部分の法量、すなわち口径と、有高台の場合は高台部を除去した体部器高値を重視して取りあつかう。さらに、一概には決定づけられないが、両者の関係では、器高の方に機能を限定する要素を強く認めたい<sup>(7)</sup>。津島岡大遺跡の法量分布も器高面からの区分が可能であり、体部器高値を基準にした分類の有効性を示す。「碗」「杯」「皿」の器種名は、一般的使用例との混乱を避けるため、ここでは記号化して形態の特徴を表現する。次に、記号化する基準を示しておこう。

考察

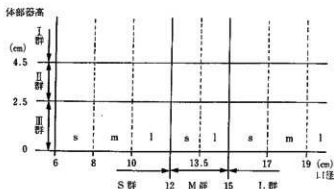


図77 法量分類基準範囲図

a. 法量

津島岡大遺跡の法量集中範囲を参考に、体部器高値と口径値による分類基準を以下のように再設定する（図77、表23）。

〈体部器高〉

I群…4.5cm以上を示すもので深い容器を指す。

II群…4.5～2.5cmに含まれる容器を示す。やや浅めで、一般的な「杯」の深さといえるかもしれない。

III群…2.5cm以下で、非常に浅い容器である。「皿」と称される範囲に近いであろう。

便宜的にI群とII群には、体部器高値5cmと3.5cmに補助線を入れて分析の参考とする。

〈口径〉

大形のものからL・M・S群に大別し、その中をl・m・sを用いて細分する。

L群…15cm以上の大形容器である。細分は19cmと17cm前後で行い、19cm以上をLl群、19～17cmをLm群、17～15cmをLs群とする。

M群…15～12cmに含まれる中形容器である。13.5cm前後で細分し、15～13.5cmをMl群、13.5～12cmをMs群とする。

S群…12cm以下の小形容器をまとめる。細分は10cmと8cm前後で行い、12～10cmをSl群、10～8cmをSm群、8cm以下をSs群とする。

ただし、各群の境界は数値な基準ではなく、若干の誤差は分布状況にあわせて判断する。

b. 形態

体部下半のカーブが直線的に立ち上がるものをAタイプ、体部下半から底部にかけ

表23 法量分類基準表

a. 体部器高分類

I群	4.5 cm以上
II群	4.5 ～ 2.5 cm
III群	2.5 cm以下

b. 口径分類

L群	l群	19 cm以上
15 cm以上	m群	19 ～ 17 cm
	s群	17 ～ 15 cm
M群	l群	15 ～ 13.5 cm
15 ～ 12 cm	s群	13.5 ～ 12 cm
S群	l群	12 ～ 10 cm
12 cm以下	m群	10 ～ 8 cm
	s群	8 cm以下

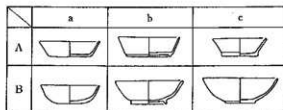


図78 形態分類図

て丸みを有するものをBタイプとする。さらに高台の状態で無高台をaタイプ、有高台をbタイプ、円盤高台状あるいはその痕跡が認められるものをcタイプとし、両者を組み合わせた分類表記を用いる(図78)。

### c. 底部成形

底部成形痕から、次の分類を行う。

- ①手法…周縁部筥キリ+中心部押圧。筥キリは底部周縁部の一回転のみで、中心部を押圧で整える。筥キリ方向は水平で底面は平坦となる。
- ②手法…周縁部筥キリ+中心部押圧で①手法と共通するが、筥キリ方向が斜めに入るため底面は飛び出た状態を呈す。
- ③手法…押圧。底部全体に押圧痕のみが残り、筥キリ痕跡が確認できない。全体に丸みのある底部を形成する。
- ④手法…筥キリ後ナデ。筥キリ後ナデ調整を施すために筥キリの範囲が不明瞭な場合もある。筥キリ面の痕跡が推定されるものを含む。
- ⑤手法…筥キリ。回転によって底部中心部にまで筥キリが及ぶ。

これらの手法の中で、①と②手法は周縁の筥キリ角度の違い程度の差であり、④と⑤手法は筥キリを基本とするもので、両者ともそれぞれ関連性が強い手法と判断できる。とすると、技術的には大きくは3グループにまとめられる。

## 2 津島岡大遺跡における古代土器

### (1) 第6次調査と第9次調査古代溝出土遺物の概要

津島岡大遺跡で資料的にまとまりをみせるのは、第6次調査SD13・14と第9次調査溝22～29の資料である。両調査区は接する位置関係にあり、さらに両資料の比較においても法量分布状況などに共通性を示す(図79、白抜き点：6次調査、黒塗り点：9次調査)ことから、両遺物群は時期的にも同一資料として扱う。

法量分布は、深くて大形のⅠLs～MI群、やや浅いが口径ではⅠ群と共通するⅡLs～MI群、中形品のⅡMs群・ⅡSI群、浅い容器のⅢSI～Sm群と、5群の集中域を示す(図79a)。各分布域を構成するのは、Ⅰ群では須恵器Abを中心に須恵質土器Bb、黒色土器Bb、白色土器Bb、ⅡLs～MI群では土師器が主体でAa・Ab・Ba・Bb各タイプ、そして須恵器Aa、黒色土器Bbである。一方、中・小形品Ⅱ・Ⅲ群は土師器Aaタイプが主体で、そのほかにⅡMs群では少量の土師器Ab・Ac・Bbと須恵器Aaを、ⅡSI群では土師器Acタイプが割合を高める。ⅢSI～Sm群では土師器Baタイプが僅かに加わる。

つまり、Ⅰ群は須恵器中心の複数の焼成種で構成され、いずれもbタイプを示すという形態

考察

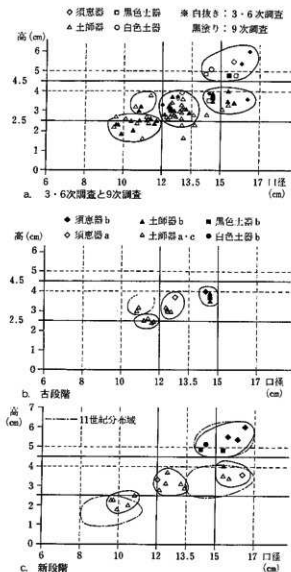


図79 津島岡大遺跡古代大溝出土遺物法量分布図

表24 津島岡大遺跡古代大溝出土遺物法量別形態表

法量 (群)	古段階				新段階			
	高台(b)		高台(a·c)・底部成形		高台(b)		高台(a·c)・底部成形	
器高: 口径	土師: 黒色	須恵	土師器	須恵	土師: 黒色: 白色	須恵	土師器	
I群								
Ls	—	—	—	—	A·B	—	—	—
MI (高)	—	—	—	—	—	B	—	—
Ls	—	—	—	—	—	B	—	—
MI (低)	—	—	—	—	—	B	—	—
II群								
Ls	—	—	—	—	—	B	—	As ⑤; Ba ③
MI	—	—	—	—	—	—	—	—
Ms	A·B (A·B)	B	Aa ⑤	Aa ①②	—	—	—	Aa ⑤; Aa ①·Ac ④⑤ Ba ③
III群								
SI	—	—	—	Ac ④⑤·(Aa ③)	—	—	—	—
SI	—	—	—	Aa ①②·Ba ③	—	—	—	—
IV群								
SI ~ m	—	—	—	—	—	—	—	Aa ①·Ac ④⑤ Ba ③

面での齊一性と焼成面での多様性をもつ。他方、Ⅱ・Ⅲ群はⅠ群にはない土師器が占めるという焼成的齊一性を示し、形態面にも、特に Ms 群以下の中・小形品に関しては、Aa タイプに偏りをみることが可能である。ただ、口径値がⅠ群と一致する MI~Ls 群では複数の焼成・形態が認められる。b タイプはⅡ群では M 群以上に含まれ、Ms 群と M~Ls 群とに分化するが、大形品の比率が高い傾向が強い。

こうした状況から、焼成面では土師器の有無で明瞭のようにⅠ群とⅡ・Ⅲ群という深さに作りわけの基準をおき、形態面では b タイプにみるように、器高に加え口径にも基準をおいた生産であることが分かる。また、Ⅰ群は集中度が高く、単一サイズに近い生産が考えられるのに対して、特にⅡ群には口径分化が存在し、形態面を含めて複数形の生産であることも指摘しておく。

(2) 新古段階にみる土器様相の変化

第9次調査では、重複関係にある溝22(古段階)と溝23(新段階)の底部から古代土器がまとまって出土している。溝

という遺構の性格上、一括性に問題が残る点を留意しつつそれぞれの傾向をまとめよう。溝25・29出土の少量の遺物は、様相的に溝23の資料と矛盾が無いため新段階の遺物として扱い、それに加えて第6次調査の資料で出土位置の分かる遺物も含めたい。

#### a. 古段階の様相(図79-b、図80-a、表24)

法量的にⅠ群に含まれるものは、実測可能な遺物の中には認められない。

ⅡM群・ⅡS群・ⅢS群に分布域がみられる。

ⅡM群はⅠ群とs群に二分され構成要素も異なる。やや大形のMⅠ群は土師器Ab・Bbと黒色土器Bbを含む。いずれもbタイプが中心であるが、胎土や調整面ではそれぞれ差を見せる。土師器Abタイプ(図80-5)は砂粒が日立ち硬質感がある。同Bbタイプ(同-6)は軟質できめ細い胎土で作られ、押圧が顕著である。高台の形状も、後者は強く引き出された足高なもので前者と明瞭な違いを見せる。黒色土器(同-1~4)は内黒で外面は褐色系の色調を示す。こうした土器にみられる諸特徴から、黒色土器も含めると少なくとも3グループの工人の存在が浮かび上がる。Ms群は土師器Aaタイプが占め、須恵器は備かである。形態はAaタイプを主体とするが、土師器Ab・Bbも含まれる可能性がある。底部成形は土師器では筥ヤリと押圧の①・②手法が、須恵器では筥ヤリの⑤手法が確認される。土師器の法量集中度が高いなか、須恵器は器高が5mm程度高くそれらと差を見せる。

S群はⅡ群とⅢ群とに分離できる。両群は数値的にかけ離れてはいないが、様相には際立った違いを見せる。やや器高の高いⅡ群は、Aaタイプも存在しないというわけではないが、主に土師器Acタイプで構成される。Ⅲ群に入るのは土師器Aa・Baタイプである。Ⅱ群のAcタイプ(同-16・17)は淡褐色系の色調を呈する。底部成形には④・⑤手法が用いられ、底部ラインはシャープさを増す。体部ラインも土師器に一般的な波打つラインではなく直線的であり、須恵器に近い特徴が色濃く見える。器高が5mm程度高い傾向も合わせ他と明瞭に区別される。一方、Ⅲ群のAaタイプ(同-11・15)には①・②手法が用いられ、やや硬質で砂粒を含み赤色かかった色調を呈するものもある。ⅡM群の同タイプ(同-8・12)と同じである。Baタイプ(同-19)はきめ細い胎土で淡~暗褐色系の色調をもち底部は③手法である。こうしたAa・Ba両タイプはその特徴が明らかに異なるにも関わらず、法量的には一致し、Acタイプと差を有す点は注意すべきであろう。

同遺物群の特徴をまとめてみよう。構成種類は土師器を主体に、やや大形品(MⅠ群)に黒色土器を含む。法量では浅めの容器(Ⅱ・Ⅲ群)が4分されるが、ⅡMⅠ群・ⅡMs群・ⅢSⅠ群ではAa①・②とBa③の3タイプによってそれぞれが構成されるという共通性を示すのに対して、ⅢSⅠ群のみはAc④⑤タイプを主とし、他と共通性を示さない状況にある。形態面ではbタイプがMⅠ・Ms群の2群に分散的に存在する。

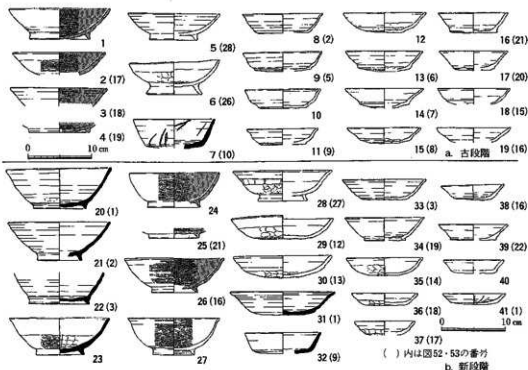


図80 津島岡大遺跡出土古代土器 (縮尺1/6)

以上の状況を、ここで底部手法差を工人差と考えて、工人側の動きを検討してみよう。底部手法①・②・③を有す3群の構成状況からは、3グループ程度の土師器工人が法的には3サイズ、形態的には大きくはa・b両タイプの容器を生産している可能性が高いことが予測される。これらの手法は土師器の技術の系譜上にあるもので、工人によるこうした複数生産の体制は継続した流れの中で捉えられ、生産性の単純化が未発達な状況を窺うことができる。また、工人間の関係では独自性の強さと関連性の強さを、底部成形などの諸特徴にみる違いと法量の一致にみることができよう。また、それほど多量とは言い難い土師器の中に、このように多様な技法や形態の存在が認められるということは、それぞれが比較的小規模な生産であったことも予測できる。こうした土師器工人の中で須恵器系の要素を強く示し、法量面にも単一的でやや異なる様相をみせるAc⑤タイプの存在は新たな技術的要素として注目されよう。

ただ数量的の不足面も考えると、こうした状況は土器様相のほんの一端と理解しておきたい。

#### b. 新段階の様相 (図79-c、図80-b、表24)

法量分布では4群の集中をみる。

I群はM1～Ls群の中で、須恵器を主体に黒色土器と白色土器で構成される。各種類ごとに説明しよう。須恵器は体部器高5cm以上で口径もL群に集中するなど、I群の中でも特に大きく深い容器を示す。形態はAbタイプが主体である(図80-20～22)。プロポーシオンは外側上

方に大きく開き、高台は丸みをもつ三角形あるいは強く引き出すものもあり、体部と一体化するようなラインを示す。こうした点には土師器との共通性が強くみられる。さらに、出土点数は少量ではあるが特異な形態の須恵質土器 Bb タイプ（同-23）は、器壁が厚ぼったく体部下半に押圧があるなど、須恵器の範疇からのより一層の逸脱性を見せる。黒色土器は器高 5 cm 以下の範囲（表24、Ⅰ-Ⅱ群）におさまり、須恵器に比べるとやや浅い（同-24～26）。形態は Bb タイプで高台断面は三角形を呈す。内黒のはかに外面の色調が白色系になるものがある。このタイプ（同-26）は器壁が薄く焼成に硬質感があり、ミガキも深く従来の黒色土器とは趣を違える。口縁部にめぐる強いナデなどからも、中世段階に広がる「吉備型土師質土器碗」との共通性が高い。白色土器は6次調査で出土したのみである（同-27）。器高は 5 cm 程度で黒色土器との共通性が高い。法量・色調・胎土・調整などの点で黒色土器（26）と類似し、それ以上に「吉備型土師質土器碗」（図81-18）と近似する。

Ⅱ群は Ls 群と Ms 群に分布する。土師器が中心で須恵器は僅かである。黒色土器は確実なもの認められていない。Ls 群は土師器 Ba（図80-29・30）・Bb タイプ（同-28）と須恵器 Aa タイプ（同-31）を含む。土師器は③手法が用いられ胎土は精良で器壁は厚く軟質感が強く、古段階の土師器 Ba タイプに共通する。須恵器は硬質で⑤手法が用いられ、色調は白色を呈し体部ラインは横ナデによる凹凸が強く上方に大きく開き、土師器に近い姿を示す。Ms 群は土師器 Aa タイプ（同-33）が多く、他に Ac（同-34）・Ba タイプ（同-35）がある。③手法と結合する Ba タイプは、L 群に含まれる同タイプの小形品である。

Ⅲ群は Sl～Sm 群に土師器 Aa タイプを中心として、Ac・Ba タイプを少量含む分布が認められる。A タイプには④・⑤手法が、B タイプには③手法が伴う。Ac ⑤タイプ（図80-39）は古段階の同タイプのもの（同-16）と比べると、体部の開きが強く、高台部は貧弱で円盤形態が消失しかけている。さらに、5 mm 程度の器高低下もみられ、Ⅱ群からⅢ群への変化を生んでいる。また、Aa ④タイプ（同-41）と Ba ③タイプ（同-36）を比較しても、直線的体部のラインは共通し、底部形態の差も成形上の違いから若干丸みをもつか平坦かという程度である。このように Aa・Ac・Ba 間にみられるタイプごとの差は比較的弱い状態にある。

新段階の概要をまとめると以下ようになる。法量では大形で深い容器のⅠ Ls 群、大形でやや浅いⅡ Ls 群、中形容器のⅡ Ms 群、小形で浅い容器のⅢ Sl～Sm 群にまとまりをみせ、明瞭に独立的容量をもつ法量分化を示す。特に、Ⅲ S 群の形成は小形品成立の流れとして重要な特徴である。各群を構成する種類では、須恵器（須恵質土器）・黒色土器・白色土器が高台を有す大形で深い容器（Ⅰ群）を、土師器が小形で浅い容器（Ⅱ・Ⅲ群）をという作りわけが確認される。土師器 b タイプの少なさと分布域の限定化も合わせ、単純生産化への流れを窺うことができる。また、底部成形が④・⑤手法である技術面や外側に開く直線的体部ラインと高

台などの形態面などに土師器と須恵器の共通要素が強く現れる。他とは違いをみせる土師器 Ba ③は、Ⅱ・Ⅲ群の中で法的に3グループが確認されるなど、その増加もこの段階の特徴といえるかもしれない。

工人側の動きとしても、土師器では法量別生産を行ってはいるが、形態面ではかなり単純化が進んでいる。また、⑤手法を基本におく技術面や形態面にも斉一性が認められる。

### c. 両段階の変化

新・古段階の相違点からその変化を要素ごとにまとめてみよう。

法量ではⅡ・Ⅲ群をみると、大形品はより大きく、小形品はより小形にという動きが指摘できる。特に、Ⅱ SI 群からⅢ Sm 群へという流れは独立した小形品（いわゆる「小皿」）を形成する重要な変化である。

形態面ではbタイプがⅠ・Ⅱ群の各集中域に存在する状態から大形品（Ⅰ群）に限定される傾向を強め、器種形態の単純化の動きを見せる。また、須恵器と土師器の関係では、新段階では一様に外側へ体部の開きを強め、共通した形態を指向する様子を窺うことができる。土師器ではそのラインが須恵器的な直線ラインに変化する。また、Ⅰ群に集中する須恵器では、体部下半に丸みを与える傾向を示す。Bタイプさえも出現させ、高台形も土師器的形状に近いものとなる。随所に両者の接近を指摘できるが、底部成形の変化もこれに強く関わる大きな変化である。古段階で中心をなす①・②手法は新段階では④・⑤手法に取って代わられる。須恵器的技法の選択である。③手法は両段階に含まれているが、Baタイプと合わせて増加する。

焼成面ではどうであろうか。大形で深い容器（Ⅰ群）は土師器以外の須恵器・黒色土器など、中～小形で浅めの容器（Ⅱ～Ⅲ群）は土師器という傾向はすでに古段階にみられるが、白色土器やその形態に共通する外面白色系の黒色土器といった新タイプの出現は重要な新要素である。さらに、それがⅠ群のみで起きる変化である点も、その法量をもつ土器生産に関して示唆的である。須恵器がより高く、黒色土器・白色土器は依然やや低い状態である点も指摘しておきたい。

こうした両者間の変化は、土器構成自体の変化と生産者側の技術的变化にまとめられる。

前者は小形容器（小皿）成立への流れに伴う形で加速化する法量差の拡大と、形態面を含めた単純化というかたちで出現している。法量間にもみる形態・焼成面での差が拡大する変化は、ある程度限定された機能を有すとみられる小形品にみるように、それぞれの土器が機能面での独立性を強くもち、その機能に合わせた合理的で効率的な生産を目指す中で生じたと考えられる。

後者は須恵器と土師器の特徴差の減少とⅠ群にみる新タイプの出現にともなう焼成面の多様性の進行という状況である。生産面の変化を土師器生産側からみると、前述したように、古段階では各工人は3サイズの法量は一致させながらも独自の底部形成法や形態的特徴をもち、各



タイプの土器を生産するという独自性を示す。それに対して、新段階では技術面や形態面で齊一性が強い状態に変化している。その背景に④・⑤手法への転換に象徴される須恵器の技術の導入が大きな要因となっていることは容易に予測できる。一方、須恵器生産側からみると、古段階の資料が乏しく不明瞭であるが、大きな変化は、I群において体部下半ラインや高台などに、従来の須恵器形態を失い、黒色土器などの土師系生産との共通性を高める点にある。技術的变化を試みる土師系生産者と、容器の形状を変化させる須恵器生産者という、生産側の動きが、土師器・須恵器の枠を越えた新タイプの出現というかたちを生み出すと考えられる。

また、諸特徴に他と差をみせ、従来からの在地生産の系譜上には当てはまらない土師器B③タイプは新段階にはII Ls群の主要種類を構成するような増加傾向をましており、新段階における製作人間の活発な動きを窺うことができる。次の段階に出現するタイプと底部調整は異なるが、諸特徴が近似する点も気に掛かる点である。

### (3) 隣接遺跡との比較と時期比定

同溝の土器群の年代観をかつて10世紀後半～11世紀初頭とし、その中に4段階の設定を行った<sup>(2)</sup>。その点について再度整理してみよう。比較資料は「吉備型土師質土器純」が出現する段階で、11世紀中頃～後半におさまると判断される鹿田遺跡第5次調査土坑15<sup>(12)</sup>（以後、鹿田遺跡と略す）の遺物群で、津島岡大遺跡の新段階の資料と比較する（図81、図82c）。

I群の分布域は共通するが、構成種類に大きな違いが認められる。津島岡大遺跡では須恵器Abを中心に、黒色土器Bb、そして僅かに白色土器Bb・須恵質土器Bbタイプが構成種類をなすのに対して、鹿田遺跡では白色系土器（「吉備型土師質土器」）Bbタイプ（図81～18）の一種類によって占められる。構成種類が複数と単一の違いである。さらに、諸特徴が共通する白

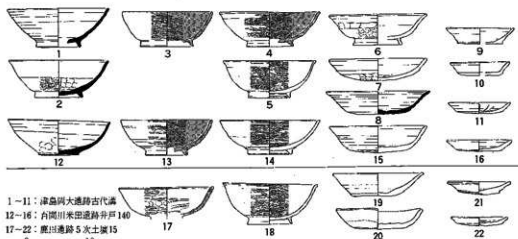


図81 10世紀末～11世紀前半の様相（縮尺1/6）

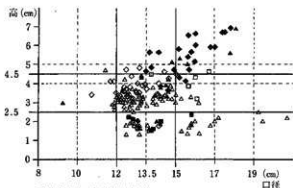
色系の土器を法量的に比較すると、津島岡大遺跡（図81—5）では体部器高は5cm程度であるが、鹿田遺跡では、5.5cm以上の領域に上昇する。この数値は津島岡大遺跡では須恵器のみで得られる。

法量分布はI群で一致するが、II・III群では法量域に違いが認められる。津島岡大遺跡ではII Ls・II Ms・III Sl～Sm 群の3群、鹿田遺跡でもII Ls・II Ml・III Sm 群の3群である。分化の状態は共通するが、その分布域はII Ms 群の有無とIII Sm 群の集中という点で異なる。また、各群を構成する土器の焼成・形態・手法面を比較すると、両遺跡の遺物は土器器 Aa ④・⑤タイプを主体とする点で一致する。

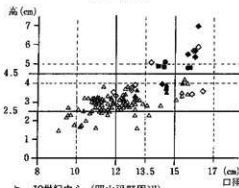
つまり、両遺物群は明瞭な法量分布があり、深さ別の作りわけが意識され、技術的にも篋ヤリを主体とした底部成形を共有し形態面などにも緩やかな共通性を示す。相違点としては大形で深い容器の構成種類が複数か単一かという点、浅めの容器に関して中形品の有無（II Ms 群）と小形品（III Mm 群）が独立的に存在するかどうかという2点に集約される。

ところで、両遺物群間で法量分布上、大きな違いとなるII Ms 群とIII Sm 群の関係は、前者が9世紀以前から連続と存在する主要な容器の法量域であり、後者は中世の土器の主要器種となる容量であることから、その先後関係もおおのずと明らかである。さらに、前述した両遺物群の共通性と相違点に加え、11～14世紀に展開する白色系土器の「古備型土質質土器碗」に通じる要素をきわめて強く有す白色土器や同土器の内面を黒色化したような外面白色系の黒色土器が含まれる点などから、津島岡大遺跡の新段階の土器群は、鹿田遺跡の土器群成立期直前に近い時期と想定できる。実年代の比定は困難であるが、鹿田遺跡の資料を11世紀中頃～後半とするならば、やはり11世紀初頃前後にあたるであろう。古段階は、溝の使用が連続的であり、基本的な様相も一致することから、10世紀後半～末と考えたい。新段階にごく近い時期の資料は周辺では乏しい状況にあるが、百間川米田遺跡井戸140<sup>(13)</sup>（岡山市）の資料があげられる（図81—12～16）。ここではI L群は須恵器 Bc と白色土器 Bb そして黒色土器 Bb で構成され、須恵器の体部器高が特に高い状態を示す。また、II L群・III Sm 群は土器器 Aa ④・⑤タイプである。ただ、I 群の須恵器（同一12）がcタイプである点や、白色土器と考えられるもの（同一14）が、黒色土器に近い要素を示す点、法量面でII Ms 群が認められない点などに差があることは確かである。しかし、こうした土器形態の差は、この段階のI群に認められる多様性の一環と捉えられるし、法量の欠落は若干の時期差の可能性もあるが、井戸という遺構の性格も考慮する必要があるかもしれない。以上のように評価すると両者の土器様相は種類構成や技術面そして形態面などで共通しており、津島岡大遺跡の特徴が、少なくとも狭義の岡山平野には広がっていたことが予想される。そのほかに、古段階に近いと想定される遺跡では、やや内陸部に入るが、斎宮遺跡墓10<sup>(14)</sup>（山陽町）などがあげられる。同遺構からは土器器がまとまって出土

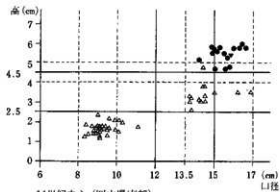
しており、法量はⅡ SI群に集中する。ただし、形態はAaタイプではあるが、底部形態が津島岡大遺跡のものとは異なる。こうした点にも在地性の強い生産体制の存在を窺うことができる。



a. 9世紀中心 (岡山県南部)



b. 10世紀中心 (岡山平野周辺)



c. 11世紀中心 (岡山県南部)

- 須恵器 b      ▲ 土師器 b      ■ 黒色土器 b
- 須恵器 a      △ 土師器 a・c      ● 白色土器 b

図82 時期別法量分布図

表25 9世紀代法量別形態表 (岡山県南部)

法量(群)	高台(b)		高台(a)・底部成形	
	須恵	土師	須恵	土師
I	Ls	△	B	---
	Ms	△	A・B	---
	MI	△	A	⑤
II	Ls	△	---	A①
	Ms	△	A・B	A①
	MI	△	A	A①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
III	Ls	△	---	A①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
	Ms	△	A	A①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
	MI	△	A	A①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

〈資料採取遺跡一覧〉

- 庭田遺跡
- 第1次調査井戸20
- 第2次調査井戸4
- 第3次調査河道1
- 第4次調査河道C
- 鈴崎場1号窯
- 南古市場遺跡
- 石岡川米田遺跡井戸118
- 津寺遺跡野上田調査区
- 6区土器産まり

表26 10世紀中心の法量別形態表 (岡山平野周辺)

法量(群)	高台(b)		高台(a・c)・底部成形	
	須恵	土師	須恵	土師
I(高)	Ls	A・B	---	Bc⑤
	MI	---	B	Bc⑥
I(低)	Ls	---	B	---
	MI	---	B	---
II	Ls	---	---	Aa①; Aa②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
	Ms	A・B	B	Aa①; Aa②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
	MI	---	---	Aa①; Aa②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
	SI	---	---	Aa①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
III	Ms	---	---	Aa①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺
	SI~m	---	---	Aa①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

〈資料採取遺跡一覧〉

- 津島岡大遺跡
- 第3次調査D4
- 第6次調査SD13
- 第9次調査溝22~29
- 庭田遺跡第5次調査井戸2・3
- 石岡川米田遺跡井戸140
- 平岡西遺跡包含層
- 伊田沖遺跡C地区小堀納入要
- 高倉遺跡基10

表27 11世紀代法量別形態表 (岡山県南部)

法量(群)	高台(b)		高台(a・c)・底部成形	
	須恵	土師	須恵	土師
I群	Ls	B	Bc⑤	---
	(~MI)	---	---	(Aa①)
II群	(Ls~)	---	---	(Aa④⑤)
	MI	---	---	Aa④⑤
III群	(SI~)	---	---	(Aa④⑤)
	Sm	---	---	Aa④⑤

〈資料採取遺跡一覧〉

- 庭田遺跡第1次調査井戸21・22
- 庭田遺跡第2次調査土壇123
- 庭田遺跡第5次調査土壇15
- こうもり塚古墳、下二輪遺跡

## 3 土器様相による10世紀段階の位置づけ

10世紀の土器様相とは、古代の土器変化の中でどのような位置づけになるのであろうか。紙面の都合もあり、ここでは簡単に予察を行うに留めたい。

9世紀を中心とする遺物と11世紀を中心とする遺物の法量分布をみてみよう(図82)。法量的変化はⅡ Ms 群・Ⅲ M～L 群の消失とⅢ Sm 群の成立、それに加えてⅠ群における(MI～)Ls 群への集中にある。前者は新たな器種構成の成立であり、後者は法量面での単純生産化を示す。

9世紀段階ではⅡ群やⅢ M・L 群にみるように法量の細分化が目立つ。また、各群の構成は、Ⅰ群では須恵器への限定的傾向を示し、Ⅱ・Ⅲ群に関しては土師器が各群の中心をなしつつも、須恵器・黒色土器もそれぞれ一定量含む。形態的にも各群に有高台bタイプが認められる。すなわち、深い容器(Ⅰ群)は須恵器bタイプが主体という作りわけはあるが、浅めの容器(Ⅱ・Ⅲ群)に関しては、細分化された法量の各タイプを、各工人がそれぞれに製作するという総合的生産体制にある。それに対して、11世紀代の法量分布は、法量の集中とⅠ群構成種が白色系土器一種類であるのに加えて、Ⅱ・Ⅲ群も土師器のみの構成になるという単純化が9世紀にはみられない特徴である。単一法量単一種という生産の実施である。こうした、新たな白色系土器をⅠ群に据えた構成は、備前に限らず備中にも同様に広がる。このように9世紀と11世紀では大きな変化として捉えられるが、その両時期に挟まれる10世紀の状況はどのように評価できるであろうか。

まず、Ⅰ群では、須恵器を中心にMI～Ls 群に分布する。この集中度は、9世紀にみられる分散的状況とは明らかに異なり、11世紀代に共通する。しかし、Ⅲ群にみるLs 群・MI 群・Ms 群・SI 群の分布は、9世紀段階の主要法量を保ちつつ、11世紀段階に顕著な小形品出現の動きを示す点で、まさに両時期の中間的姿といえる。Ⅲ群では前段階の法量分布域はほとんど姿を消し、11世紀代の分布域に近い範囲に形成されつつある状況が読みとれる。こうした動きは、10世紀を挟むことによって9世紀から11世紀にかけて、実にスムーズに変化する。構成種に関しても、bタイプや須恵器・黒色土器の法量的限定化にみる単純生産への移行が10世紀段階には進行している点も両時期間の状況として重要であろう。また、両時期にない特徴として、土師器の技法面での細分化とⅠ群にみる焼成面での多様性、そして、須恵器的特徴の減少化と土師器への須恵器系技術の導入にみる両者の接近が段階的に認められる点があげられる。それは、土師器生産側では効率化への動きであり、須恵器生産側では小形容器生産の末期的な状態と考えられる。こうした複様な状況には需用者側の新たな価値観に合わせた生産者側の変化に要因が求められる。

すなわち、10世紀には9世紀以前の土器生産体制の揺らぎに伴い、効率性を高めた単純生産を目指した生産者側の新たな動きが活発化すると考えられる。各地域ごとに複雑に交錯する技

術的・形態的多様性はその現れである。そして、11世紀初頭前後には、一連の動きの中からでてくる土器自体の機能の独立化に伴う作りわけが工人差として出現するが、依然として容器の単一化は達成されておらず古い様相を残す。それが生産体制の効率化と統合化の到達点として達成されるのが11世紀的な様相ではなかろうか。10世紀は、各地域の各工人がより効率的な生産体制を再編成していくために、従来の枠組みから脱却し新たなものを生みだそうとする摸索期といえそうである。そして、その到達点といえる11世紀は、それが新たな社会の出発点といえるどうかについては今後の問題にしていきたい。ただ、従来の旧国単位内の枠組内での動きが10世紀までは存在している中、11世紀段階にはそれを越えた商業圏ともいえる流通域に変貌する点には、新たな世界の展開をみることができよう。(山本悦世)

## 註

1. 文献7
2. 文献8
3. 文献9
4. 岡山大学歴史文化財調査研究センター「岡山大学構内遺跡調査研究年報」12 1995
5. 山本悦世「第4章考察 1. 備前地域における古代後半の土器様相」文献8
6. 註5において分類を行う上での基準を示しているが、今回、それと異なるものになった部分を押しておこう。器種：前回の報告表3で器種名「杯」「碗」「皿」とA・B・C形態を使用した。今回は、基準数値は異なるが「碗」はI群、「杯」はII群、「皿」はIII群にそれぞれ対応する。また、図78にあるようにA形態をaタイプ、B形態をbタイプ、C形態をcタイプとしている。底部成形法に関しては、①aタイプは①タイプに、①bタイプは②タイプに修正し、③・④・⑤タイプは共通する。前回②タイプとしたものは使用していない。
7. 例えば、汁物のような形を保ちにくいものであれば深さが必要であるし、扁平で形を保つものであれば浅いものが便利である。このように深い浅いかが内容物の規定に影響を与える。口径は、その量を左右する用途的問題につながるように思われる。
8. 体部器高の基準数値が、前回報告の中のものとは異なる数値を示している。訂正しておきたい。
9. 文献9 65～71頁
10. 同分布域には須磨器 Ab が含まれている。しかし、これに関しては、台形の高台断面を示し、時期的に古いタイプの混入品の可能性が高いように思われるため、除外している。
11. 註5 前回の報告では本遺跡の土器群が新古2段階の分離ができなかったため一括して扱った。その整理過程で、Aa ①・②・③タイプを時間的流れのとして捉えての4段階を設定した。しかし、今回これらが時間軸ではなく生産者の違いを反映する要素が強いものであること、つまり、同時併存する関係をつかむことができたため、2段階に修正しておきたい。時期的評価に関しては大きな修正はない。
12. 文献3
13. 文献4
14. 文献12
15. 今回、総社平野を中心とした備中の状況にふれることができなかったが、やや大形容器（I群・II M～L群）の構成面の違いをみせる。これに関しては、機会があれば紙面を改めて述べたい。

表3～5文献一覧

1. 鹿田遺跡第1次調査井戸20～22・包含層、第2次調査井戸4・土壌123  
：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡」Ⅰ 1988
2. 鹿田遺跡第3次調査河道1・第4次調査河道C  
：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡」Ⅱ 1990
3. 鹿田遺跡第5次調査井戸2・3・土壌15：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡」3 1983
4. 百間川米田遺跡井戸118・140：岡山県古代古備文化財センター「百間川米田（田当麻）遺跡」3 1989
5. 鐘鉾1号窯：武田恭彰「古代上郷生産についての一考察（1）」『古代古備』第11集 1989
6. 南古市場遺跡：岡山市教育委員会のご厚意で実見させていただいた。
7. 津島岡大遺跡第3次調査D4：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「津島岡大遺跡」3 1992
8. 津島岡大遺跡第6次調査SD13：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「津島岡大遺跡」6 1995
9. 津島岡大遺跡第9次調査溝22～29：岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「津島岡大遺跡」10 1998
10. 平岡西遺跡包含層：岡山県御津町教育委員会「平岡西遺跡」Ⅰ 1991
11. 伊田沖遺跡C地区小畑納入墓：岡山県御津町教育委員会「伊田沖遺跡」1988
12. 斎宮遺跡基10：岡山県古代古備文化財センター「斎宮遺跡」1996
13. こうもり塚古墳・下三輪遺跡：武田恭彰「古墳の再利用について」『水島機械金属工業団地協同組合西田地内遺跡群』 総社市教育委員会 1991
14. 津寺遺跡野上田調査区6区土器溜まり：岡山県教育委員会「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」9 1994

## 第6章 総 括

今回の9次調査は、第6次調査の地区と隣接しており、直接隣り合う調査区間の対応関係を検討する最初の調査である。したがって、6次調査において注目された点が、さらに東側へどのように展開しているかがまず最も問題となった。今回の報告では両地区の対応関係にも注意しつつ報告している。また、現在までに津島地区だけでも17次に及ぶ調査が実施されており、資料の蓄積は膨大なものとなっている。本報告の考察では今回の調査の成果を中心に、広く構内全体の問題、さらには周辺の問題にまで視野をいれて分析をおこなっている。以下で、今回の調査の成果を総括することにした。

時代の古い順に列記していくと、まず縄文時代後期の貯蔵穴群が注目できる。河道の底近く群集する貯蔵穴群は、6次調査と合わせて23基を数える。構内でも最も数の多い地点の一つである。貯蔵穴の位置する河道の底の地形は、南西側にむかってたわみを形成しており、やや水のよどんだところを利用する低湿地型貯蔵穴であると考えられる。なかにはカゴ状編み物であるアンベラが出土したものもあり、カゴに入れて水漬けしていた状況が推定できる。なかからは他に、種子や堅果類も出土している。最近、本調査区の東側において第15次調査が行われ、今回の調査よりも良好な状態で河道から多数の貯蔵穴が検出された。時期も縄文時代後期だけでなく、弥生時代早期の段階のものもみられる。今後、本調査区のデータも含めて、当時の生業活動を多角的に分析することが可能となろう。

微高地上においては、西日本では珍しい溝を検出したのも重要な成果である。すでに縄文時代の溝については東日本で近年問題となっているが、近接する17次調査でも縄文後期の溝を検出しており、今回の調査区の溝との関係やどのような機能をもっていたか今後問題となろう。

弥生時代については、前期においては溝を幾度か付け替える状況がみられ、また前期でも各時期の遺物が出土しており、継続的な土地開発のあったことが推測できた。第5章第1節では6次調査の成果を踏まえ、開発の開始時期と変遷について時期毎の様相を構内全体において検討した結果、まず早期から前期に移行する段階に突帯文土器の終末と前期初頃の土器の共時性を認め、両者の土器を使用した集団の、領域の重複する棲み分けを想定し、かなり早いスピードで融合が進んだことを指摘した。そして、前期中葉以降に遺跡数の増加していく過程を明らかにした。構内における開発の諸段階の様相は、岡山南部平野全体でも共通してみられ、特に狭い領域と少ない可耕地の条件下での、開発の増大による社会的状況の変化が浮き彫りになった。構内遺跡の調査成果が岡山南部平野における様相の検討にも、重要な指針を与え得ることが判明したのは一つの成果であろう。(小林)

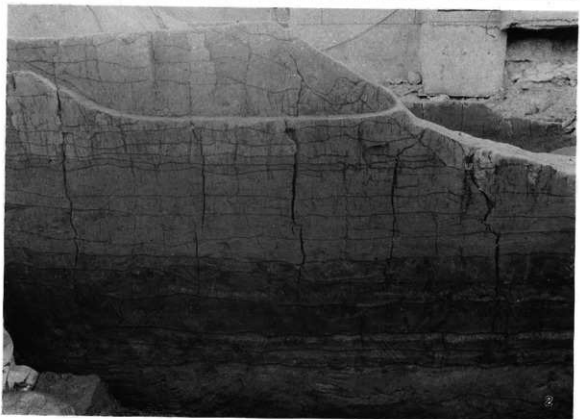
古墳時代の遺構は前半期、後半期の2時期の水田遺構とそれに伴う溝群を検出した。前半期の水田は地形の傾斜にあわせて水田畦畔を作っている。これは弥生時代にみられた耕地区画パターンを踏襲している。これに対して、後半期の水田畦畔は地形の傾斜がわずかながら残るなかで耕地の区画を真北志向のものに変化させている。今回調査した古墳時代後半期の水田遺構は古代の条里制との関係を考えるうえで重要な資料である。第5章第2節では上層の遺構との関係、他の遺跡との比較、6世紀の津島周辺の社会状況、方位の検討から、古墳時代後半期の正方位方格地割水田が直ちに後の条里に連続しない可能性を指摘している。しかし、耕地再編成の主体や、その性格の解明など積み残した課題も多く、今後の発掘調査で明らかにしていく必要がある。

また、今回の調査の成果の一つに、古代の条里の坪境にあたる古代の溝の4度にわたる掘削過程を明らかにできたことがある。この発掘調査の成果は溝出土遺物の型式学的な研究にも大きな成果を与えた。第5章第3節では、溝出土遺物の型式学的な分析による編年を行っているが、重複関係にある新旧溝の分離により層位的な土器のまとまりを捉えることができ、10世紀後半から11世紀初頭頃の基準となる土器編年を確立した。そして、土器の詳細な分析によって、土器における古代から中世への変化の背景として、土器生産の主体である丁人の動向から生産体制の変化に求めた。以上の成果は古代の土器編年と古代から中世への時代変化を考える上で大きな成果といえよう。

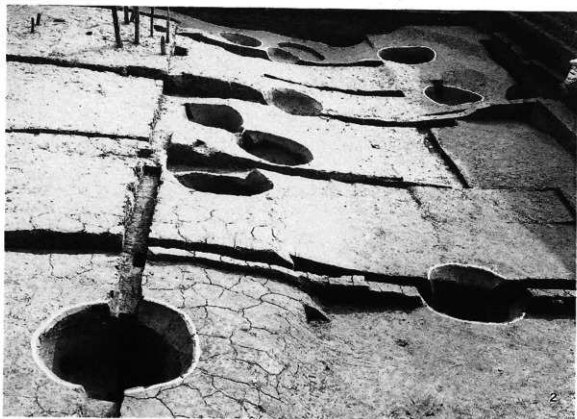
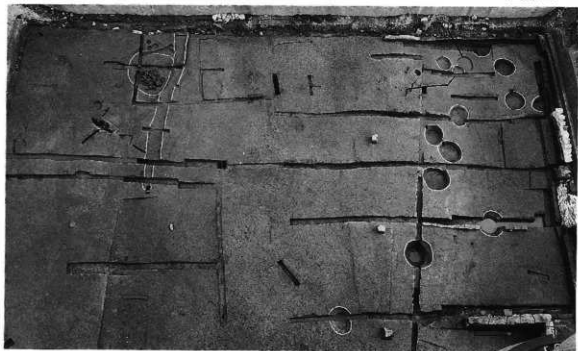
本章の冒頭で述べたように、今回の発掘調査は津島岡大遺跡では初めて既調査地点の隣接地点を調査したものであったが、各遺構面ともほぼ前回の調査成果を追認し、また、新たな所見を得ることができたものであった。しかし、一方で検出面や遺構の連続性が不整合になるものもあり、今後の調査に課題も残した。

今回の調査地点周辺は津島岡大遺跡では最も調査回数、調査面積が広く、この周辺の調査成果は確実に蓄積されている。今後はこの成果をまとめ、全体像を明らかにしていく作業が必要となろう。(野崎)

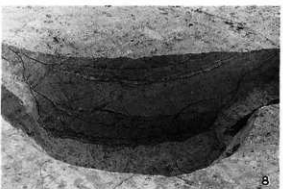
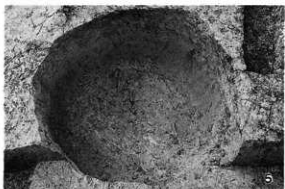
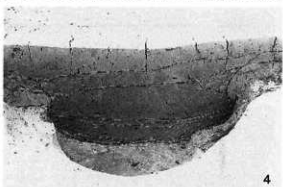
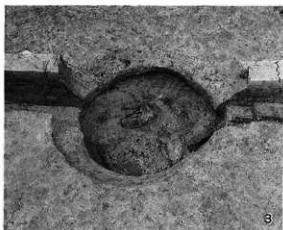




1 - 調査区南北断面 2 - 調査区東西断面



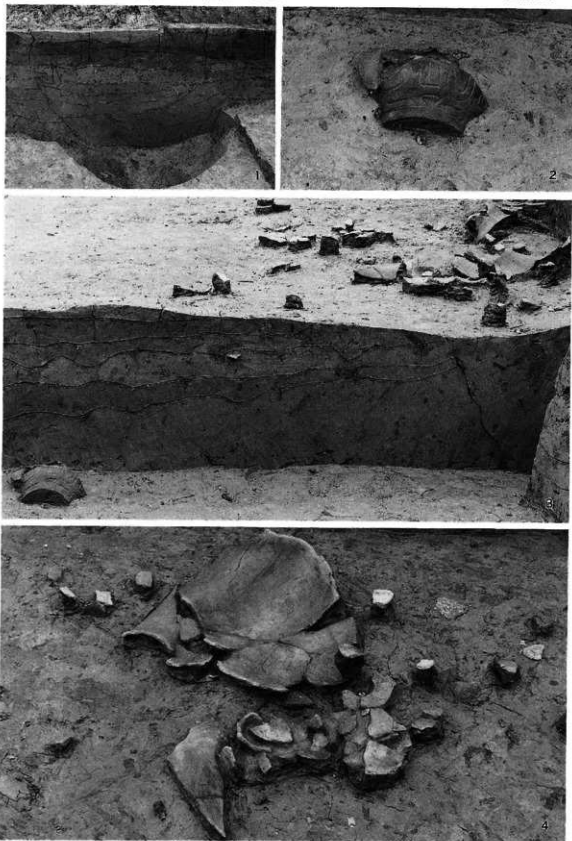
1- 全景 2- 貯蔵穴完備状況



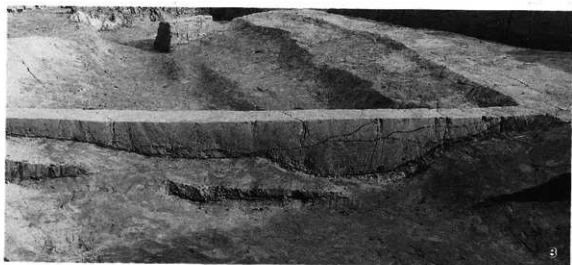
1・2- SP01 3・4- SP02 5・6- SP03 7・8- SP04



1・2- SP05 3~5- SP06・07 6~7・8 (アンペラ出土状況)- SP08 9・10- SP09



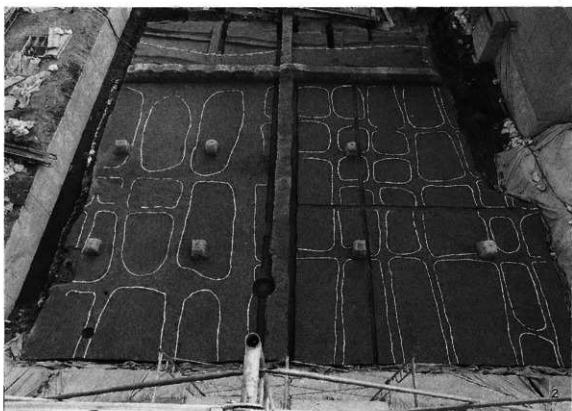
1 - SP10 2 - 23b層遺物出土状況 3 - E区遺物出土地点断面・出土状況 4 - E区22b層出土状況



1-18層溝4・5 2-19層溝2・3・14層水田 3-溝4断面

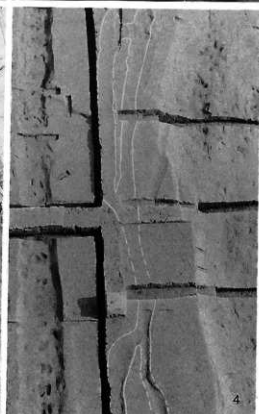
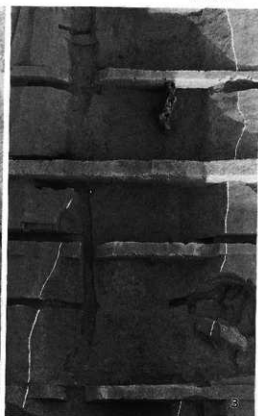


1・2-13層水田 3(全景)・4(断面)・5(出土状況)-11層下層溝群 6-11層水田



1- 10層水田・溝20 2- 9層水田・溝群





1- 溝22~24

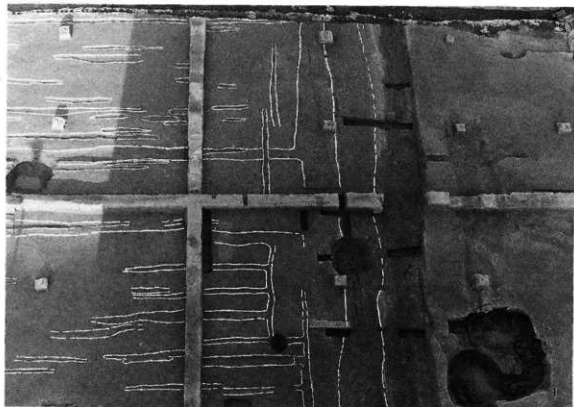
溝25・27・28

4- 溝26

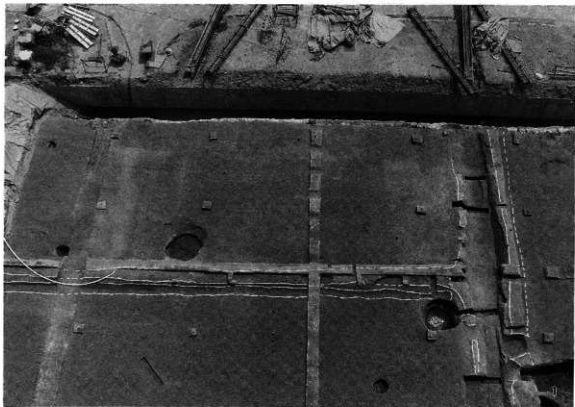
3- 溝29



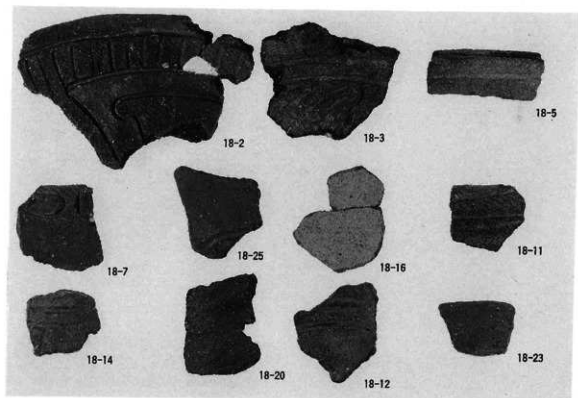
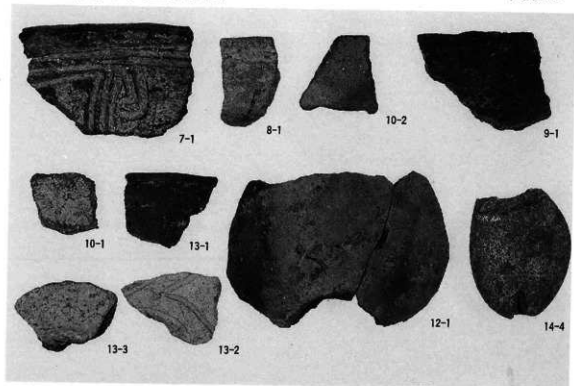
1- 溝群断面 2- 7層全景 3- 溝30断面



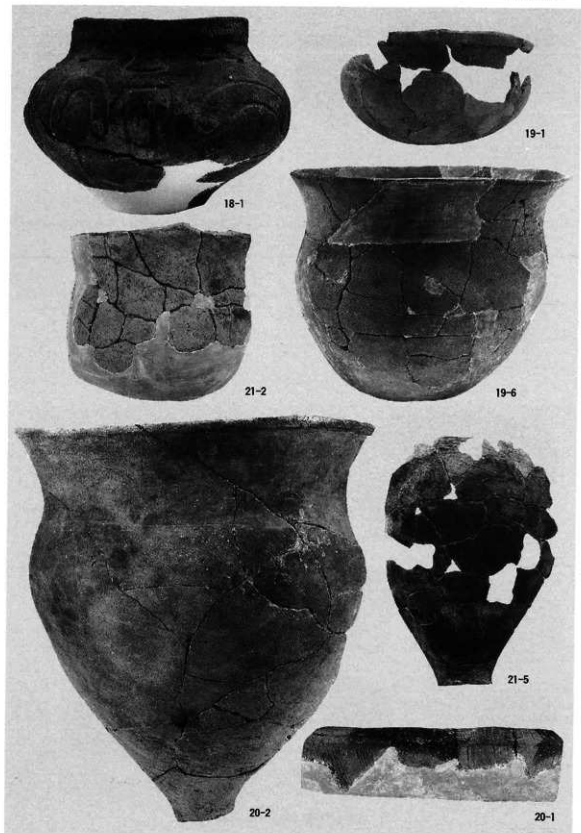
1- 5層全景 2- 溝31断面



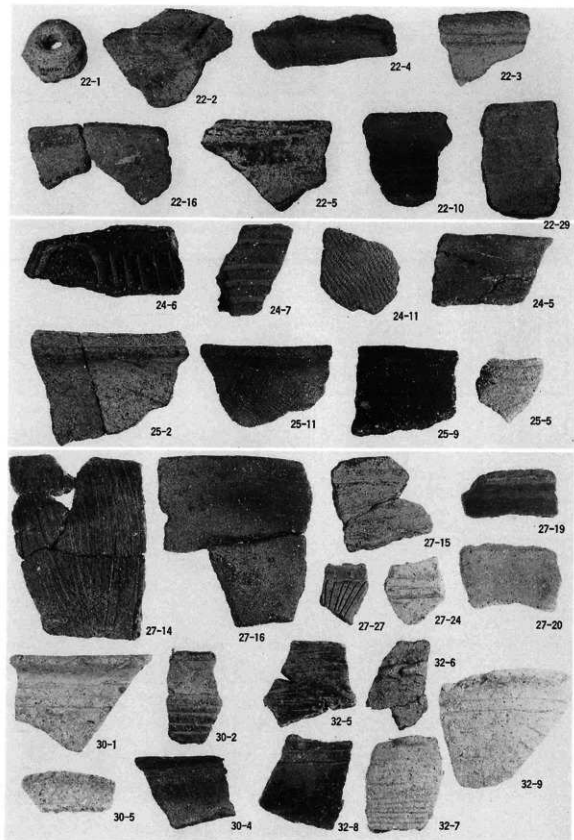
1- 3層全景 2- 溝33断面



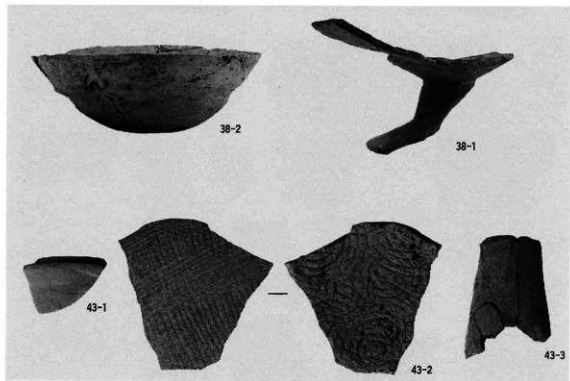
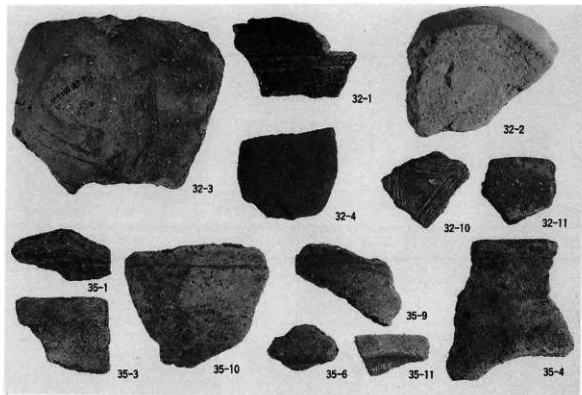
縄文時代後期土器・石器 (縮尺1/2)



縄文時代後期出土土器 (縮尺1/4)

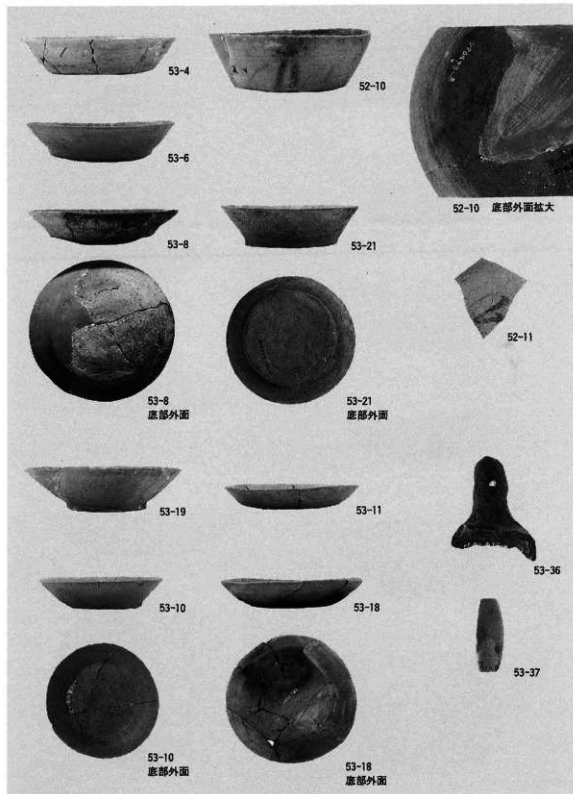


縄文時代後期出土土器・弥生時代出土土器 (縮尺1/2)

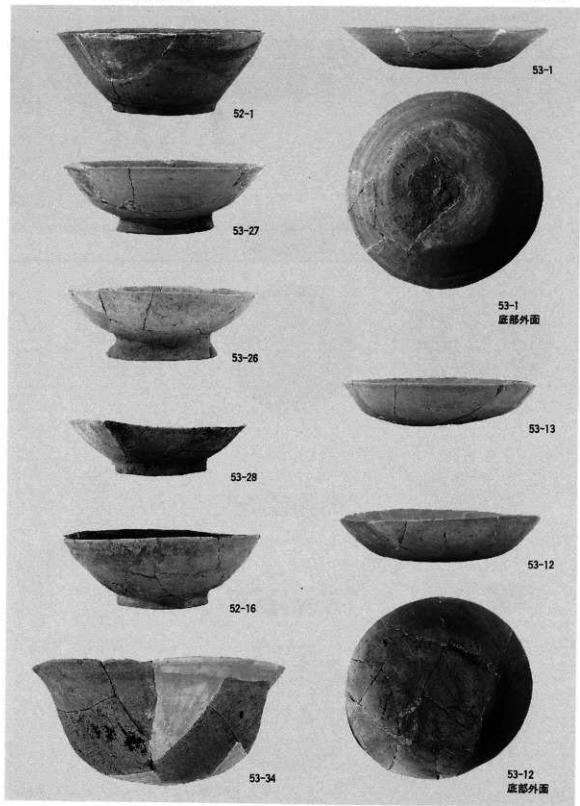


弥生時代出土土器・古墳時代出土土器・須惠器 (縮尺1/2)

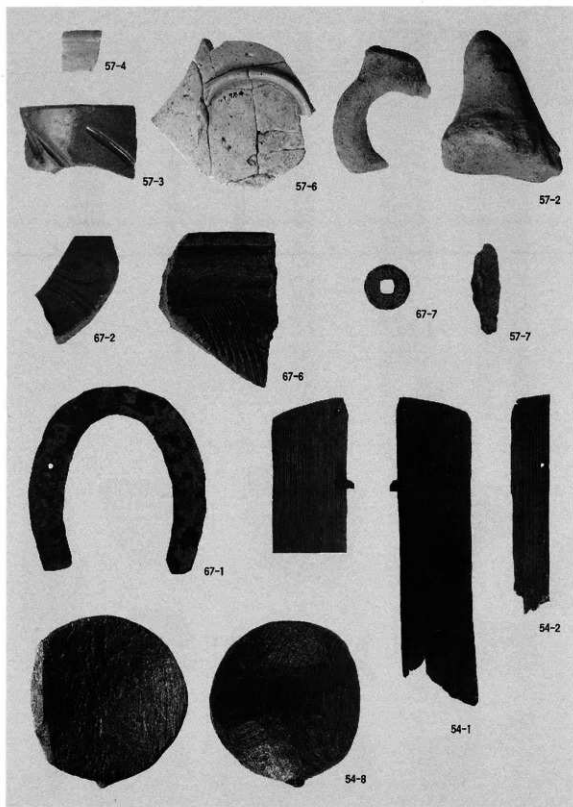




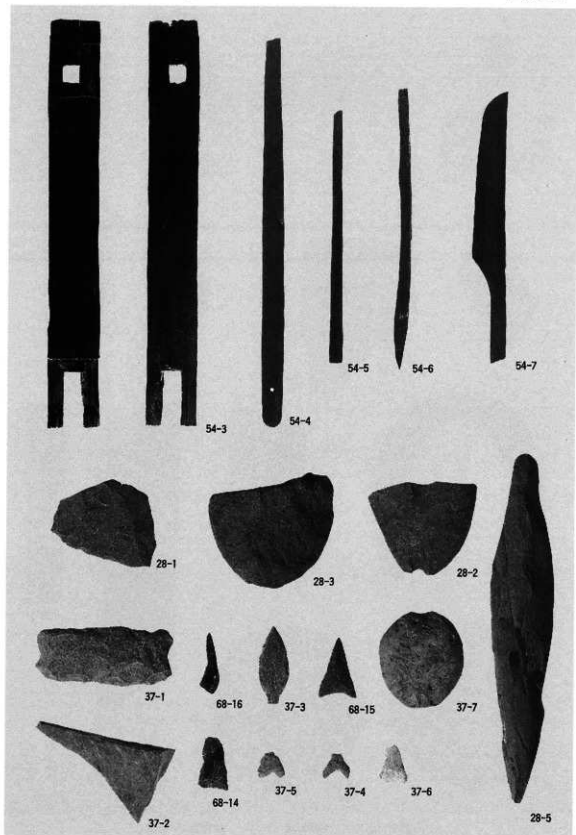
溝22~29出土遺物 (52-10は縮尺2/3, 52-11は1/2, 他は1/3)



溝22~29出土遺物 (縮尺1/3)



中・近世出土遺物・金属製品(縮尺1/2) 木製品(縮尺1/3)



木製品 (縮尺1/3) 石器・石製品 (縮尺1/2)